仙台市文化財調査報告書第103集

元袋Ⅲ遺跡

―奈良・平安時代集落跡調査報告―

1987年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第103集

元袋（もとぶくろ）Ⅲ遺跡

１９８７年3月

仙台市教育委員会

序

仙台市内には原始の時代から近世に至る数多くの遺跡がみられ、悠久の昔より人々が生活をいとなみ、文化を築きあげてきたことが窺われます。とりわけ、本報告の元袋Ⅲ遺跡が位置する富沢・大野田地区には縄文時代から連綿と続く遺跡群がみられ、原始古代の生活の生きざまが深く地に眠りつづけている所とも言えます。しかし、近年の相次ぐ開発事業に伴って遺跡のおかれている環境は年毎に難しくなっていることも否めず、事前の発掘調査による記録保存に努力しているというのが現状であります。先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図り、後世に継承して行くことは私たちに課せられた責務と考えるところであります。

此度の調査では奈良・平安時代の住居跡や数多くの土器が出土し、当時の生活を知る発見がなされ、仙台の古代の歴史を知る貴重な成果があげられました。本書はその成果を大成し広く公開するものであります。

最後になりましたが、調査ならびに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

昭和62年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は宅地造成工事に伴う元袋Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。

3．本書掲載の図1は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を複製使用した。

4．本書記載の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。

5．本報告の執筆・編集は渡部弘美が行った。

6．本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

調 査 要 項

遺跡名称：元袋Ⅲ遺跡（仙台市文化財登録番号C-267）

所 在 地：仙台市大野田字元袋・袋東地内

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課

担当職員：試掘調査　篠原信彦　吉岡恭平

本 調 査　渡部弘美　高橋勝也

調査期間：試掘調査　昭和58年12月3・4日

本 調 査　昭和61年4月10日～7月22日

調査対象面積：約4,160 m²（発掘面積約1,820 m²）

調査協力：地権者　小林幸作　株式会社奥村組

調査参加者：中富　洋　佐野　弘　岩渕信博　木村勝彦　山内昌広　佐藤朋弘　伊藤　司
安部雅巳　須藤　一　赤川千広　阿部孝一　阿部清太郎　青山諒子　須賀栄子
板橋スエノ　佐々木恵子　早川裕子　最上浪子　森ナツヨ　壱岐豊子　沼田絹子
菅井美枝子　高橋とみ子　今野淑子　大槻明美　小川良子　阿部美代寿
山田やす子　阿部いしよ　大里美恵子　小沼ちえ子　鈴木つや子　早坂みつえ
阿部すえ子　角田貴男　若生久美　本多由美　佐々木敬之

本 文 目 次

序文

例言

調査要項

Ⅰ．はじめに……1

1．調査に至る経過……1

2．調査の方法と経過……1

Ⅱ．遺跡の位置と環境……1

1．地理的環境……1

2．歴史的環境……2

Ⅲ．発見遺構と出土遺物……8

1．住居跡……8

2．竪穴遺構……28

3．掘立柱建物跡……30

4．土坑……33

5．溝跡……39

6．その他……40

Ⅳ．出土遺物について……43

1．出土遺物の種類と分類……43

2．出土遺物の組み合わせと年代について……49

Ⅴ．発見遺構について……54

1．住居跡について……54

2．掘立柱建物跡について……54

3．土坑について……55

4．溝跡について……56

5．その他……56

Ⅵ．墨書土器と文字について……57

Ⅶ．まとめ……58

図・表・写真目次

図1　周辺の遺跡……3
図2　遺跡周辺状況……4
図3　遺構配置……5
図4　F区基本層位……7
図5　SI1 住居跡……9
図6　SI1 住居跡出土遺物(1)……11
図7　SI1 住居跡出土遺物(2)……12
図8　SI2 住居跡……14
図9　SI2 住居跡出土遺物(1)……15
図10　SI2 住居跡出土遺物(2)……16
図11　SI18 住居跡出土遺物……17
図12　SI18 住居跡……18
図13　SI19 住居跡……20
図14　SI19 住居跡出土遺物(1)……21
図15　SI19 住居跡出土遺物(2)……22
図16　SI19 住居跡出土遺物(3)……23
図17　SI19 住居跡出土遺物(4)……24
図18　SI20 住居跡……25
図19　SI20 住居跡出土遺物……26
図20　SI21 住居跡……27
図21　SI21 住居跡出土遺物……28
図22　SI22 竪穴遺構……29
図23　SI22 竪穴遺構出土遺物……29
図24　SB10 建物跡……30
図25　SB23 建物跡……31
図26　SB24 建物跡……32
図27　各土坑平面・断面(1)……35
図28　各土坑平面・断面(2)……36
図29　SK4 土坑出土遺物(1)……37
図30　SK4 土坑出土遺物(2)……38
図31　SK5 土坑出土遺物……39
図32　溝跡・河川跡断面……41
図33　その他の遺構・遺構外出土遺物……42
図34　墨書文字……57

表1　遺構出土土器分類……52
表2　住居跡観察表……54
表3　建物跡観察表……55
表4　土坑観察表……55
表5　溝跡観察表……56

写真1　遺跡航空写真……61
写真2　調査前状況（北側から）……62
写真3　深掘り断面（F-13・14区）……62
写真4　深掘り断面（F-5・6区）……62
写真5　住居跡群全景……63
写真6　SI1 住居跡全景……63
写真7　SI1 住居跡ピット7断面……63
写真8　SI1 住居跡ピット15土器出土状況……64
写真9　SI2 住居跡全景……64
写真10　SI2 住居跡カマド周辺土器出土状況……64
写真11　SI2 住居跡ピット2断面……65
写真12　SI2 住居跡ピット2土器出土状況……65
写真13　SI18 住居跡全景……65
写真14　SI18 住居跡カマド状況……66
写真15　SI18 住居跡カマド周辺土器出土状況……66
写真16　SI18 住居跡ピット5土器出土状況……66
写真17　SI19 住居跡全景……67
写真18　SI19 住居跡カマド全景……67
写真19　SI19 住居跡ピット1断面……67
写真20　SI20 住居跡全景……68
写真21　SI20 住居跡カマド全景……68
写真22　SI21 住居跡全景……68
写真23　SB10 建物跡全景……69
写真24　SB24 建物跡全景……69
写真25　SK4 土坑全景……69
写真26　SK4 土坑遺物出土状況……70
写真27　SK5 土坑全景……70
写真28　SK5 土坑遺物出土状況……70
写真29　SD6 溝跡断面（E-7区）……71
写真30　SD6 溝跡北側部全景……71
写真31　SR33 河川跡断面……72
写真32　SR33 河川跡状況……72
写真33　出土遺物1（土師器）……73.
写真34　出土遺物2（土師器）……74
写真35　出土遺物3（土師器）……75
写真36　出土遺物4（赤焼土器・土師器）……76
写真37　出土遺物5（土師器・須恵器）……77
写真38　出土遺物6（石製品・瓦）……78
写真39　出土遺物7（土製品・金属製品）……79

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経過

元袋Ⅲ遺跡の所在する富沢・大野田地区は、富沢の土地区画整理事業に伴い交通網の整備拡充がはかられ急速に都市化並びに宅地化が進みつつある。当遺跡周辺はその中にあっては田畑も多くみられる地域であった。

昭和59年、地権者である小林幸作氏が当遺跡南側隣接地において宅地造成計画を立て届出を仙台市に提出した。当地点は地形等からみて当遺跡に包括される可能性が大きく、遺構等の存在が予想されたため、協議の結果、試掘調査を行い今後の判断資料とすることにした。成果として、試掘トレンチ内において住居跡と考えられる方形の落ち込みを二箇所・土器類の出土を確認し、南側に遺跡の範囲が広がることが判断された。この結果を踏まえて再度協議をし、宅地造成の道路敷き部分を中心に記録保存を目的とした事前の発掘調査を昭和61年4月より実施する事になった。

２．調査の方法と経過

調査は掘削をうける道路部分を対象とし、調査区の設定として南北に延びる道路の西側ラインを基準（真北線から西へ約3度偏する）とした6ｍ方眼のグリッドを開発対象区域全面にかぶせた。グリット名は南北軸に算用数字、東西軸にアルファベット文字を用いた名称を使用した。当初、調査区はＦラインと12･13ラインをとおる変形のト形で進めたが、必要に応じて拡張を行っている。尚、本調査区とは別に遺構の広がり等を知る上での資料を得るために確認トレンチを6本設定している。

調査は表土全面を重機で排除し、のち人力で遺構確認を進めていった。現状が畑地で50cm前後の耕作を受けており、遺構の残存状態は部分的に不良な箇所もみられた。遺構の種類として住居跡・建物跡・土坑・溝跡などが検出されているが、西側部に集中しており東側部には河川跡・不整形な土坑が散在するのみであった。調査も中盤にはいり、開発に付随する共同住宅地部分の調査も追加実施することになり、G～K-10～12区の拡張を行っている。

調査も終了にちかづいた7月5日には調査現場で説明会を開催し、一般に公開した。屋外調査は7月22日に終了した。

Ⅱ．遺跡の位置と環境

１．地理的環境

当遺跡は東北本線長町駅より南西へ約1km、笊川が東流し大きく南側へ流路を変える地点、

仙台市大野田字元袋・袋東地内に所在する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山脈から分岐し延びる青葉山丘陵・高舘丘陵が東側へ張り出し、両丘陵を名取川が東流開析し支流となる広瀬川を合流し太平洋に注いでいる。丘陵端から太平洋にかけて広大な面積をもつ沖積平野が両河川により形成されるが、地理的区分で沖積平野の「宮城野海岸平野」に含まれる。尚、名取川と支流となる広瀬川の合流点付近の河間が低地となり「郡山低地」と称している。当地域はこの「郡山低地」の西側部に位置し、名取川及び支流河川が形成した自然堤防・後背湿地がみられる。

当遺跡は名取川の支流となる笊川の右岸、馬の背状に東西に延びる自然堤防上に位置する。標高は9～10 m 前後で、周辺の現況は宅地及び畑地となっている。笊川左岸の北側一帯には後背湿地が広がっており、過去には広大な面積をもつ水田地帯が広がっていた。笊川以南は徐々に標高を低め名取川へ続いている。

2．歴史的環境

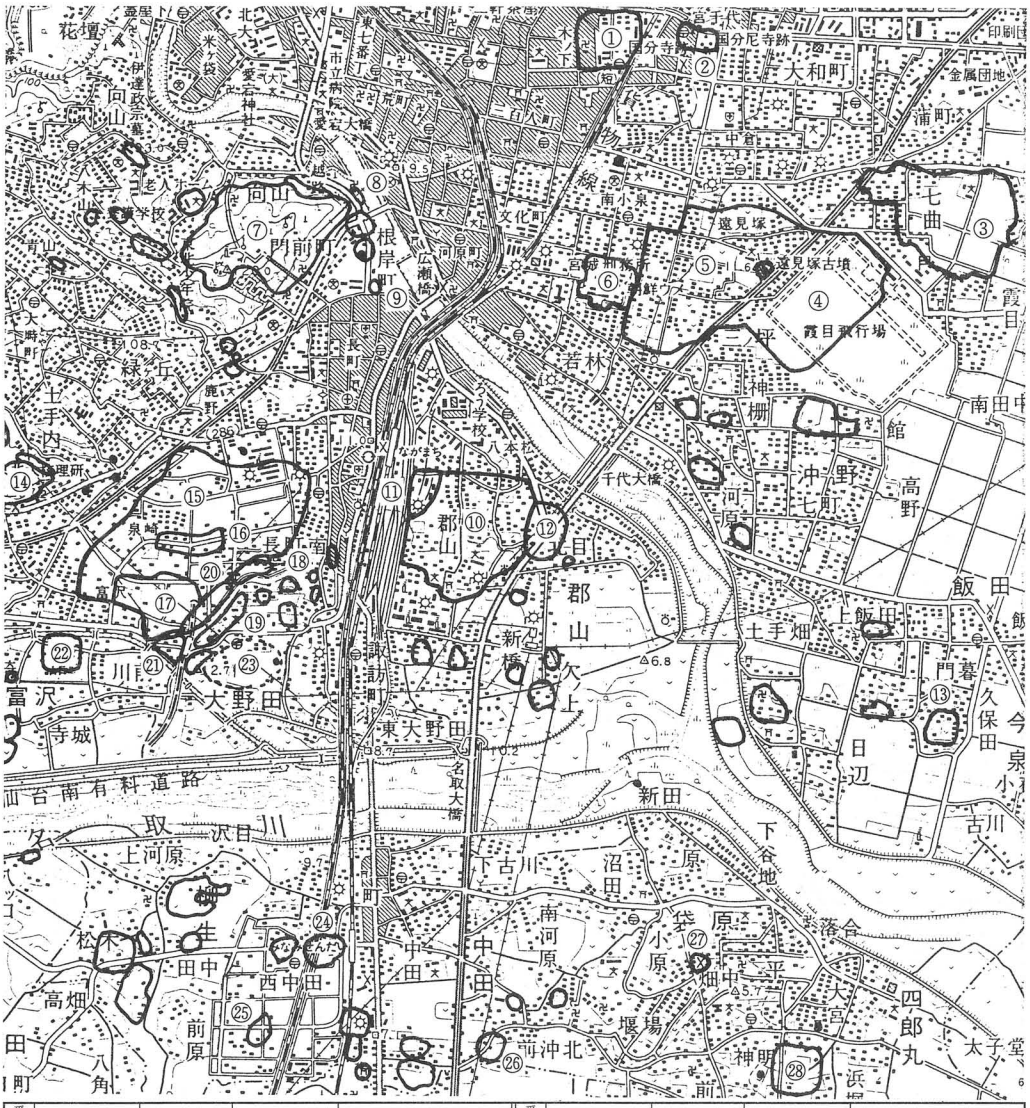
元袋Ⅲ遺跡が所在する大野田・富沢周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布している。名取川が丘陵を開析し扇状地状に広がる山田・鈎取地区まで更に範囲を広げて観ると、旧石器時代から続く各時代の遺跡が連綿として存在することが観取される。

旧石器時代の遺跡としては、図の外になるが当遺跡西方約 5 km の地点、名取川左岸の台地上に山田上ノ台遺跡・北前遺跡がある。上町段丘（台ノ原段丘の説も有り）に対比される河岸段丘面（標高 50 m 前後）に位置する。前期・後期旧石器時代の文化層が確認され、三稜尖頭器・ブレイド等の石器が検出されている。

縄文時代の遺跡は丘陵地から沖積地面の広範囲な地域に分布している。代表的な遺跡としては山田上ノ台・三神峰・六反田・図外になるが上野遺跡がある。六反田遺跡を除く 3 遺跡はすべて台地上に位置し、三神峯遺跡では早期～中期の遺構・遺物が発見され、山田上ノ台遺跡では中期の住居跡が 40 軒程確認されている。六反田遺跡は笊川右岸の自然堤防上に位置する。地表下約 2 m の地点で中期・後期の遺構・遺物が検出されている。上層において奈良・平安時代の文化面が存在し、周辺で普遍的にみられる重層構造の遺構面をもつ。

弥生時代の遺跡としては下ノ内浦・西台畑・南小泉・富沢遺跡等がある。多くは中期の時期に属し、立地として沖積地に位置する。下ノ内浦遺跡では土坑・竪穴遺構が検出され、炭化米・アメリカ式石鏃等が出土している。生産遺構が主となる富沢遺跡では近世から弥生時代まで溯る水田跡が検出されている。桝形囲式期・十三塚式期の水田跡が重層且広範囲に存在することが確認されている。

古墳時代になると遺跡は沖積地への拡大傾向がみられ遺跡数も増加し、南小泉遺跡に代表される集落跡も数多くみられる。さらに、遠見塚古墳を中心として古墳の築造が開始され、法領



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	陸奥国分寺跡	寺跡	沖積平野	奈良・平安	15	富沢遺跡	水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文・弥生・古墳～近世
2	陸奥国分尼寺跡	寺跡	沖積平野	奈良・平安	16	泉崎浦遺跡	集落跡	沖積平野	縄文・古墳・平安・近世
3	仙台東郊条理跡	条理	沖積平野	奈良・平安	17	山口遺跡	集落跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世
4	南小泉遺跡	集落跡	沖積平野	弥生～近世	18	元袋Ⅲ遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
5	遠見塚古墳	前方後円墳	沖積平野	古墳	19	六反田遺跡	集落跡	自然堤防上	縄文・古墳・平安・江戸
6	若林城跡	城館	沖積平野	戦国～江戸	20	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
7	茂ケ崎城跡	城館	丘陵	南北朝～室町	21	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安
8	宗禅寺横穴群	横穴墓	段丘	古墳後期	22	富沢館跡	館跡	自然堤防・後背湿地	戦国時代
9	兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	23	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳
10	郡山遺跡	官衙跡	自然堤防	古墳末期～奈良初期	24	安久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	弥生・古墳前期・奈良～近世
11	西台畑遺跡	包含地	自然堤防	弥生中期・古墳	25	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
12	北目城跡	城館	自然堤防	室町・江戸	26	後河原遺跡	水田跡	自然堤防	奈良・平安
13	今泉遺跡	城館・集落跡	自然堤防	縄文後期～近世	27	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
14	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文前期、中期・平安	28	戸ノ内遺跡	周溝墓・集落跡	自然堤防	古墳前期・平安・中世

図1　周辺の遺跡

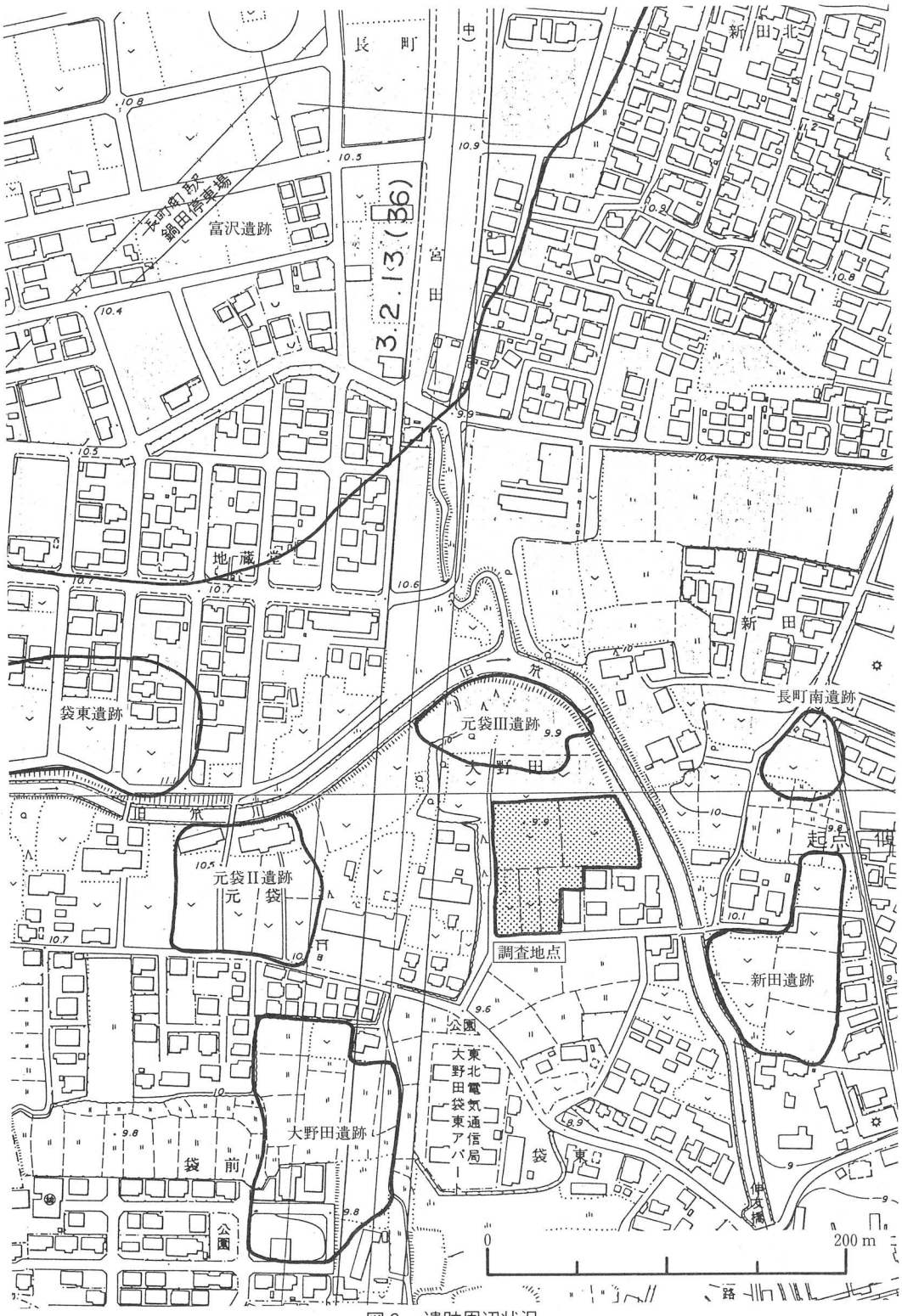

長町
新田北
長町南駅
鍋田停車場
富沢遺跡
宮田
3.2.13(36)
地蔵堂
新田
袋東遺跡
元袋III遺跡
長町南遺跡
大野田
起点
元袋II遺跡
元袋
調査地点
新田遺跡
公園
東北電気通信局
大野田袋東アパート
大野田遺跡
袋前
袋東
伊友橋
公園
0
200 m

図2　遺跡周辺状況

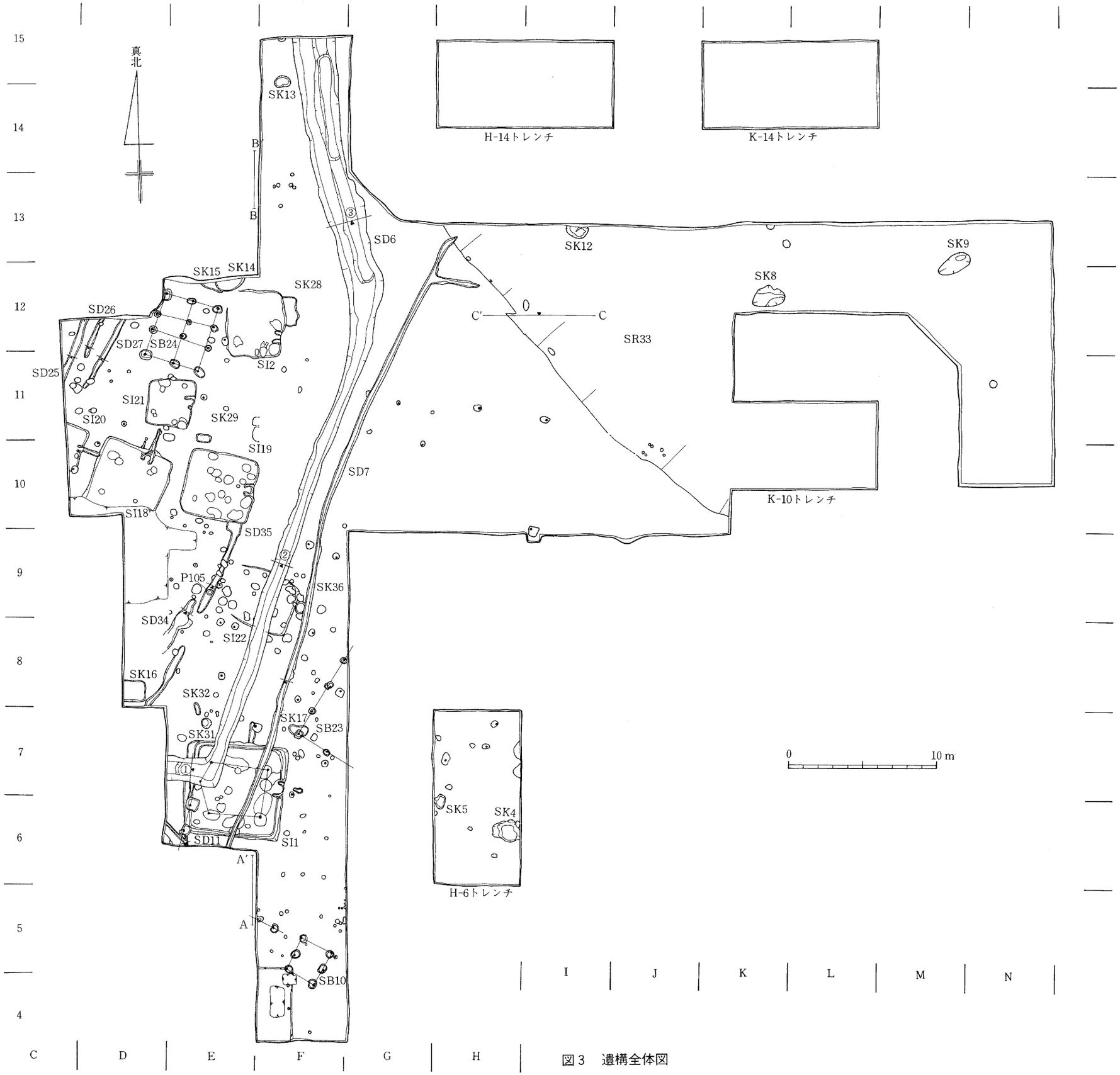

真北
SK13
H-14トレンチ
K-14トレンチ
SD6
SK12
SK9
SK8
SK15
SK14
SK28
SD26
SD27
SB24
SI2
SD25
SR33
SI21
SI20
SK29
SI19
SD7
K-10トレンチ
SI18
SD35
P105
SK36
SD34
SI22
SK16
SK32
SK17
SB23
SK31
SK5
SK4
SD11
SI1
H-6トレンチ
SB10
0
10 m

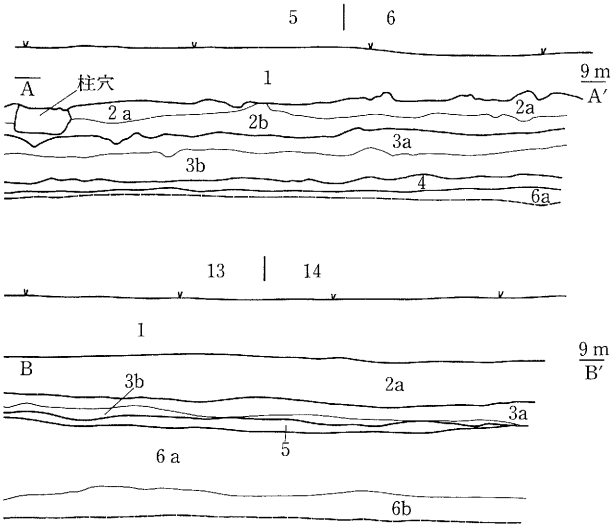
図3　遺構全体図

塚・兜塚古墳等の大小の古墳もみられる。尚、安久東・図外になるが戸ノ内遺跡では前期に属する方形周溝墓が確認されている。大野田・富沢地区では前方後円墳の裏町古墳、五反田・春日社・鳥居塚・王ノ壇を包括する大野田古墳群がみられる。古墳時代も終末の頃、広瀬川右岸の地に郡山遺跡が造営される。国府である多賀城以前の官衙遺跡であることが確認され、方四丁に巡る柵木列・建物跡が検出されている。

奈良時代になると、当遺跡北方約4kmの地点に陸奥国分寺・同尼寺が建立される。郡山遺跡を含めて当地域は早い時期から律令社会に組み込まれていたことが推察される。古墳時代末期から奈良時代になるが青葉山丘陵の東端部、広瀬川と接する地点には愛宕山横穴群（向山・大年寺・宗禅寺）がある。集落跡の発見例は他の時期に較べて数的にはあまり多くはないが、山口・六反田遺跡では住居跡群が検出されている。

平安時代の遺跡は奈良時代も含めて沖積地を中心とし、数的にも最も多く確認されている。当遺跡周辺では六反田・山口・下ノ内・下ノ内浦遺跡があり、住居跡とともに掘立柱建物跡も確認されている。

中世の遺跡は城館が主となる。今泉遺跡・北目城跡・富沢館跡があり、すべて平城である。今泉遺跡では堀跡・建物跡、大量の陶器・磁器・木製品が出土し、造営時期は鎌倉中期頃と考えられている。富沢館跡は現在でも外堀が凹地として遺存し方格を呈していたことが観られる。尚、名取川南側の柳生地区には中世の板碑群が数多く点在している。



層	土　色	土　性	備
1	黄褐色		耕作土
2a	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	奈良・平安期遺構確認面
2b	褐色（10YR4/6）	シルト	2a層に較べて粘性あり
3a	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土質シルト	
3b	にぶい黄褐色(10YR4/3)	〃	
4	黒褐色（10YR2/3）	〃	
5	灰黄褐色(10YR5/2)	〃	
6a	黄褐色（10YR5/6）	〃	
6b	灰黄褐色(10YR4/2)	〃	

0　2m

図4　F区基本層位

Ⅲ．発見遺構と出土遺物

調査地点はⅡで述べたように笊川の右岸で東西に延びる自然堤防の東端部付近に位置する。基本的な層位を2ケ所での深掘りではあるが大別して6層まで確認した。全体として褐色系の土壌で上部はシルト質、下部につれて粘土質のシルトとなっている。遺構は畑地直下のⅡ層面のみの確認で、下層からは遺物などの出土もみられなかった。

発見された遺構には住居跡6軒・竪穴遺構1基・掘立柱建物跡3棟・土坑15基・溝跡8条・河川跡1条・柱穴及びピット多数がある。多くの遺構は調査区西側に集中している。遺物は整理箱にして30箱程の出土量で、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦・石製品・金属製品などがある。土器類が大半を占め、ロクロ使用のものがほとんどである。

1．住居跡

住居跡はすべて竪穴式のもので6軒確認している。調査区西側に片寄って検出され、出土遺物から大きく二時期に分けられる。

SI 1 住居跡

〔増改築〕住居西側において三角形を呈する拡張面がみられ、部分的な改築が認められた。改築以後を1a住居、改築以前を1b住居として以下記していく。

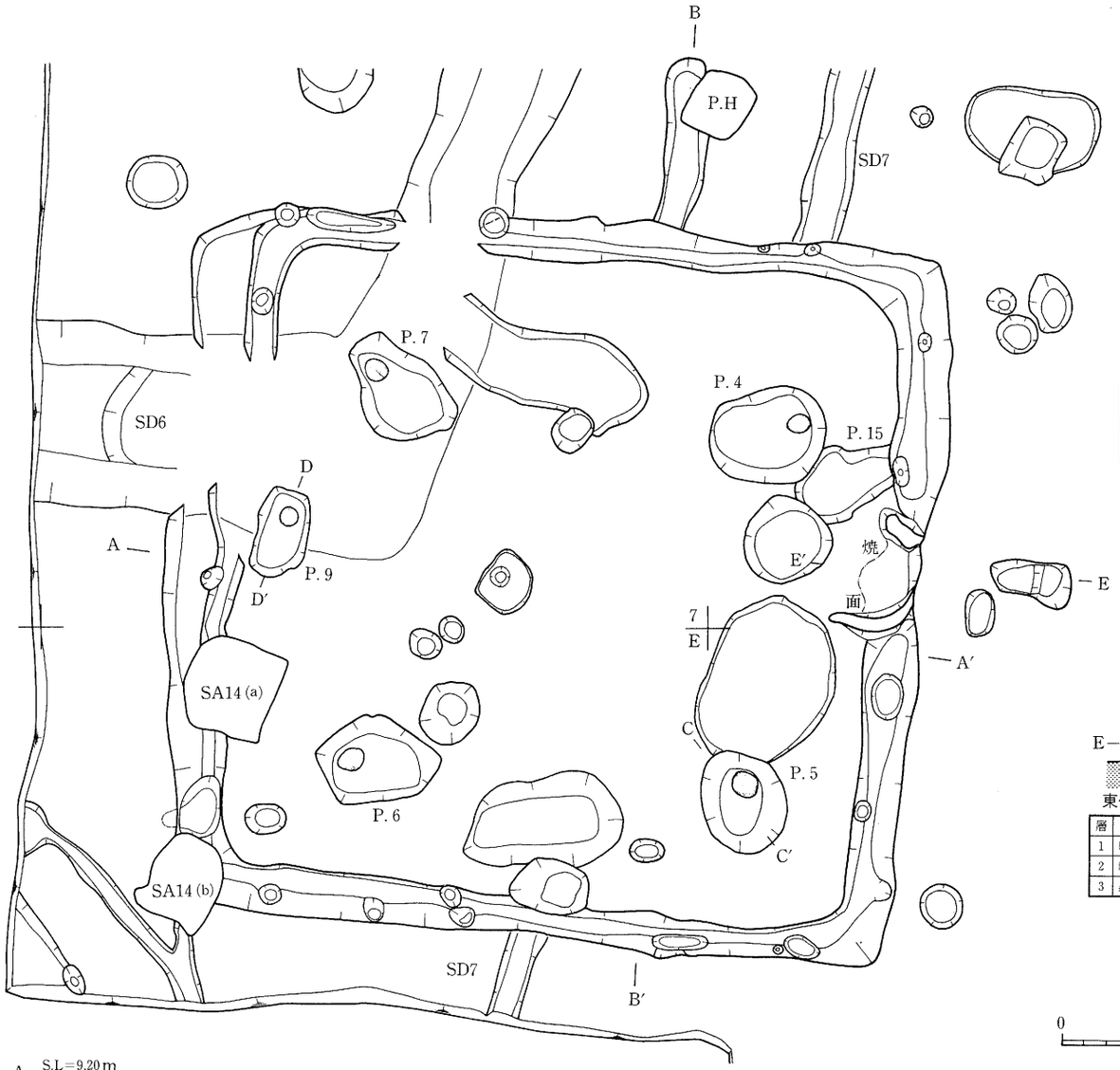
〔遺存状況・平面形・規模〕平面形は両者とも隅丸の方形で、西側を除く三壁は同一面として確認をしている。規模は1a住居が東西辺北側で6.8m・南側で6.4m、1b住居が東西辺北側で6.4m・南側で6.4m、南北辺中央で両者とも6.4mを計る。1b住居は正方形を呈し、1a住居が1b住居の北西部側を若干膨らませた形となっている。床面積は1a住居が約35.3m²、1b住居が約32.5m²を有する。東壁の方向は真北ラインに対し東へ約3度偏している。

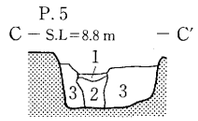
〔壁・周溝〕東・南・北壁は上述の様に同一面となっており特徴の残る西側部でみると、1a住居は壁のみで構成され急角度で床面より立ち上がっており、1b住居は壁面は残存しないがU字状を呈する周溝が一巡する。この点等から判断して、1b住居は四方に周溝を巡らすもので、1a住居は1b住居の周溝を埋めもどし西側へ拡張を行っているものである。残存壁高は18～23cm、周溝は幅35～40cmで床面からの深さ10～19cmを計る。尚、周溝の底面及び壁に円形ないし楕円形のピットが多数確認されている。

〔重複関係〕SD6・7溝跡、掘立柱と切り合い関係にありすべてに切られている。

〔堆積土〕6層確認している。黒褐色系のシルト層である。レンズ状堆積を呈している。

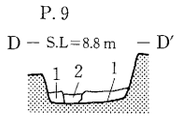
〔床面〕住居掘り方底面を床としており、ほぼ平坦である。床面上で大小のピットを多数確認している。





P.5

層	土　色	土 性	備
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	柱痕跡
2	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	柱痕跡
3	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	



P.9

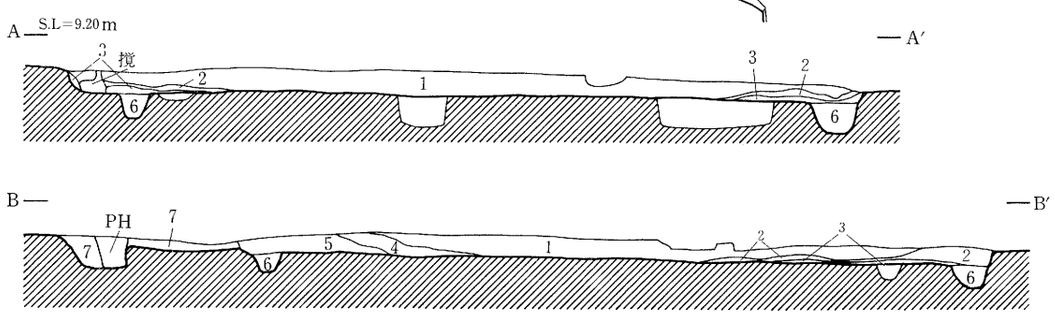
層	土　色	土 性	備
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	
2	黒褐色 (10YR4/4)	シルト	柱痕跡

東側カマド

東側カマド

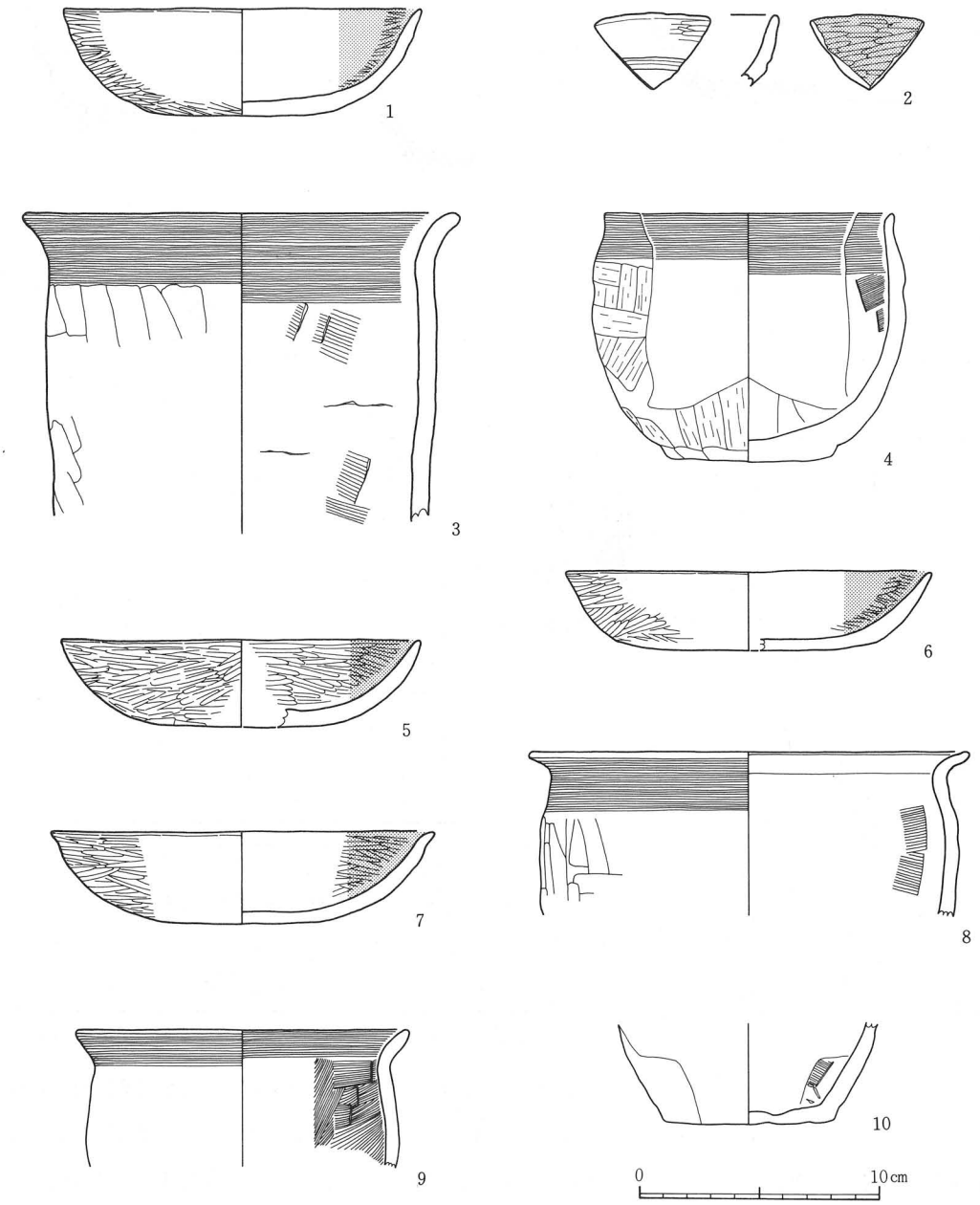
層	土　色	土 性	備
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物底面にみられる
2	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	焼土をブロック状に含む
3	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	焼土をブロック状に多量に含む

0　2 m



層	土　色	土 性	備
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・焼土を全体に含む
2	黒褐色 (7.5YR3/1)	シルト	
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物少量・焼土多量に含む
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	炭化物・焼土まだらに含む
6	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物・焼土・土器片含む
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	多量の炭化物・焼土（煙道部）

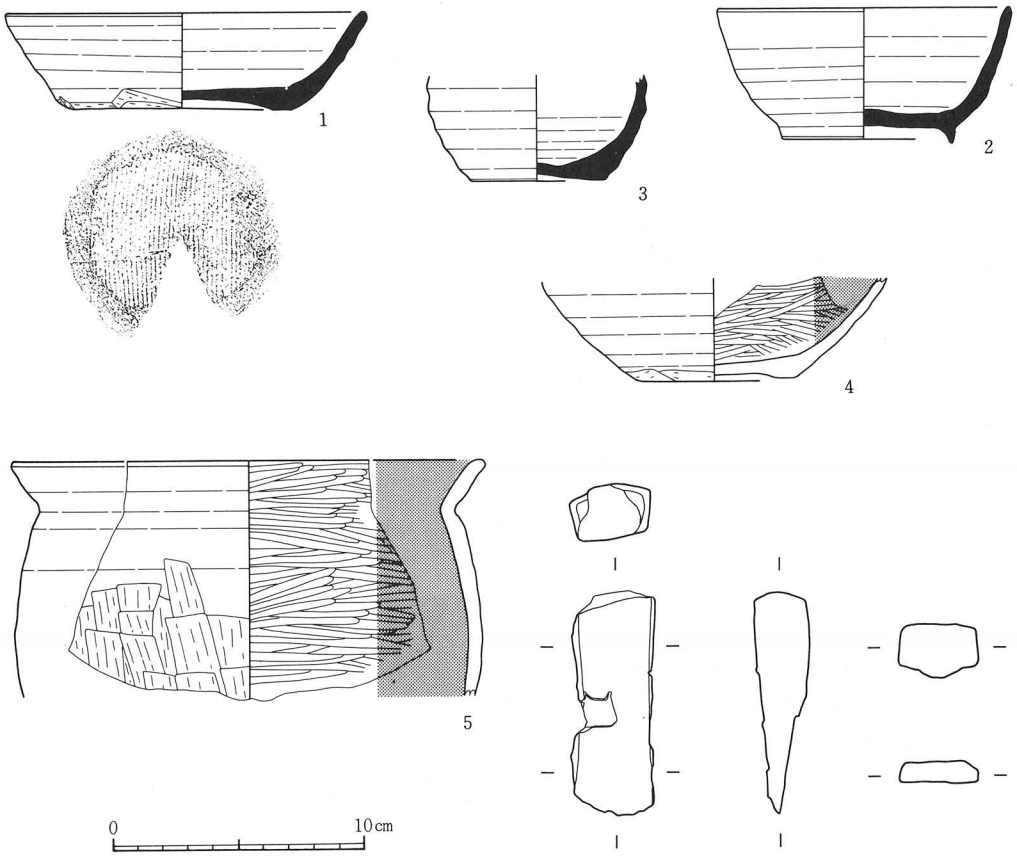
図5　SI 1 住居跡



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
6－1	土師器	坏	周溝	口縁部～体部－ヘラミガキ 底部－ヘラミガキ？	ヘラミガキ 黒色処理	150	72	44	A4b	
－2	土師器	坏	周溝	ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	－	－	－	A2	沈線有り
－3	土師器	甕	カマド	口縁部－ヨコナデ 体部－ナデ	口縁部－ヨコナデ 体部－ヘラナデ	(182)	－	－	A1	北側カマド
－4	土師器	鉢	ピット15	口縁部－ヨコナデ 体部～底部－ヘラケズリ	口縁部－ヨコナデ 体部～底面－ヘラナデ・ナデ	120	71	103	A2	
－5	土師器	坏	1層	口縁部～体部－ヘラミガキ 底部－あさいヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	150	72	36	A4a	再酸化
－6	土師器	坏	埋土	口縁部～体部－ヘラミガキ 底部－不明（ヘラミガキ？）	ヘラミガキ 黒色処理	(152)	108	33	A4a	
－7	土師器	坏	埋土	口縁部～体部－ヘラミガキ 底部－不明（ヘラミガキ？）	ヘラミガキ 黒色処理	160	64	39	A4b	
－8	土師器	甕	1層	口縁部－ヨコナデ 体部－ナデ	口縁部－不明（ヨコナデ？） 体部－ヘラナデ	(183)	－	－	A1	
－9	土師器	甕	1層	口縁部－ヨコナデ 体部－不明（ナデ？）	口縁部－ヨコナデ 体部－ヘラナデ・ナデ	(139)	－	－	A2	
－10	土師器	甕	2層	体部－不明 底部－木葉痕	ナデ・ヘラナデ	－	72	－	A2	

（単位：mm）

図6　SI1住居跡出土遺物（1）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
7－1	須恵器	坏	1層	ロクロ調整、体部下端～底部周縁－手持ちヘラケズリ　底部－静止糸切り痕	ロクロ調整	143	86	38	1	
－2	須恵器	高台付坏	1層	ロクロ調整 底部－回転ヘラ切り痕	ロクロ調整	112	(高台径) 68	52		付高台
－3	須恵器	壺	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	－	54	－	2	
－4	土師器	坏	埋土	ロクロ調整　体部下端～底部周縁－手持ちヘラケズリ　底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	－	61	－	B	再酸化
－5	土師器	甕	1層	ロクロ調整 体部－縦位のヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(186)	－	－	B1	
－6	鉄製品	斧	1層	現存長8.8cm・幅3.2cm、上部断面四角形鍛造品						

（単位：mm）

図7　SI I 住居跡出土遺物（2）

〔柱穴〕ピットを床面上で18個、周溝底面及び壁部で20個確認している。位置・深さ・柱痕跡の検出状況からピット4・5・6・7・9が1a期の柱穴と判断され、1b期でも前述の柱穴が主柱穴となる可能性があるが明らかに出来なかった。周溝部のピット群は1b期での壁柱穴と考えられる。

〔カマド〕東壁中央部と北壁中央部の二箇所（前者を東側カマド・後者を北側カマド）で確認している。遺存状態から東側カマドが1a期に、北側カマドが1b期に属すると考えられる。東側カマドは燃焼部と煙道部が検出され、全長215cmを計る。燃焼部は側壁のみの確認で、粘土質の土で構築されている。大きさは外法で120cm・内法で65cm・奥行75cmを計る。底面は焚口部から奥壁にかけてほぼ平坦であるが奥壁付近で浅い凹みとなりゆるやかに立ち上がってい

る。奥壁付近は熱のため赤変しており焼土及び炭化物が一面にみられる。煙道部は一部削平を受け長円形のピットを呈しているが、断面の形状は奥壁方向から煙道先端部へかけて低くなり、さらに一段ピット状に落ち込み急角度に立ち上がる。先端部の壁には炭化物が多量に付着していた。推定長 136 cm・幅 30～40 cm を計る。北側カマドは煙道部のみの残存で、先端部付近は掘立柱に切られている。大きさは長さ 150 cm・幅 30 cm 程を計り、底面はほぼ平坦で先端部はピット状に一段低くなっている。炭化物・焼土が多量に含まれている。

〔その他・施設〕床面上で柱穴を除いて大小のピットが 13 個存在している。ピット間の切り合いや不規則な位置関係が認められ、特に大きめのピット埋土には焼土・炭化物・土器片が含まれている。断定はできないが廃棄用の穴としての性格が考えられる。

〔出土遺物〕床面での出土はなく、堆積土・周溝・ピット・カマドからの出土である。多くは堆積土中からのもので、ロクロ不使用・ロクロ使用の土器が混在している。尚、堆積土以外の土器はすべてロクロ不使用のものである。種類として土師器・須恵器各器種・鉄製品・礫があるが、ほとんどのものが散在して出土しており、まとまりをもつものは確認されなかった。図示資料は土師器坏 6 点（ロクロ使用 1 点）・甕 5 点（ロクロ使用 1 点）・鉢 1 点（ロクロ不使用）、須恵器坏 1 点・高台付坏 1 点・壺 1 点、鉄斧 1 点である。

SI 2 住居跡

〔遺存状況・平面形・規模〕全体的に遺存不良で北西部隅付近は削平されている。平面形は隅丸の長方形である。規模は南北辺中央で 4.5 m・東西辺中央で 4.0 m を計る。床面積約 16.3 m^2を有する。西壁の方向は真北ラインに対し西へ 9 度偏している。

〔重複関係〕SK28 土坑を切り、ピットに切られている。

〔堆積土〕5 層確認した。黒褐色系のシルト層である。

〔壁〕床面からゆるやかに立ち上がる。残存壁高は 0～15 cm である。

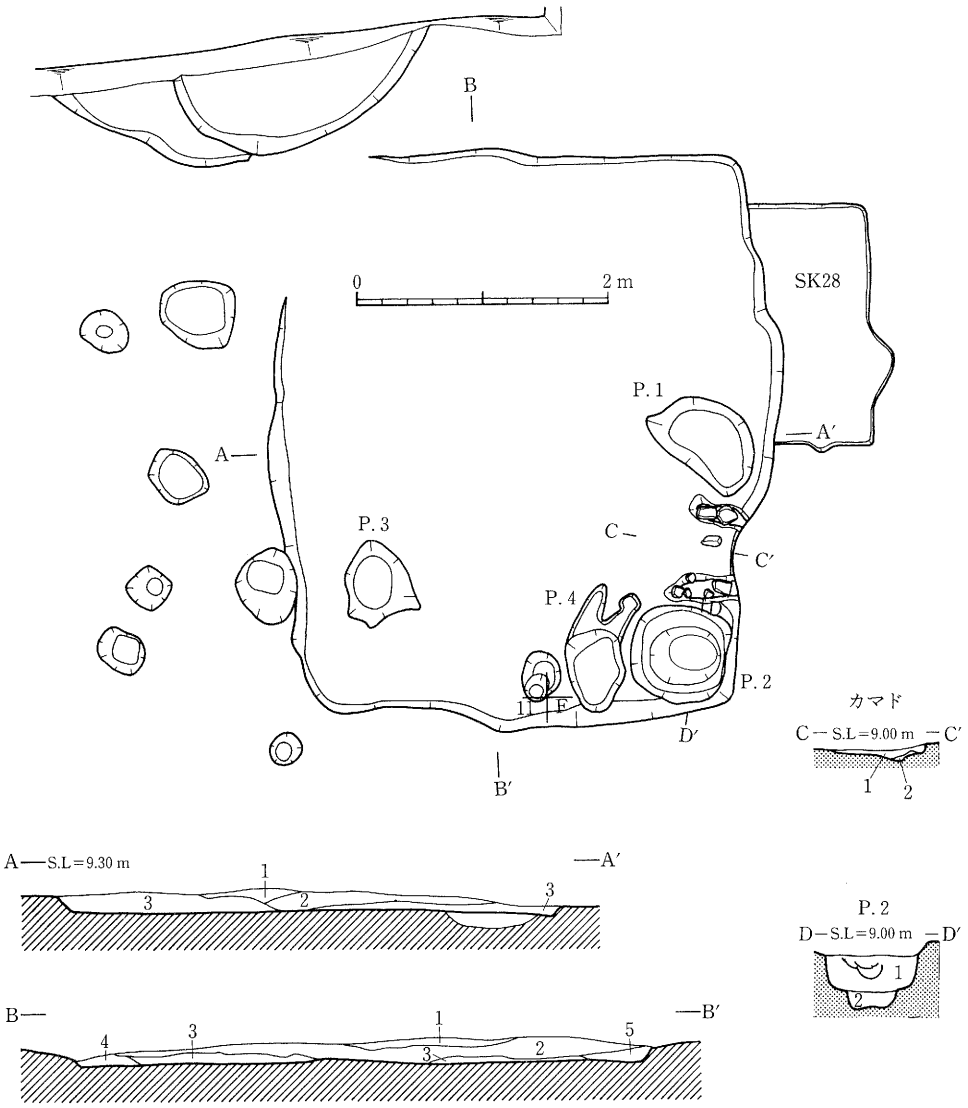
〔床面〕住居掘り方底面を床としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕床面でピットを 5 個検出しているが規模・位置から柱穴となりうるものはない。

〔カマド〕東壁中央部に設置されている。燃焼部側壁のみの確認である。側壁には粘土質土及び 10～15 cm 大の礫が使用されている。大きさは外法 80 cm・内法 40 cm・奥行き 45 cm を計る。燃焼部底面は焚口部よりゆるやかに立ち上がり壁へと延びている。底面左上部に自然礫が 1 個据えられており位置からみて支脚としての使用が考えられる。

〔その他・施設〕カマド南側に貯蔵穴状のピット（ピット 2）がある。平面形は隅丸の四角形を呈し、長軸 78 cm・短軸 75 cm を計る。段を中間にもつ二段掘りの形態で深さは 45 cm を計り、壁は急角度で立ち上がり、底面は若干の凹凸がみられるが平坦である。ピット内より多くの土器類が重なり合うように一括して出土している。

〔出土遺物〕堆積土中から多量の土器類が出土しており、緑釉陶器皿の破片も１点出土している。床面でもカマドを中心として土器片が散在し出土しているが、まとまりをもつ遺物としてはピット２・４出土の土器群がある。すべてロクロ使用のものである。図示資料は土師器坏６点・高台付坏１点・甕１点、赤焼土器坏４点、須恵器坏２点・壺３点、緑釉陶器皿１点である。



層	土　色	土　性	備
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土を全体に少量含む
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を少量含む
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	灰白色火山灰を粒状に少量含む
4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	炭化物少量含む
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を少量含む

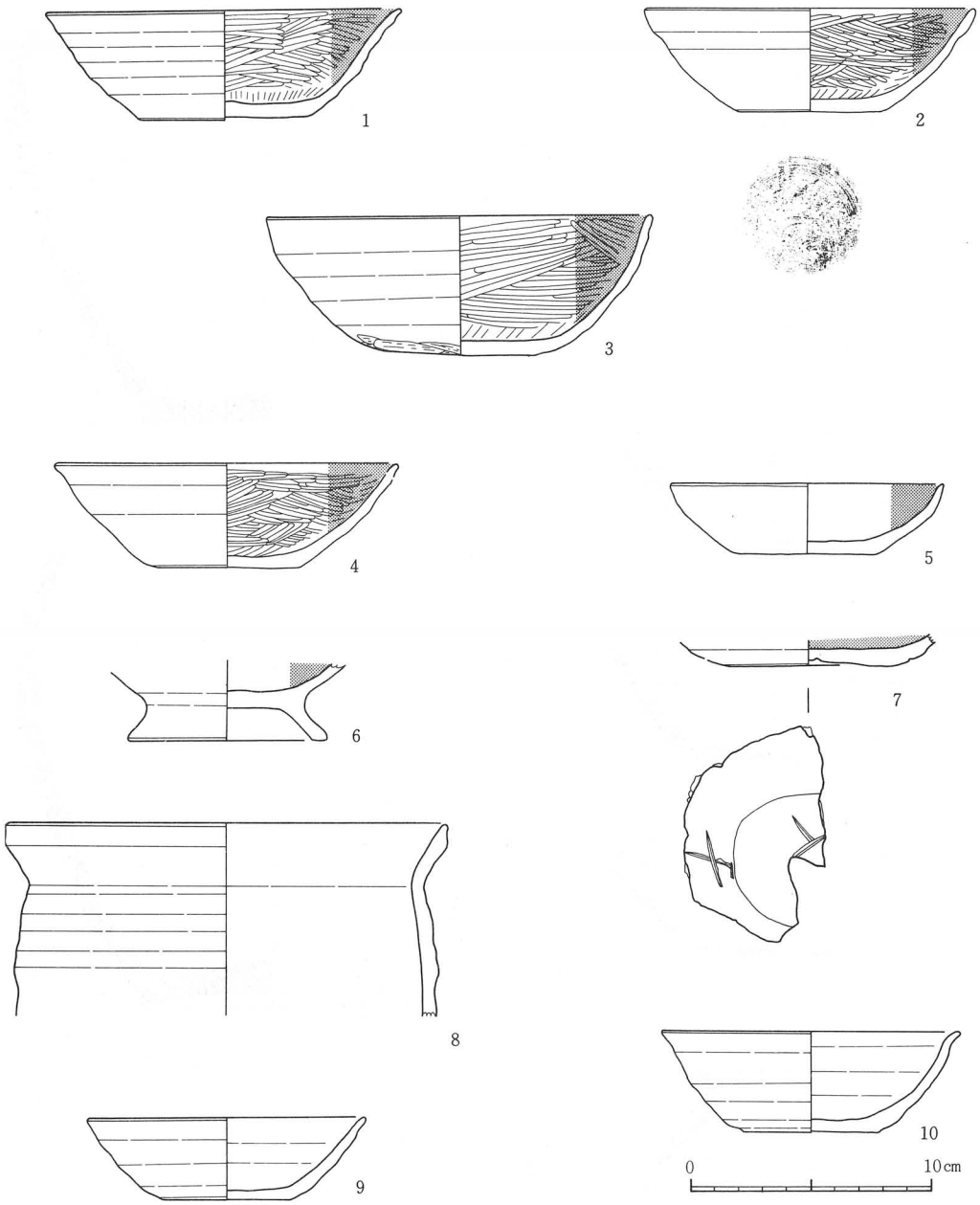
カマド

層	土　色	土　性	備
1	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト	多量の焼土・炭化物・土器片を含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	少量の炭化物を含む

P. 2

層	土　色	土　性	備
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土を少量含む
2	黒褐色 (2.5Y3/2)	シルト	炭化物・焼土をやや多く含む

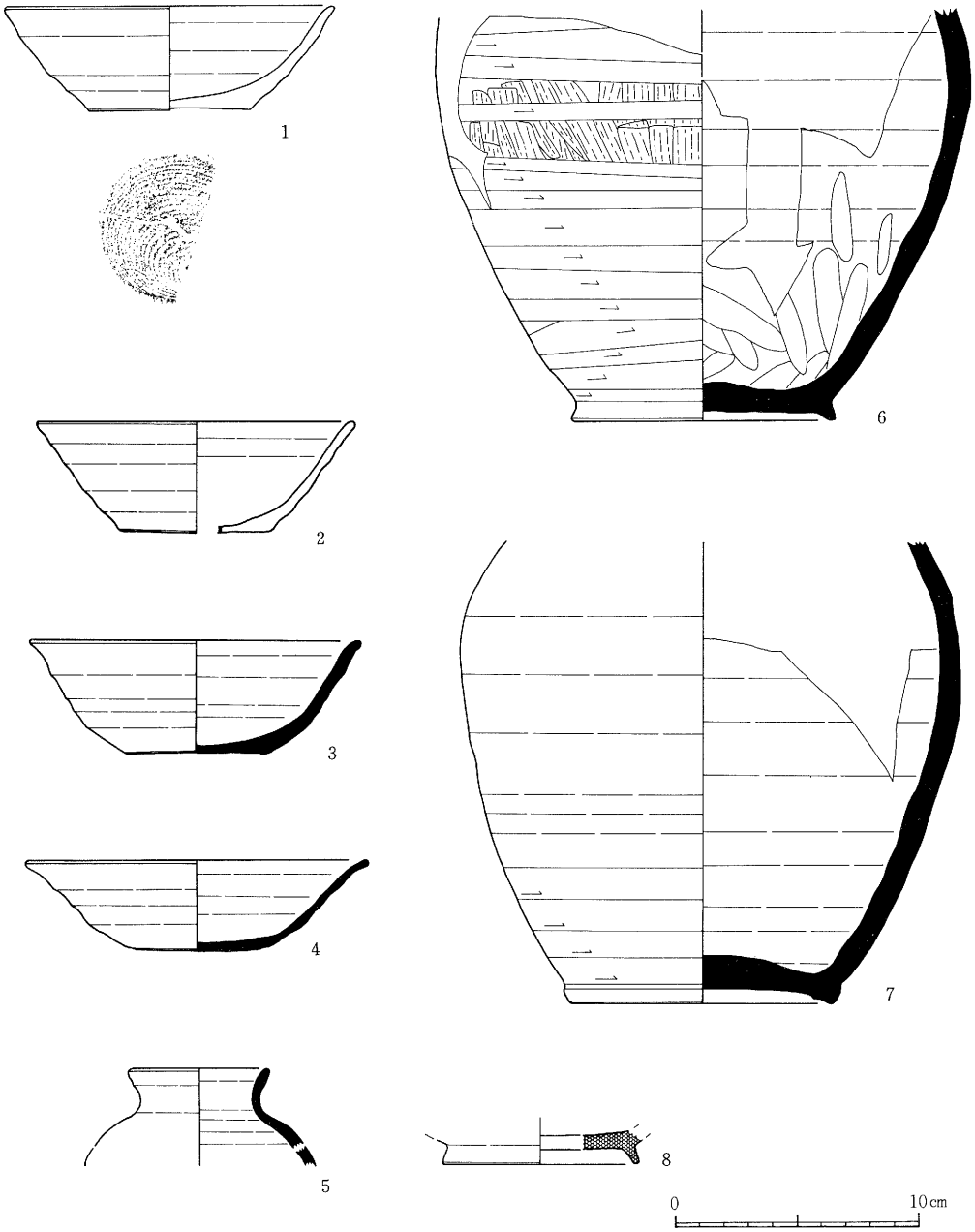
図８　SI ２住居跡



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
9－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 底部－摩滅のため、切り離し等不明	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	148	72	46	B2a	
－2	土師器	坏	Pit. 2	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	137	60	43	B3a	
－3	土師器	坏	Pit. 4	ロクロ調整 体部下端～底部－手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	161	62	58	B4b	
－4	土師器	坏	Pit. 2	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	143	62	44	B3a	
－5	土師器	坏	1層	外面摩滅	内面摩滅 黒色処理	114	58	29	A5	
－6	土師器	高台付坏	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り後ナデ	ヘラミガキ 黒色処理	－	高底径 83	－		付高台
－7	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ 黒色処理	－	68	－	B	体部下端・底部に刻線有り
－8	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	184	－	－	B1	
－9	赤焼土器	坏	1層	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	116	53	34	1	
－10	赤焼土器	坏	Pit. 2	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	125	57	43	1	

（単位：mm）

図9　SI 2住居跡出土遺物（1）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
10－1	赤焼土器	坏	Pit. 2	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	136	66	43	1	
－2	赤焼土器	坏	カマド	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	131	63	46	1	
－3	須恵器	坏	Pit. 2	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	136	59	46	3	
－4	須恵器	坏	1層	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	131	63	46	3	
－5	須恵器	壺	1層	ロクロ調整	ロクロ調整	59	－	－	2	
－6	須恵器	壺	Pit. 2	体部－縦位のハラケズリ・横位回転ヘラケズリ	ロクロ調整 体部下部～底面－指ナデ	－	高台径 108	－	1	付高台
－7	須恵器	壺	Pit. 2	体部上部－ロクロ調整 体部下部－回転ヘラケズリ	ロクロ調整	－	高台径 107	－	1	付高台
－8	緑釉陶器	皿	1層	ロクロ調整	ロクロ調整	－	高台径 81	－		付高台

（単位：mm）

図10　SI 2住居跡出土遺物（2）

SI 18 住居跡

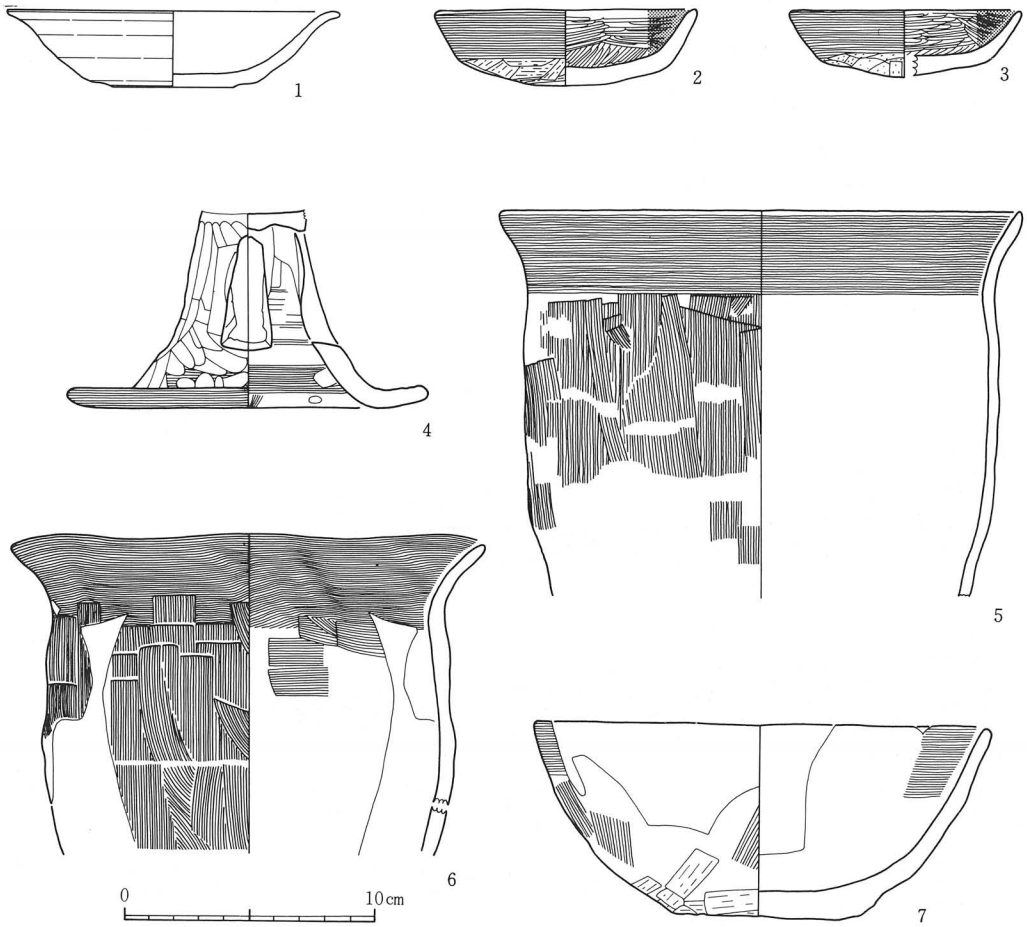
〔遺存状況・平面形・規模〕東壁南側と南壁で床面及び壁が削平されている。平面形は隅丸の正方形である。規模は東西辺で 4.8 m・南北辺西側で 4.6 m を計る。床面積約 21.6 m²を有する。西壁の方向は真北ラインに対し東へ約 16 度偏している。

〔重複関係〕SI20 住居跡・ピットの両者に切られている。

〔堆積土〕カマド部を含めて 16 層確認している。褐色系のシルト層である。大きくみてレンズ状の堆積状況を示している。

〔壁〕床面から急角度で立ち上がる。残存壁高は 30〜37 cm を計る。

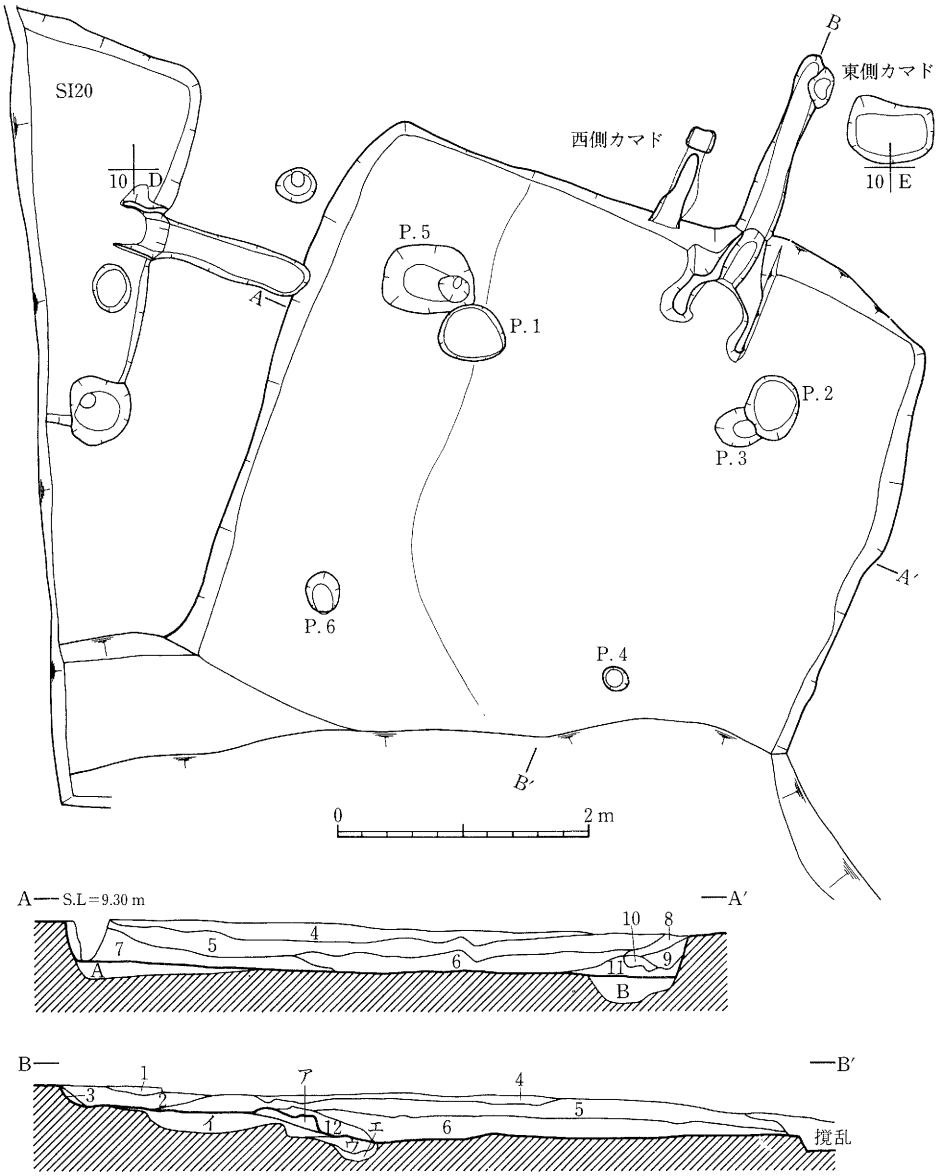
〔床面〕住居掘り方底面・東壁部に沿って延びる溝状の掘り方埋土上面及び貼床からなる。貼床



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
11－1	赤焼土器	坏	確認面	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	133	49	30	3	
－2	土師器	坏	埋土 (カマド脇)	口縁部－ヨコナデ 体部～底部－ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	105	－	30	A1	
－3	土師器	坏	埋土	口縁部－ヨコナデ 体部～底部－ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	93	－	27	A1	
－4	土師器	高坏	Pit. 5	脚部－ヘラケズリ・ナデ 裾部－ヨコナデ	坏部底面－ヘラミガキ、黒色処理 脚部－ヘラケズリ　裾部－ヨコナデ	－	裾径 144	－		方形の透し4ケ有り
－5	土師器	甕	埋土 (カマド脇)	口縁部－ヨコナデ 体部－ハケメ	口縁部－ヨコナデ	208	－	－	A1	再酸化
－6	土師器	甕	埋土 (カマド脇)	口縁部－ヨコナデ 体部－ハケメ	口縁部－ヨコナデ 体部－ヘラナデ	188	－	－	A1	再酸化
－7	土師器	鉢	カマド	口縁部－ヨコナデ　体部上半－ハケメ 体部下半－ヘラケズリ	口縁部－ヨコナデ	182	78	76	A3	再酸化

（単位：mm）

図11　SI 18住居跡出土遺物



層	土　色	土　性	備
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	炭化物をブロックで含む
3	褐色 (10 YR4 / 4)	シルト	炭化物を少量含む
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・焼土・土器片を少量含む
5	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	炭化物・焼土・土器片をまばらに含む
6	褐色 (10 YR3 / 3)	シルト	
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土少量含む
8	黒褐色 (7.5YR3/2)	粘土質シルト	
9	褐色 (10 YR4 / 4)	粘土質シルト	

層	土　色	土　性	備
10	黒褐色 (10YR3/3)	シルト	
11	褐色 (7.5YR4/4)	粘土質シルト	
12	極暗褐色(7.5YR2/3)	シルト	炭化物・焼土・土器片を含む
ア	褐色 (10 YR4 / 4)	砂質シルト	ア～エ：改築前の埋土
イ	黒褐色 (7.5YR2/2)	シルト	
ウ	赤褐色 (5YR4/6)		焼土
エ	暗褐色 (7.5YR3/3)	シルト質粘土	炭化物少量含む
A	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	貼床？　非常に堅く突き固められている
B	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘土質シルト	溝状の掘り方埋土、Bに較べてしまりなし

図 12　SI 18 住居跡

は西側のみにみられ、堅く突き固めている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕位置・規模からピット２・５・６が柱穴と考えられる。ピット５・６は床面上では検出できず、貼床除去中での確認であった。残存する柱穴の配置は床面の対角線上に位置しており、４本柱で構成されていたと考えられる。

〔カマド〕北壁中央部で二基（西側カマドと東側カマド）確認している。残存状態から新旧関係が把えられ西側から東側への造り替えが理解され、また東側カマドは燃焼部から煙道部の下部状況から改築も判断される。西側カマドは煙道部のみの確認で、検出時には天井部がすべて残っており先端部のみがピットとして確認されていた。ピットは15×20 cm 程の四角形のもので、焼土壁で回りに炭化物が付着していた。底面に勾配はなくほぼ平坦である。大きさは長さ75 cm・幅 15〜20 cm を計る。東側カマドは燃焼部と煙道部が検出され、全長 250 cm を計る。燃焼部は側壁のみの確認で、砂粒を多く含んだ粘土質土で本体が構築されている。大きさは外法で約 80 cm・内法で 40 cm・奥行 55 cm を計る。底面は焚口部から奥壁にかけてゆるい勾配をみせ高くなっている。奥壁は急な立ち上がりで段を形成し燃焼部と煙道部を分けている。燃焼部底面は熱のため赤変しており非常に堅くなっている。煙道部は奥壁から先端部にかけてゆるやかな勾配で高くなっており、奥壁付近に浅く長い凹みがみられ段状になっている。幅は20〜30 cm を計る。

〔出土遺物〕ロクロ不使用の土師器が大半を占めており、堆積土中にロクロ土師器甕・赤焼土器坏・須恵器坏が破片で数点混じる程度である。カマド内及びカマド西側でまとまりをもつ一括の土器群が出土している。特に甕類は熱の影響で体部下半が赤変している。図示したものは土師器坏２点・高坏１点・甕２点・鉢１点、赤焼土器坏１点である。

SI 19 住居跡

〔遺存状況・平面形・規模〕平面形は隅丸の正方形である。規模は東西辺中央で 4.7 m・南北辺中央で 4.6 m を計る。床面積は約 20.7 m^2を有する。西壁の方向は真北ラインに対し東へ約９度偏している。

〔重複関係〕SD35 溝跡を切っている。

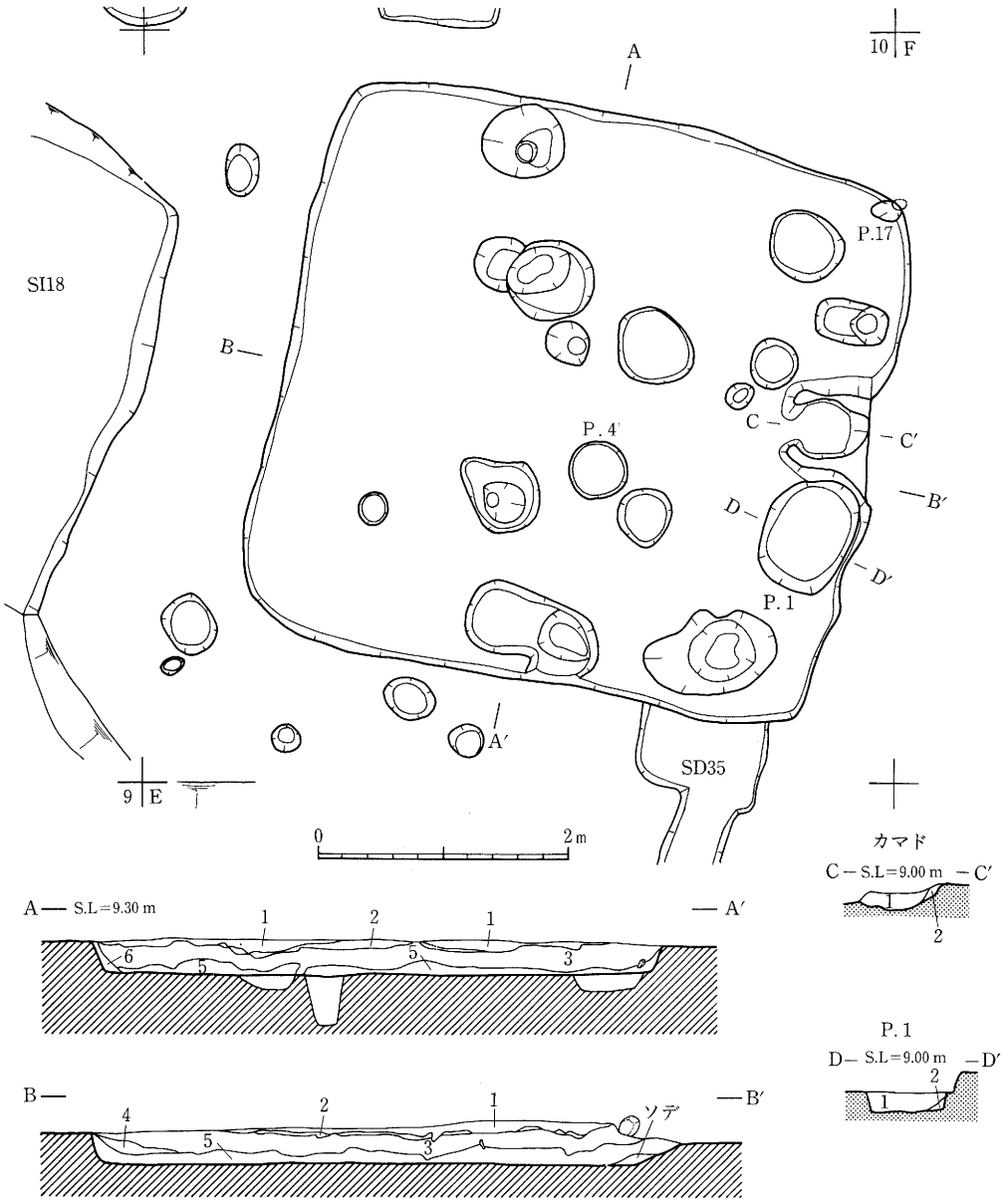
〔堆積土〕6 層確認した。全体として褐色系の粘土質シルト層である。堆積土上部において灰白色火山灰を層的に確認している。

〔壁〕床面から急角度で立ち上がる。残存壁高は 25 cm 程を計る。

〔床面〕西壁部に沿って溝状に掘り方がみられその部分は埋土上面、他は住居掘り方底面を床としている。平坦面である。

〔柱穴〕床面でピットを多数検出しているが、規模・位置から柱穴と判断されるものはない。

〔カマド〕東壁中央部に設置されている。燃焼部側壁のみの確認である。カマド本体は粘土質の



層	土　色	土 性	備
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土・土器片・炭化物（多量）に含む
2	灰白色 (10YR8/1)	シルト	灰白色火山灰土
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	焼土・炭化物を多量に含み、2層を粒状に含む
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	焼土・炭化物を少量含む
5	黒褐色 (2.5YR3/2)	粘土質シルト	焼土少量含む
6	暗褐色 (10YR3/4)	粘土質シルト	にぶい黄橙色土をマダラに少量含む

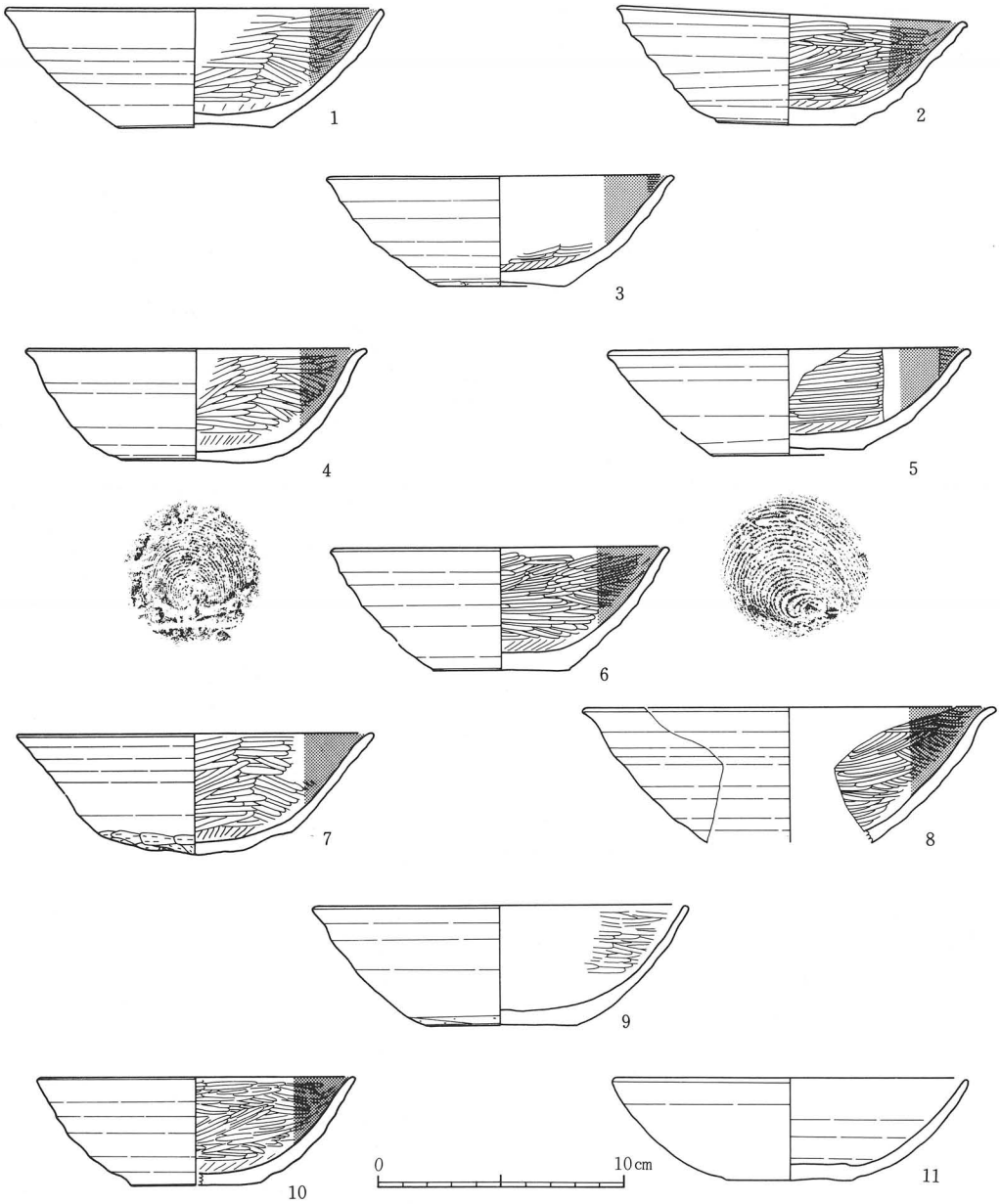
カマド

層	土　色	土 性	備
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物・焼土多量に含む、土器片も含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	

P.1

層	土　色	土 性	備
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	炭化物・焼土・灰白色火山灰土・土器片を含む
2	灰オリーブ色 (5Y5/2)	シルト	

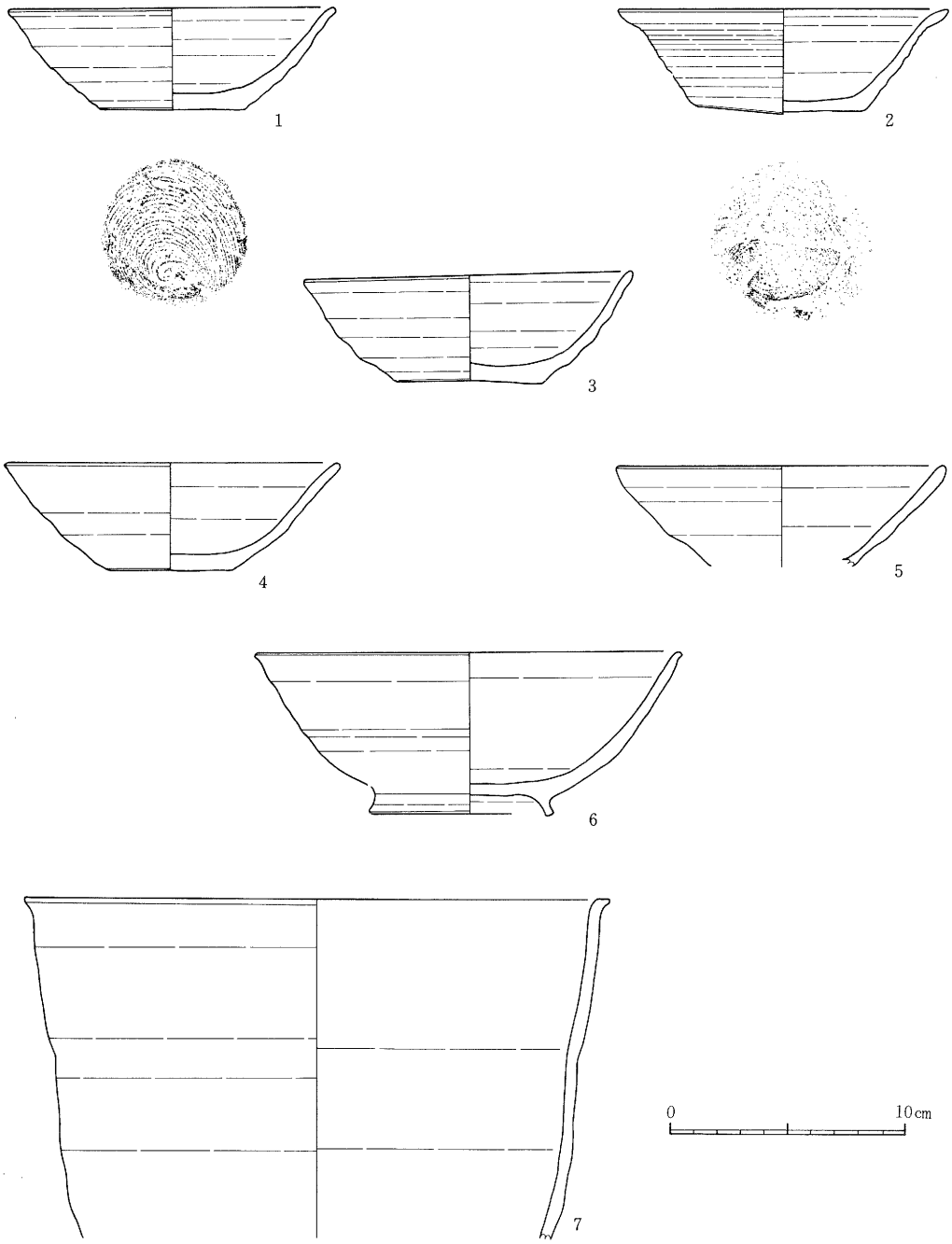
図 13　SI 19 住居跡



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
14－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	154	64	48	B3a	
－2	土師器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	142	57	45	B4a	
－3	土師器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整 底部－回転糸切り後、体部下端～底部－かるい手持ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	140	51	45	B4b	
－4	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り後、周縁かるい手持ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	139	59	45	B3b	再酸化
－5	土師器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	147	62	43	B3a	
－6	土師器	坏	Pit. 17	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	137	56	50	B4a	
－7	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕(部分的)、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	145	－	49	B4b	再酸化
－8	土師器	坏	埋土	ロクロ調整	ヘラミガキ（横位） 黒色処理	168	－	－	B4a？	
－9	土師器	坏	1層	ロクロ調整 体部下端～底部－かるい回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位）	153	61	49	B4c	再酸化
－10	土師器	坏	Pit. 17	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	130	54	44	B4a	
－11	赤焼土器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	145	52	42	2	再酸化

図14　SI 19住居跡出土遺物（1）

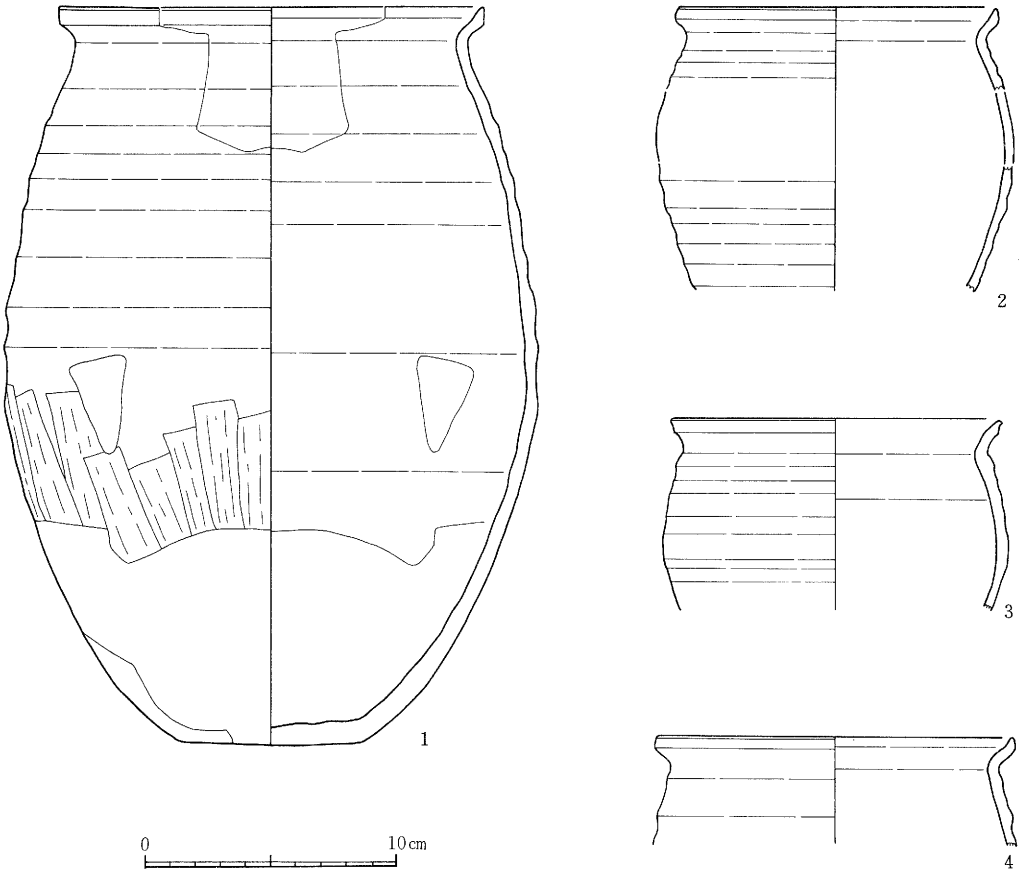
（単位：mm）

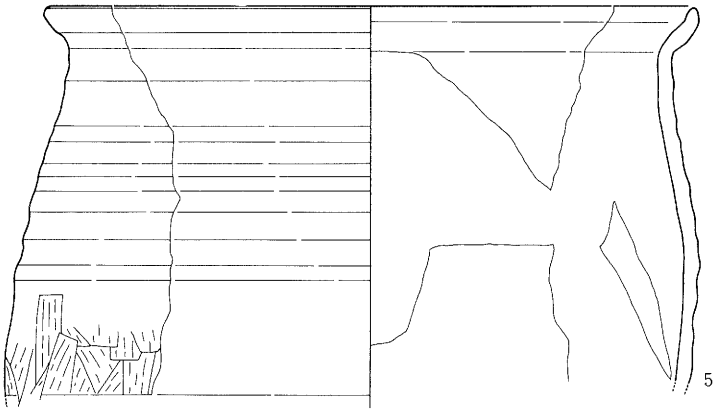


図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
15−1	赤焼土器	坏	Pit. 1	ロクロ調整 底部−回転糸切り痕	ロクロ調整	140	62	44	1	
−2	赤焼土器	坏	埋土	ロクロ調整 底部−糸切り痕	ロクロ調整	140	72	44	1	
−3	赤焼土器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整 底部−回転糸切り痕	ロクロ調整	140	63	45	1	
−4	赤焼土器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整 底部−回転糸切り痕	ロクロ調整	143	52	46	2	
−5	赤焼土器	坏	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整	ロクロ調整	(140)	−	−	2?	
−6	赤焼土器	高台付坏	埋土	ロクロ調整 底部−糸切り痕	ロクロ調整	(182)	高台径 79	69		付高台
−7	土師器	鉢	Pit. 4	ロクロ調整	ロクロ調整	(248)	−	−	B	

(単位：mm)

図 15　SI 19 住居跡出土遺物 (2)

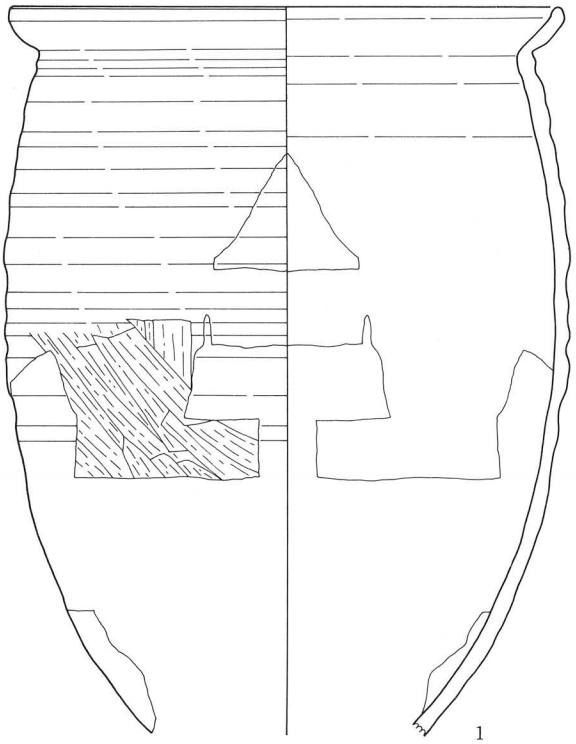


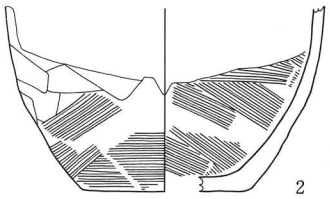


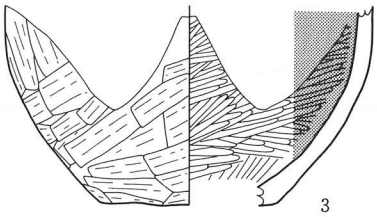
図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
16－1	土師器	甕	Pit. 17	ロクロ調整 体部下部－縦位ヘラケズリ	ロクロ調整	169	74	293	B1	
－2	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	129	－	－	B2	
－3	土師器	甕	埋土 (Pit. 1上面)	ロクロ調整	ロクロ調整	132	－	－	B2	再酸化
－4	土師器	甕	埋土	ロクロ調整	ロクロ調整	144	－	－	B2	
－5	土師器	甕	埋土	ロクロ調整 体部下部－縦位のヘラケズリ	ロクロ調整	260	－	－	B1	

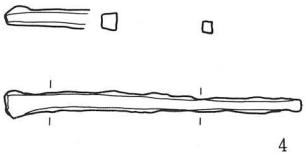
(単位：mm)

図16　SI 19住居跡出土遺物 (3)

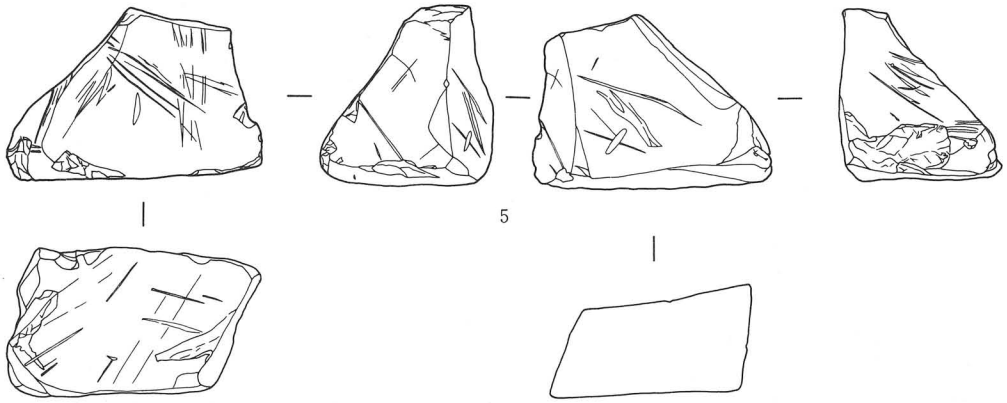








0　10cm



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
17－1	土師器	甕	埋土 (床面の直上)	ロクロ調整 体部下部－縦位方向のヘラケズリ	ロクロ調整	220	－	－	B1	
－2	土師器	甕	埋土	体部下部－ナデ、ヘラナデ　底部－タタキ表状の左底	体部下部－ヘラナデ	－	(68)	－	A	
－3	土師器	甕	埋土 (Pit 1上面)	体部下部－縦・横位のヘラケズリ	体部下部－ヘラミガキ 黒色処理	－	69	－	B	
－4	鉄製品	釘？	埋土	現存長11.8cm　断面四角形、頂部を屈曲させ頭にしている、銹化がいちぢるしい						
－5	石製品	砥石	埋土	上部欠損、分銅型を呈する、現存高6.8cm　5面に使用痕跡あり						

(単位：mm)

図17　SI 19 住居跡出土遺物 (4)

土で構築されている。大きさは外法 80 cm・内法 40 cm・奥行 55 cm を計る。燃焼部底面は浅い摺鉢状を呈し中央部が低くなっている。堆積土は 2 層みられ炭化物・焼土が多量にみられるが、側壁及び底面は若干の炭化物面が観察されるのみである。

〔その他・施設〕床面上で大小のピット計 17 個確認しているが、特に大きめのピット埋土には炭化物・焼土が多量にみられ土器細片が若干含まれるものが多くみられる。柱穴にもなりえず散在しており、廃棄用の穴としての性格をもつものと考えられる。尚、ピット 1 にも同様の堆積物が含まれているが、カマドの脇に位置し、東壁に沿っていること、底面が平坦で壁が急角度で立ち上がっていることなどから貯蔵穴の性格をもつものと考えられる。

〔出土遺物〕床面での出土はなく、カマド・ピットから少量の土器、堆積土（3 層及び 5 層）から大量の遺物（一括遺物も含まれる）が出土している。土器類はすべてロクロ使用である。図示したものは土師器坏 9 点・甕 9 点、赤焼土器坏 7 点・高台付坏 1 点、釘・砥石各 1 点である。

SI 20 住居跡

〔遺存状況・平面形・規模〕調査区西端に位置するため部分的検出である。検出状況から判断して隅丸の方形プランを呈すると考えられる。規模は南北辺東側で 3.0 m を計る。東壁の方向は真北ラインに対し東へ約 15 度偏している。

〔重複関係〕SI18 住居跡を切り、ピットに切られている。

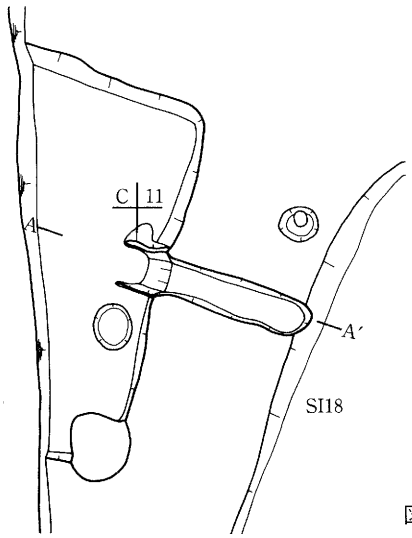
〔堆積土〕カマド堆積土を含めて 6 層確認している。褐色系のシルト層である。

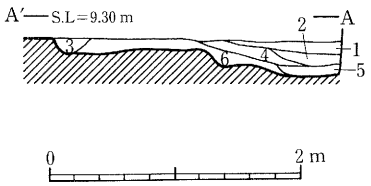
〔壁〕床面から急角度で立ち上がる。残存壁高は 20〜30 cm を計る。

〔床面〕住居掘り方底面を床としており、平坦である。ピットを 1 個確認している。

〔柱穴〕部分的検出のため不明である。

〔カマド〕東壁中央部に設置されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部外側が遺存しておら



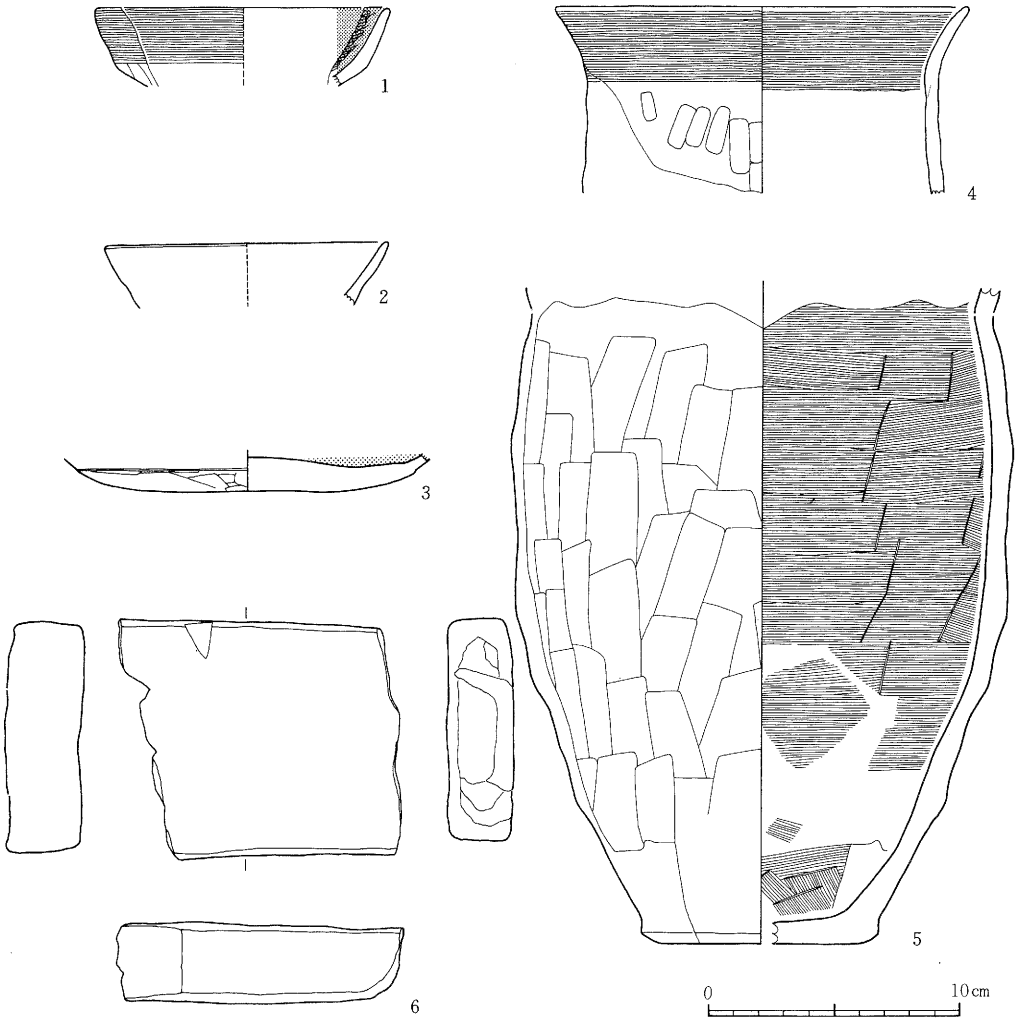


層	土　色	土　性	備
1	褐色（7.5YR3/4）	粘土質シルト	炭化物少量含む
2	暗褐色（7.5YR3/3）	シルト	炭化物・焼土を含む
3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	焼土を含む
4	褐色（10YR4/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土・土器片を含む
5	褐色（7.5YR4/4）	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む
6	にぶい黄褐色(10YR3/4)	シルト	焼土及び多量の炭化物を含む

図 18　SI 20 住居跡

ず形状・規模が不明であるが、内法 30 cm のみ計測される。粘土質土で構築されている。底面は赤変し堅くなっており、奥壁にかけて高くなる。奥壁は急角度で立ち上がり 15 cm 程の段を形成し煙道部へ続く。煙道部底面はほぼ平坦に延び先端部で若干低くなり急角度に立ち上がる。長さ 118 cm・幅 32 cm を計る。

〔出土遺物〕部分的な遺構確認であるため若干量の出土にとどまっているが、カマド周辺の床面で一括遺物が確認されている。土器類はすべてロクロ不使用である。図示したものは土師器坏



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
19－1	土師器	坏	カマド	口縁部－ヨコナデ　体部－ナデ・ヘラケズリ？	口縁部～体部－ヘラミガキ 黒色処理	(118)	－	－	A1	
－2	土師器	坏	カマド	不明	不明	(113)	－	－	A1？	再酸化
－3	土師器	坏	埋土 (カマド脇)	口縁部－不明 底部－あさいヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラミガキ（横位・一方向） 黒色処理	－	－	－	A3	
－4	土師器	甕	カマド	口縁部－ヨコナデ 体部上部－ナデ	口縁部－ヨコナデ	(164)	－	－	A1	
－5	土師器	甕	カマド	口縁部－不明　体部－ヘラケズリ状のナデ 底部－木葉痕？	体部－ヘラナデ	－	94	－	A1	再酸化
－6	土師器	土板	埋土 (カマド脇)	両端欠損　長方形？を呈する　幅－90～95 mm、厚さ－25～30 mm 5 mm 前後の粘土板をまるめている。外面－ナデ及び指のオサエ						

（単位：mm）

図 19　SI 20 住居跡出土遺物

3点・甕2点、土製品1点である。

SI 21 住居跡

〔遺存状況・平面形・規模〕平面形は隅丸の方形であるが、壁の長さに違いがあり北側部が歪んでいる。大きさは東西辺中央で3.1 m・南北辺中央で3.2 mを計る。床面積約9 m²を有する。西壁の方向は真北ラインに対し東へ4度偏する。

〔重複関係〕ピットに切られている。

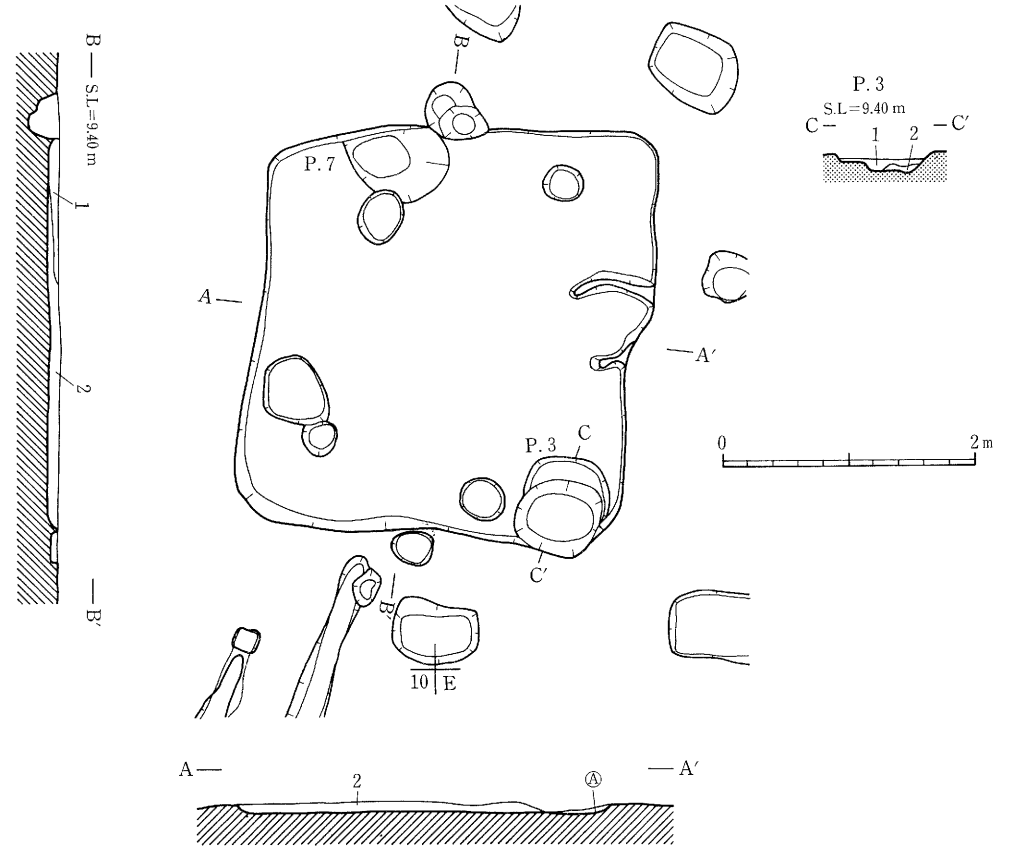
〔堆積土〕2層確認している。暗褐色のシルト層である。

〔壁〕床面からゆるやかに立ち上がる。残存壁高は8〜10 cmを計る。

〔床面〕住居掘り方底面を床としている。ほぼ平坦である。

〔柱穴〕ピットを7個検出しているが柱穴となりうるものはない。

〔カマド〕東壁中央部に設置されている。燃焼部側壁のみの確認である。粘土質土で構築されて



層	土　色	土　性	備
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	炭化物・土器片少量含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	土器片を含む
A	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	(カマド) 多量の焼土・炭化物を含む

Pit. 3

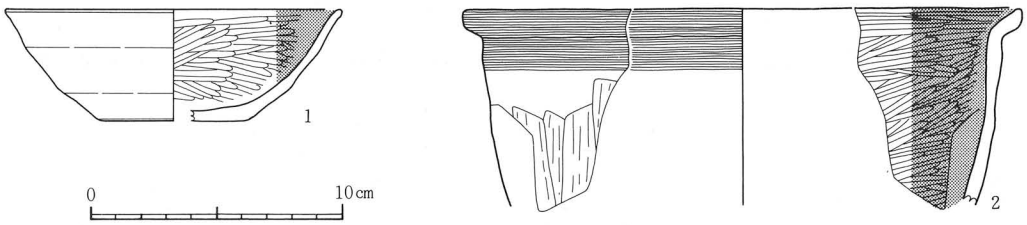
層	土　色	土　性	備
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土・炭化物を含む
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	

図20　SI 21 住居跡

いる。大きさは外法 70 cm・内法 50 cm・奥行 60 cm を計る。底面は赤変し堅くなっており、焚口部から奥壁にかけて浅い皿状を呈し、中央部がわずかに低くなっている。

〔その他・施設〕東南隅部に貯蔵穴状のピット（ピット 3）を確認している。平面形は不整な隅丸の方形を呈し、長軸 80 cm・短軸 75 cm を計る。中間部にテラス状の段をもち、底面は楕円形でほぼ平坦である。壁はなだらかに立ち上がり、深さ 15 cm を計る。埋土には炭化物・焼土が多く含まれている。遺物は出土していない。

〔出土遺物〕床面・カマド・ピットから少量の土器が出土したのみである。ロクロ不使用の土師器甕がピット 7 から 1 点出土しているが、他はすべてロクロ使用のものである。図示したものは土師器坏 1 点・甕 1 点である。



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
21－1	土師器	坏	床面	ロクロ調整 底部－糸切り痕	ヘラミガキ（横位） 黒色処理	134	59	45	B3a	
－2	土師器	鉢	Pit.	口縁部～体部上部－ヨコナデ 体部－あさいヘラケズリ	ヘラミガキ（横位） 黒色処理	(222)	－	－	A1	ロクロ不使用

（単位：mm）

図 21　SI 21 住居跡出土遺物

2．竪穴遺構

1 基確認している。形態的には住居跡と同様であるが、カマド及び付属施設等が確認されなく住居跡とは区別した。

SI 22 竪穴遺構

〔遺存状況・平面形・規模〕全体的に遺存不良で西側部は削平をうけ床面及び壁が遺存しない。平面形は状況から判断して隅丸の長方形を呈すると考えられる。規模は南北辺中央で 3.7 m・東西は北壁で 4.2 m まで計れる。

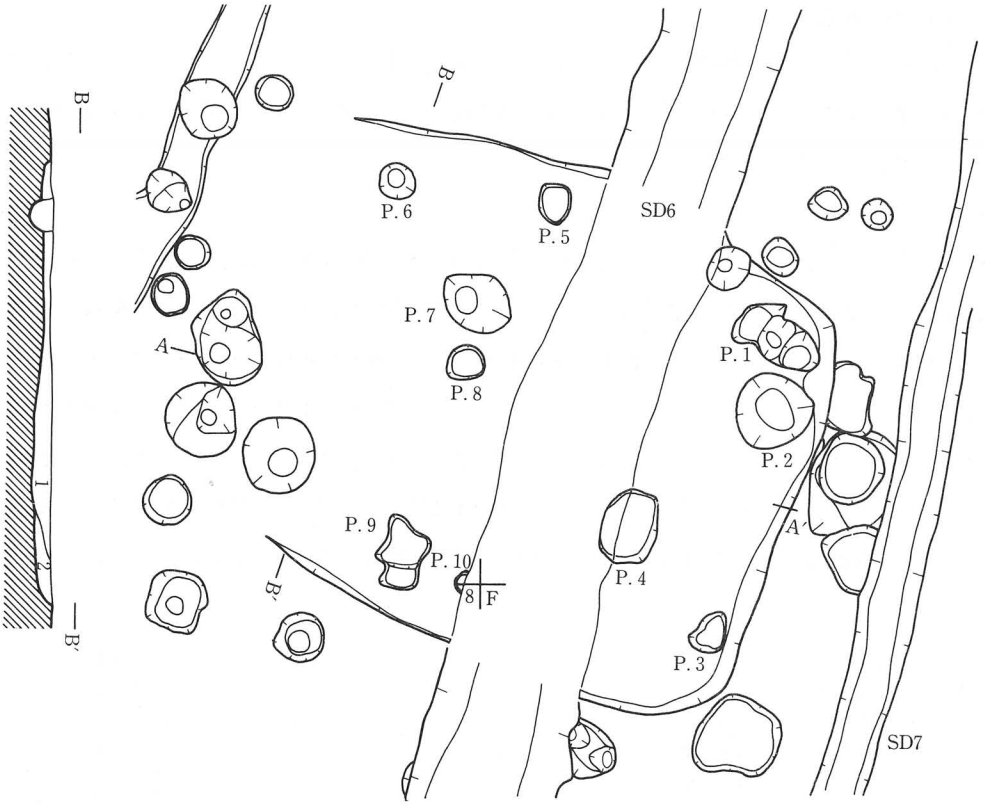
〔重複関係〕SD6 溝跡・ピット群に切られるが、東壁ではピットを切っている。

〔堆積土〕3 層確認している。褐色系のシルト層である。

〔壁〕底面からゆるやかに立ち上がる。残存壁高は 0～10 cm を計る。

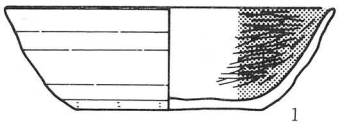
〔底面〕掘り方下部が底面となる。ゆるやかな起伏がみられ、全体として凹凸面である。底面でピットを 10 個確認しているが柱穴となりうるものはない。西側部のピットは遺存状況の関係から帰属が不明である。

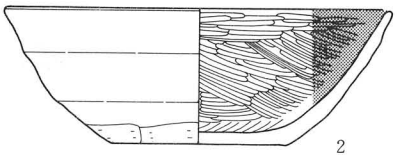
〔出土遺物〕堆積土及びピットから少量の土器類が出土しているが多くは破片資料である。すべてロクロ使用である。図示したものは土師器坏 2 点、須恵器坏 1 点である。

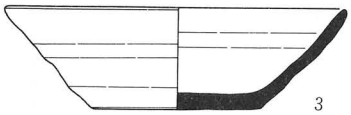


層	土　色	土　性	備
1	褐色（10YR4/4）	シルト	焼土・炭化物・土器片を含む
2	褐色（10YR4/6）	シルト	
3	褐色（10YR4/4）	シルト	

図 22　SI 22 竪穴遺構







図・番	種　別	器　種	層　位	外　面　調　整	内　面　調　整	口径	底径	器高	分類	備
23－1	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 体部下端～底部－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・一方向） 黒色処理	132	74	41	B1	
－2	土師器	坏	埋土	ロクロ調整 体部下端～底部－手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	154	69	54	B3b	
－3	須恵器	坏	埋土	ロクロ調整 底部－回転ヘラ切り痕	ロクロ調整	136	67	41	2	

図 23　SI 22 住居跡出土遺物

3．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡（以下、建物跡）は東西と南北の柱列が検出されたものに限定し、3棟確認している。全容が判明するもの2棟、不明のもの1棟である。住居跡群同様に調査区西側に位置するが、分布からみると散在している。

SB10 建物跡

F-4・5区で確認された。東西方向1間・南北方向2間の建物跡である。建物方向は東側柱列で真北ラインに対し東へ約28度偏している。柱穴掘り方の平面形は円形ないし隅丸の方形で、径51～63 cmを計る。深さは遺存状態の良好なもので30 cmを計る。柱痕跡はすべての柱穴にみられ、径15～20 cm程で円形を呈するものが多い。柱穴埋土は褐色系の粘性の強いシルト質土であるが、堅くつき固めるような方法はみられない。柱間寸法は東側柱列で北から128＋120 cmで総長248 cm、西側柱列で北から129＋106 cmで総長235 cm、北側柱列で237 cm、南側柱列で210 cmを計る。柱穴埋土よりロクロ使用の土器の細片が少量出土したのみである。

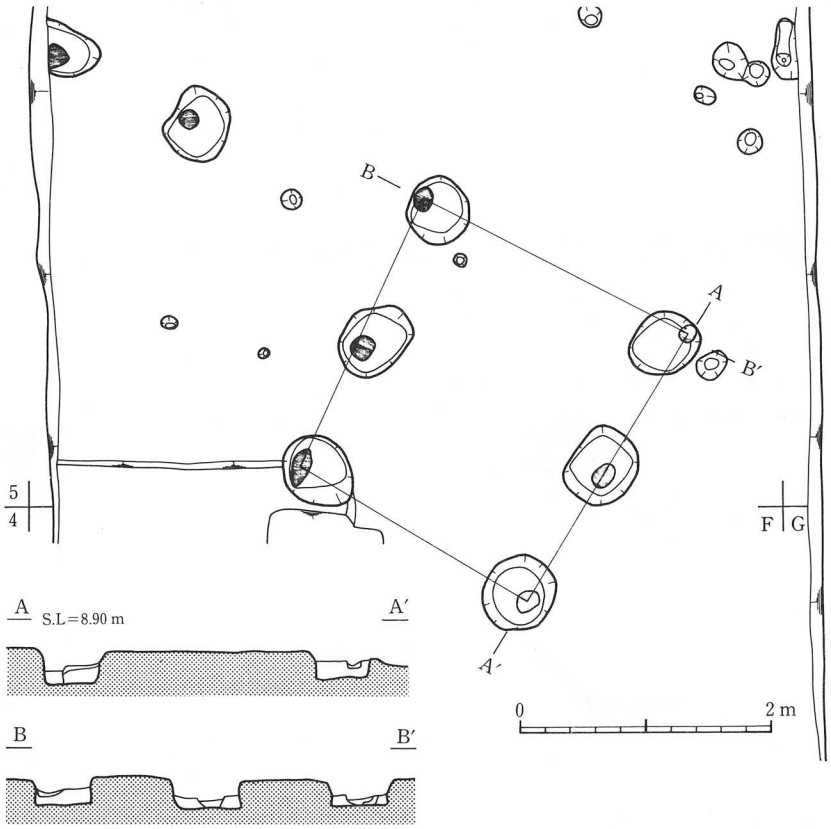


図24　SB10 建物跡

SB23 建物跡

F-7・8 区で確認された。東西方向 1 間以上・南北方向 3 間以上の建物跡である。SK17 土坑と重複しており土坑に切られている。ピット K ①は柱痕跡を有し西側柱列を構成する柱穴とも考えられたが、直線的に通る柱列からづれていることからピット K ②が柱穴として妥当と考えた。建物方向は西側柱列で真北ラインに対し東へ約 28 度偏している。柱穴掘り方は隅丸方形を基調としており径 45〜53 cm を計る。深さは遺存状態の良好なもので 54 cm を計る。柱痕跡は径 15 cm 程の円形である。柱穴埋土は褐色系の粘性の強いシルト質土である。柱間寸法は西側柱列で南から 175＋417（二間分）cm、南側柱列で 225 cm を計る。柱穴埋土よりロクロ使用の土器片が少量出土している。

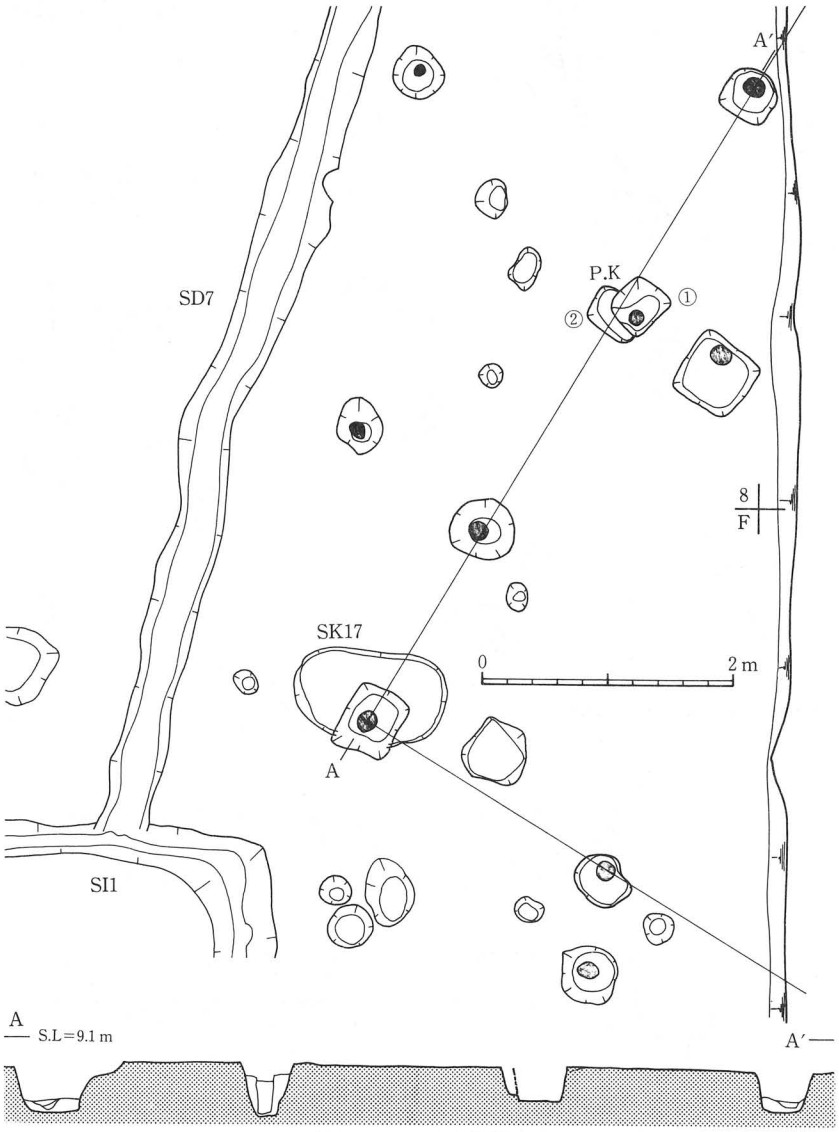


図 25　SB23 建物跡

SB24 建物跡

D・E-11・12 区で確認された。東西方向 2 間・南北方向 3 間の総柱の建物跡である。建物方向は西側柱列で真北ラインに対し東へ約 16 度偏している。柱穴掘り方は円形ないし隅丸方形で、北側・南側端部の東西柱列の規模が大きく径 62〜82 cm を計り、他は 40〜55 cm 程と差がみられる。深さは遺存状態の良好なもので 69 cm を計る。柱痕跡はすべての柱穴にみられ 13〜20 cm 程で円形を呈している。柱穴埋土は褐色系の粘性の強いシルト質土で、焼土や炭化物を含む柱穴もみられる。柱間寸法は東側柱列で北から 126＋148＋173 cm で総長 447 cm、中央柱列で北から 155＋96＋191 cm で総長 442 cm、西側柱列で北から 143＋113＋179 cm で総長

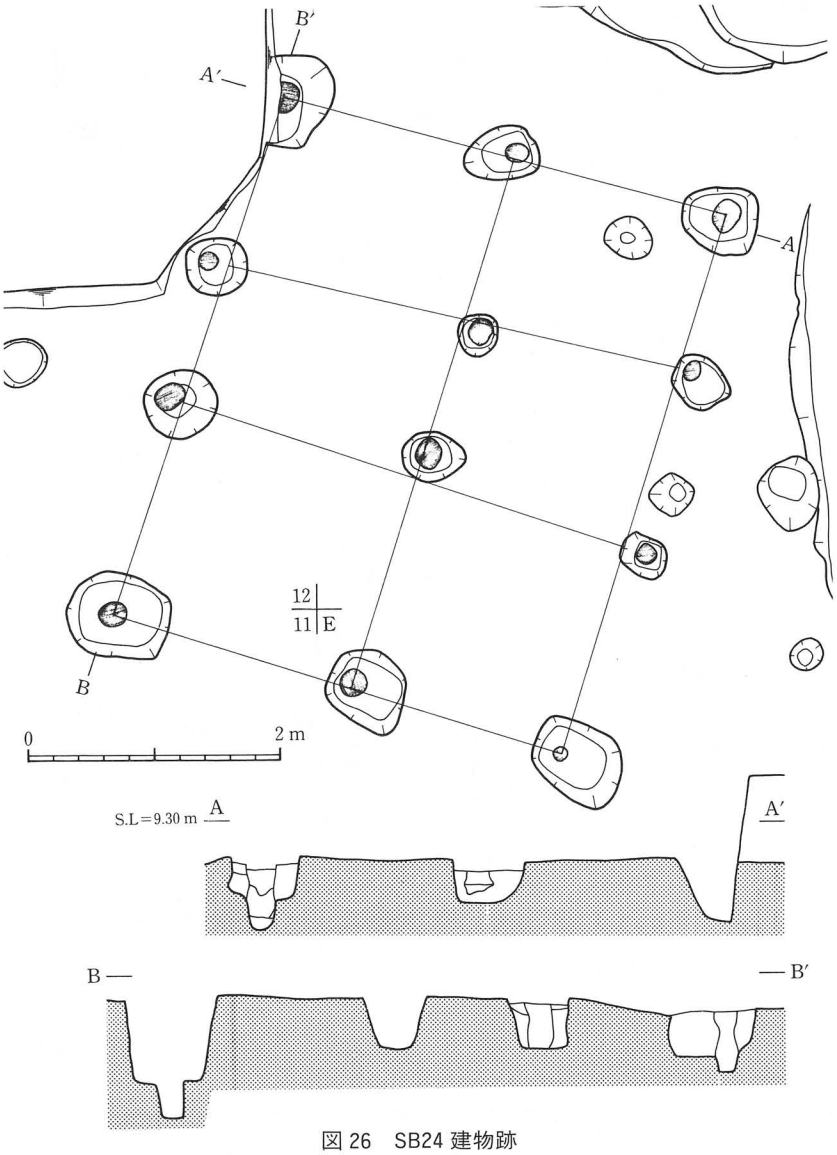


図 26　SB24 建物跡

435 cm、北側柱列で西から 190＋174 cm で総長 364 cm、南側柱列で西から 198＋176 cm で総長 374 cm を計る。柱穴埋土よりロクロ使用の土師器片（坏・甕）、赤焼土器片、須恵器坏片、礫が出土している。

4．土坑

SK4 土坑

H-6 区に位置する。平面形は方形を基調とする不整形を呈する。規模は短軸で 1.5 m・長軸で 1.9 m まで計れ、深さは最大で 40 cm である。北東部辺でピットに切られている。堆積土は 3 層確認し、褐色系のシルト質土である。3 層上面から多量の土器群が面的に検出されている。底面は浅いピットが 1 個みられるがほぼ平坦面となっており、壁は東西部分にゆるい傾斜面がみられるが全体として急角度な立ち上がりをみる。遺物は上記の 1 層のみの出土で、状況から廃棄の性格をもつ土器群と考えられる。種類として土師器・須恵器・石製品（砥石）があり、「太」と墨書された土師器坏が 6 点ある。図示資料は土師器坏 10 点・高台付坏 2 点・甕 3 点、須恵器坏 1 点、砥石 1 点である。

SK5 土坑

H-6・7 区、4 土坑北西側に位置する。平面形は円形を基調とする不整形を呈する。規模は長軸で 1 m・短軸で 90 cm・深さは最大で 25 cm である。堆積土は 2 層確認し、黒褐色系のシルト質土である。2 層上面から一括の土器群が出土している。底面は南側から北側へゆるい傾斜がみられ北側はピット状に落ち込んでいる。壁は全体として急角度に立ち上がっている。遺物は 2 層面のみの出土で、種類として土師器・須恵器がある。図示資料は土師器坏 3 点・甕 1 点である。

SK8 土坑

K-12 区に位置する。平面形は円形を基調とする不整形である。規模は長軸で 2.1 m・短軸で 1.4 m・深さは最大で 70 cm である。堆積土は 1 層確認し黄褐色の粘土質のシルトである。壁は急角度で立ち上がるが、底面は凹凸がいちじるしく不安定となっている。遺物はない。

SK9 土坑

M-12・13 区に位置する。平面形はやや不整な長円形である。規模は長軸で 2.2 m・短軸で 1.2 m・深さは最大で 30 cm である。堆積土は 1 層確認し暗灰黄色のシルトである。壁はゆるやかで断面は皿状を呈し、底面は凹凸となっている。遺物はない。

SK12 土坑

I-13 区に位置する。北側部が調査区外へ延びるため全容は不明であるが平面形は不整な円形と考えられる。規模は東西軸で 1.5 m・南北軸で 90 cm まで計れ、深さは最大で 55 cm である。堆積土は 1 層確認し暗灰黄色の粘土質シルトである。壁は急角度に立ち上がり、底面は大きな

凹凸がみられ不安定となっている。遺物として土師器片がある。

SK13 土坑

F-15 区に位置する。平面形は円形を基調とする長円形を呈する。規模は長軸で 1.1 m・短軸で 65 cm・深さは最大で 16 cm である。堆積土は 1 層確認し暗褐色のシルトで、炭化物・焼土が含まれている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であるが東側にやや傾斜している。遺物は土器片が少量出土している。

SK14 土坑

E-12 区に位置する。15 土坑を切っている。北側部が調査区外になるため全容は不明であるが平面形は円形を基調とする。深さは最大で 12 cm を計る。堆積土は 1 層確認し、暗褐色のシルトである。壁はゆるやかに立ち上がり底面はほぼ平坦である。遺物はない。

SK15 土坑

E-12 区に位置する。14 土坑に切られており部分的な確認である。平面形・規模等不明となっているが深さは 12 cm 前後を計る。堆積土は 1 層確認し、暗褐色のシルトである。壁はゆるやかに立ち上がる。遺物はない。

SK16 土坑

D-8 区に位置する。西側部が調査区外となるため全容は不明であるが、平面形は方形を呈する。規模は南北軸で 1.45 m・東西軸で 1.5 m まで計れ、深さは 5 cm 程である。堆積土は 1 層確認し暗褐色のシルトである。壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦でやや東側へ傾斜をみる。遺物はない。

SK17 土坑

F-7 区に位置する。SB23 建物跡ピット F を切っている。平面形は長円形を呈する。規模は長軸で 1.2 m・短軸で 75 cm・深さは最大で 15 cm である。堆積土は 2 層確認し、褐色系のシルトである。1 層中には土器片とともに多量の炭化物と焼土が含まれていた。壁はゆるやかな立ち上がりで断面は皿状を呈する。遺物は少量の土師器片のみである。

SK28 土坑

F-12 区に位置する。SI2 住居跡に切られている。平面形は方形を呈すると考えられる。規模は南北辺で 1.9 m・東西辺で 95 cm まで計れ、深さは最大で 7 cm である。堆積土は 2 層確認し、暗褐色のシルトである。焼土及び炭化物が少量含まれていた。壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物はない。

SK29 土坑

E-11 区に位置する。平面形は隅丸の長方形を呈する。規模は長軸で 1 m・短軸で 55 cm・深さは 10 cm である。堆積土は 2 層確認し、黒褐色系のシルトである。炭化物を多量に含み、焼

土及び土器片もみられる。壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦で炭化物が面的に広がっている状況が確認されている。遺物は土師器片が少量ある。

SK31 土坑

E-7 区に位置する。平面形はやや歪んだ円形を呈する。規模は径 68 cm 程で深さは 20 cm である。堆積土は 2 層確認し、褐色系のシルトである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺物はない。

SK32 土坑

E-7・8 区に位置する。平面形はやや細長い長円形を呈する。規模は長軸で 88 cm・短軸で 36 cm・深さは最大で 28 cm を計る。堆積土は 3 層確認し、黄褐色系のシルトである。壁は垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦でやや北側に傾斜をみる。遺物はない。

SK36 土坑

F-9 区に位置する。22 竪穴遺構・ピットに切られている。平面形は円形を基調とするが不整

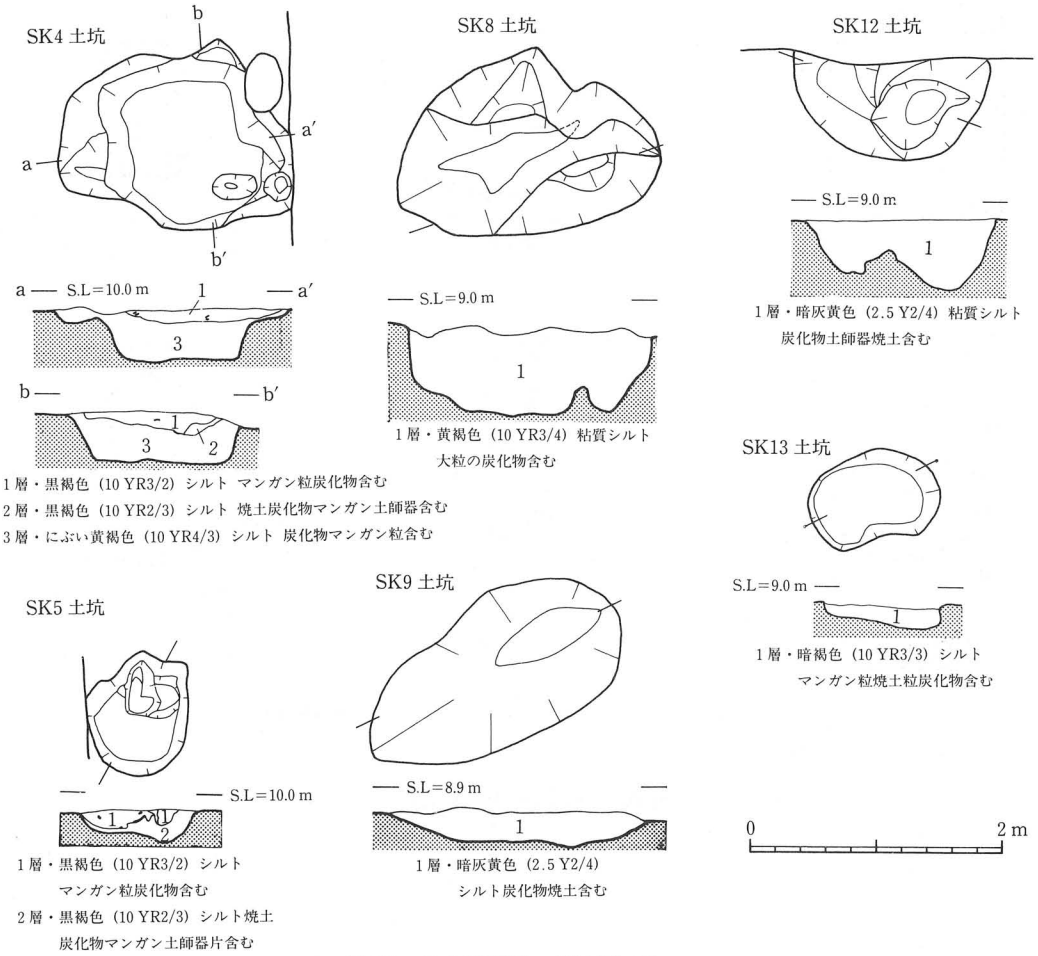


図 27　各土坑平面・断面図（1）

形を呈している。規模は長軸で 82 cm・短軸で 72 cm・深さは最大で 20 cm である。堆積土は 1 層確認し、黒褐色のシルト質の粘土である。多量の焼土・炭化物がみられ土器片も少量含まれている。壁は急角度に立ち上がっており、底面はほぼ平坦でやや西側へ傾斜をみる。遺物は土師器片が少量ある。

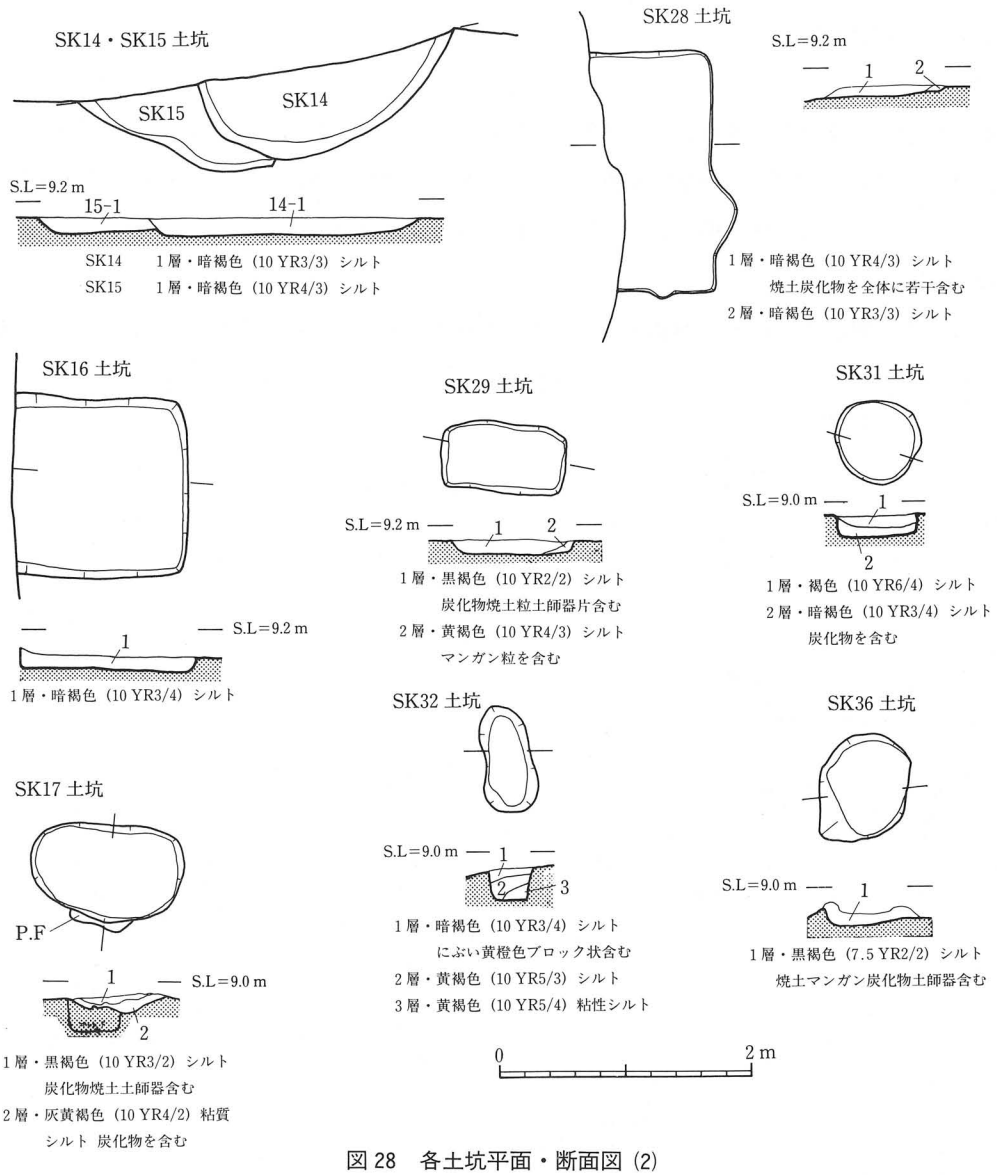
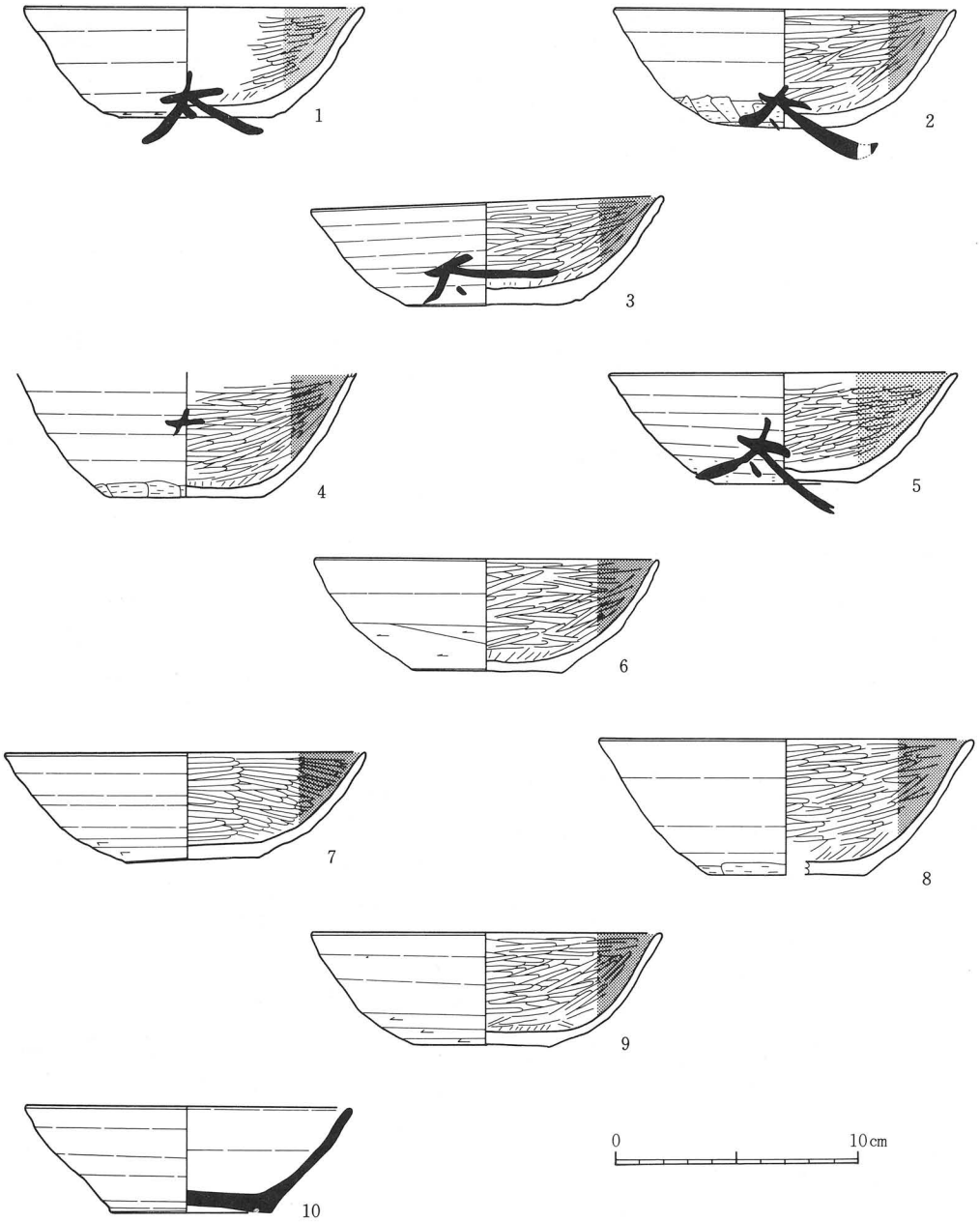


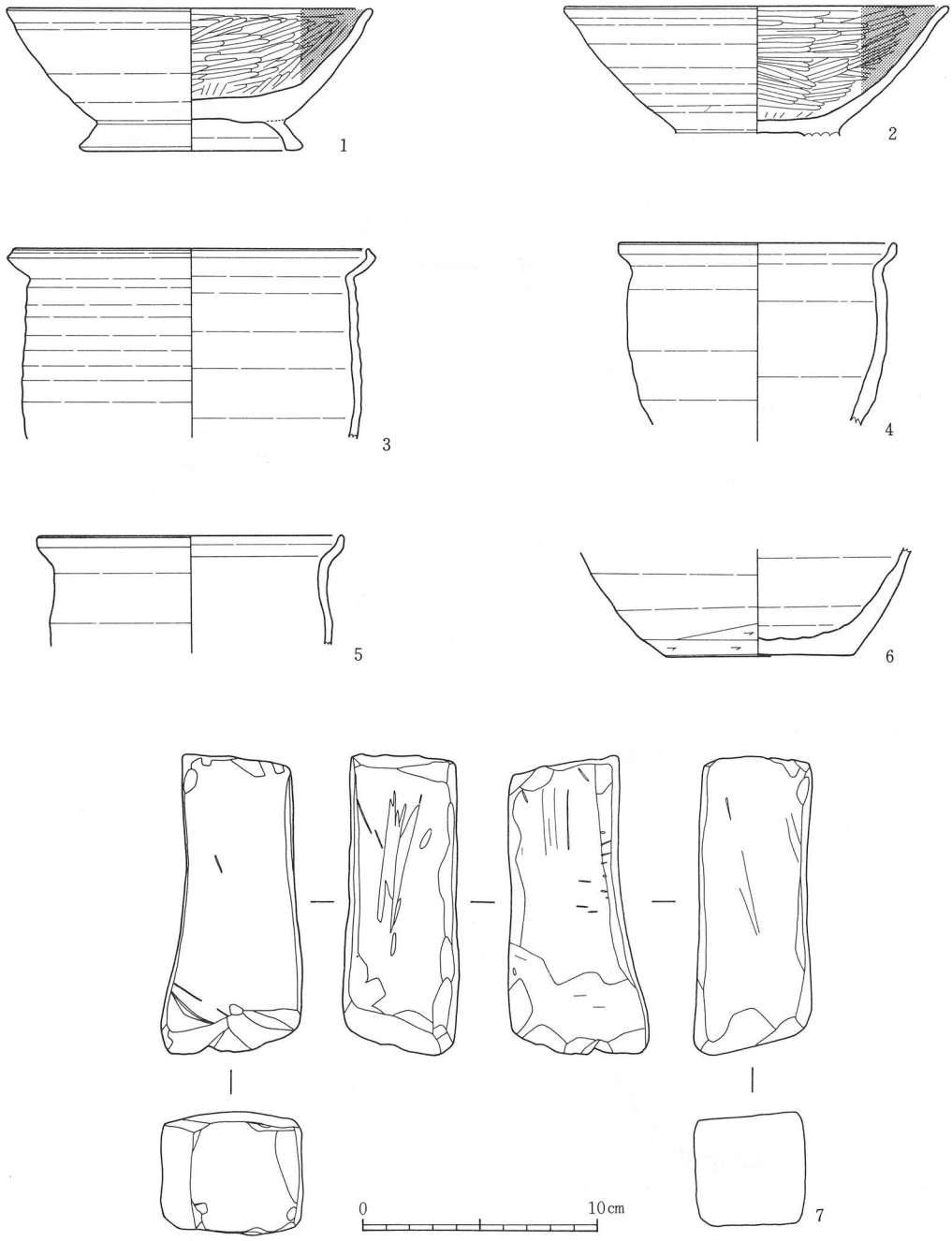
図 28　各土坑平面・断面図 (2)



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
29－1	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下端～底部－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	141	64	46	B4c	墨書「太」 再酸化
－2	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下端～底部－手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	141	59	49	B4b	墨書「太」
－3	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 底部－糸切り痕、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	145	70	42	B2b	墨書「太」
－4	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕、体部下端～底部－手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	－	64	－	B4b	墨書「太」?
－5	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下端～底部－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位） 黒色処理	144	58	46	B4c	墨書「太」
－6	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下部－回転ヘラケズリ 底部－手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	142	63	46	B3b	
－7	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下端～底部－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位） 黒色処理	149	54	44	B4c	墨書「太」有り 極めてうすい
－8	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下端～底部－手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	154	64	56	B4b	
－9	土師器	坏	3層上面	ロクロ調整 体部下端～底部－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	144	56	46	B4c	
－10	須恵器	坏	3層上面	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	134	65	44	2	

（単位：mm）

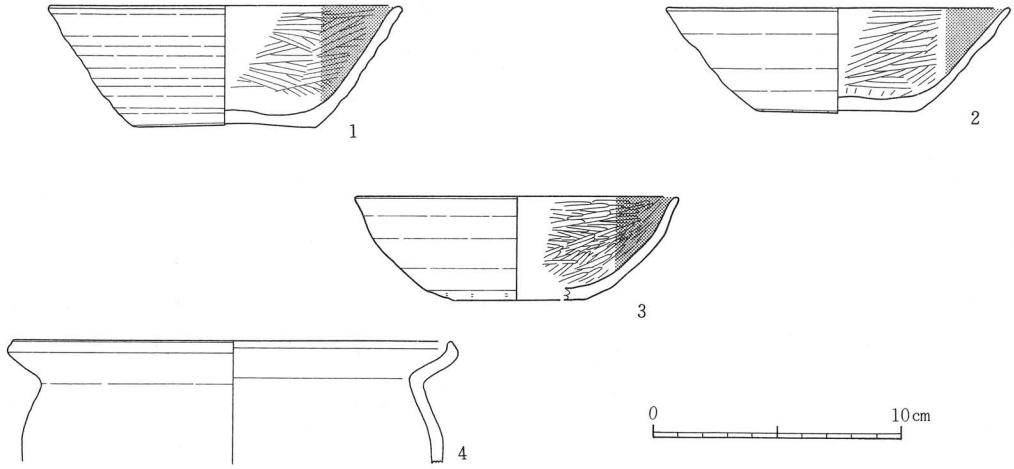
図 29　SK4 土坑出土遺物（I）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
30－1	土師器	高台付坏	3層上面	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	156	高台径 95	61		付高台
－2	土師器	高台付坏	3層上面	ロクロ調整 底部・高台部分的に欠損	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	164	－	－		付高台・再酸化
－3	土師器	甕	3層上面	ロクロ調整	ロクロ調整	156	－	－	B2	
－4	土師器	甕	3層上面	ロクロ調整	ロクロ調整	119	－	－	B2	
－5	土師器	甕	3層上面	ロクロ調整	ロクロ調整	131	－	－	B2	
－6	土師器	甕	3層上面	ロクロ調整　体部下端－回転ヘラケズリ 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	－	79	－	B1？	
－7	石製品	砥石	3層上面	上部欠損、残存長12.7cm　断面四角形、短冊型　5面に使用痕跡有り						

（単位：mm）

図30　SK4土坑出土遺物（2）



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
31－1	土師器	坏	2層上面	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ヘラミガキ（横位） 黒色処理	142	72	48	B2a	
－2	土師器	坏	2層上面	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕、体部下端－かるい回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	138	63	42	B2c	
－3	土師器	坏	2層上面	ロクロ調整 底部－糸切り痕？ 体部下端－回転ヘラケズリ	ヘラミガキ（横位・放射状） 黒色処理	130	54	42	B3c	
－4	土師器	甕	2層上面	ロクロ調整	ロクロ調整	181	－	－	B1	

（単位：mm）

図 31　SK5 土坑出土遺物

5．溝跡

SD6 溝跡

調査区を縦走する溝で東西及び南北辺が確認されている。東西辺が E-7 区でほぼ直角に北側へ屈曲し、南北辺は F-12 区付近でゆるやかに西側へ屈曲し北側へ延びている。確認長は約 55 m である。上幅は東西辺で 1.6 m 前後、南北辺南側で 0.9～1 m 前後、北側で 2.3～2.7 m 前後と形状に違いがみられる。底面幅も同様に違いがみられ、断面形は東西辺及び南北辺北側が逆台形を呈するが南北辺南側はやや深い皿状を呈する。深さは最大で 50 cm を計る。底面は浅い凹凸はみられるがほぼ平坦である。南北辺の 12 区から北側は溝の拡幅が起因と考えられる南北に延びる段がみられ断面が凹凸となっており、東西辺西側部には段が形成され西側が 3～6 cm 程高くなっている。底面高は北側と南側が低くなっており中央部がやや高く平となっている。1 住居・22 竪穴遺構・ピットと重複関係にありすべてを切っている。堆積土は大別して 4 層確認し、溝全域でほぼ同様の堆積土状況がみられた。遺物は各層から出土しているが底面からの出土はない。種類として土師器・須恵器・中世陶器・金属製品（鉸具）・土製品（土錘）がある。図示資料は鉸具 1 点、土錘 1 点である。

SD7 溝跡

調査区を縦走する溝で部分的に 6 溝とゆるい蛇行をみながら並走している。H-12・13 区で二股になり河川付近で途切れている。確認長は約 44 m である。幅等形状はほぼ均一で上幅は 30～40 cm 前後で、断面形は浅い皿状を呈する。底面はやや凹凸はみられるが平坦である。底面

高はほとんど差がない。1住居・36土坑・ピットと重複関係にありすべてを切っている。堆積土は1層確認し、黒褐色のシルトである。遺物は底面からの出土はなく土器類が小破片となって出土している。

SD11 溝跡

D・E-6区に位置する。確認長が約2.2mと短く不明な点が多いが、1住居南側で二股に別れている。西側の溝は斜めに延び調査区外となるが東側の溝は1住居西南隅に延びている。柱穴列が住居と溝を切っており詳細は不明であるが住居に取り付く溝の可能性も考えられる。上幅は南側が26cm・二股部分で14～16cmと細くなっている。深さは5～9cmで南側が低くなっている。断面は浅い皿状を呈する。堆積土は1層確認し、黄褐色のシルトである。遺物はない。

SD25・26・27 溝跡

C・D-11・12区で確認された溝群である。3条あり南北方向にほぼ並走しており、確認長は最大で5.5mである。ピットに切られている。方向は25溝が真北ラインに対し約27度、26・27溝が約30度東へ偏している。26・27溝間の幅は約1mである。上幅は24～40cmで、深さは2～16cmを計る。壁はやや強く立ち上がり、底面はゆるい凹凸があるが平坦となっている。堆積土は3条ともほぼ同じで褐色のシルトを1層確認している。遺物は土器片が少量出土している。

SD34 溝跡

E-8・9区に位置している。南北方向に延びる不整形な溝であるが南側は削平してしまい不明となっている。確認長は約3.6mで、方向は真北ラインに対し約35度東へ偏している。上端が不定で部分的に突出する所もあるが上幅は60～90cmを計る。深さは10～18cmである。壁はやや強く立ち上がり断面は浅いコの字状を呈する。底面は凹凸がみられ不安定である。堆積土は2層確認し、褐色のシルトである。遺物は土器片が少量出土している。

SD35 溝跡

D・E-8・9区に位置する。中央部で途切れるが方向等から同一のものと判断した。19住居・ピットに切られている。住居との接点部で形状が膨らみ方形となるが底面高などから一連のものと判断した。確認長は約8.8mで、方向は真北ラインに対し約23度東へ偏している。上幅は36～54cmで、深さは4～15cmである。壁は強く立ち上がり断面は浅いコの字状を呈する。底面はゆるい凹凸がみられるがほぼ平坦である。堆積土は1層確認し、黄褐色のシルトである。遺物は土器片が少量出土している。

6．その他

SR33 河川跡

調査区東側に位置する。西辺部のみの確認で対岸が不明であるが幅は30mを超すものと考

えられる。方向は北西－南西である。確認面で８・９・12土坑、７溝、ピットが検出されている。掘り込みは深さ１ｍ程までしか行っておらず全容は不明である。堆積土は大別して４層まで確認したが褐色系のシルトでやや砂質である。壁は急角度に立ち上がっている。壁面には数個のピットがみられたが組み合うものはない。遺物は土師器・須恵器・赤焼土器・自然礫がある。図示資料として土師器坏１点・赤焼土器皿１点がある。

柱穴群

調査区の制約等で建物跡ないし柱列（塀跡等）と認定できない柱痕跡をもつ柱穴が数多く散在している。特に６～11区に顕著で建物跡等が想定されるが不定となっている。

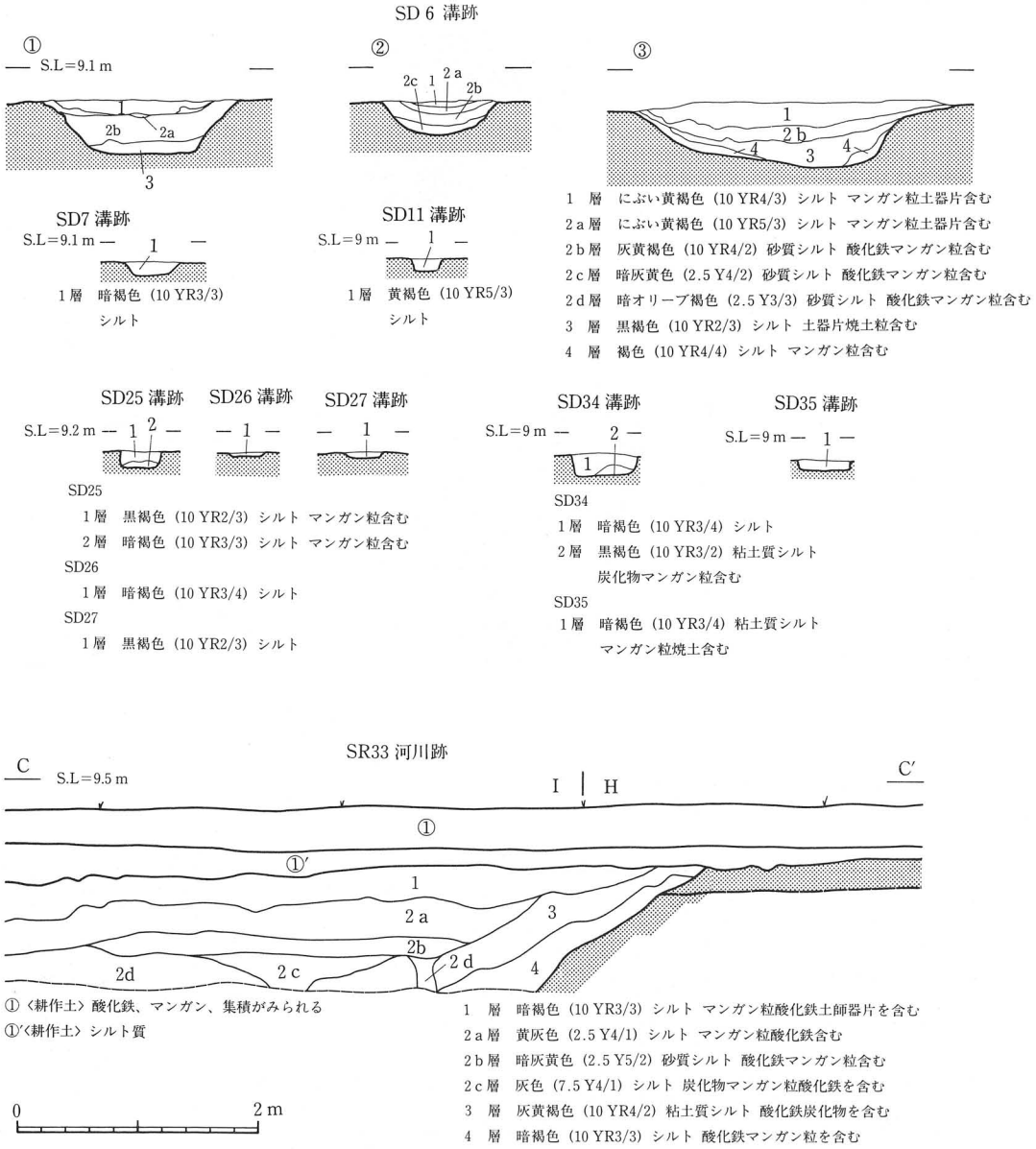
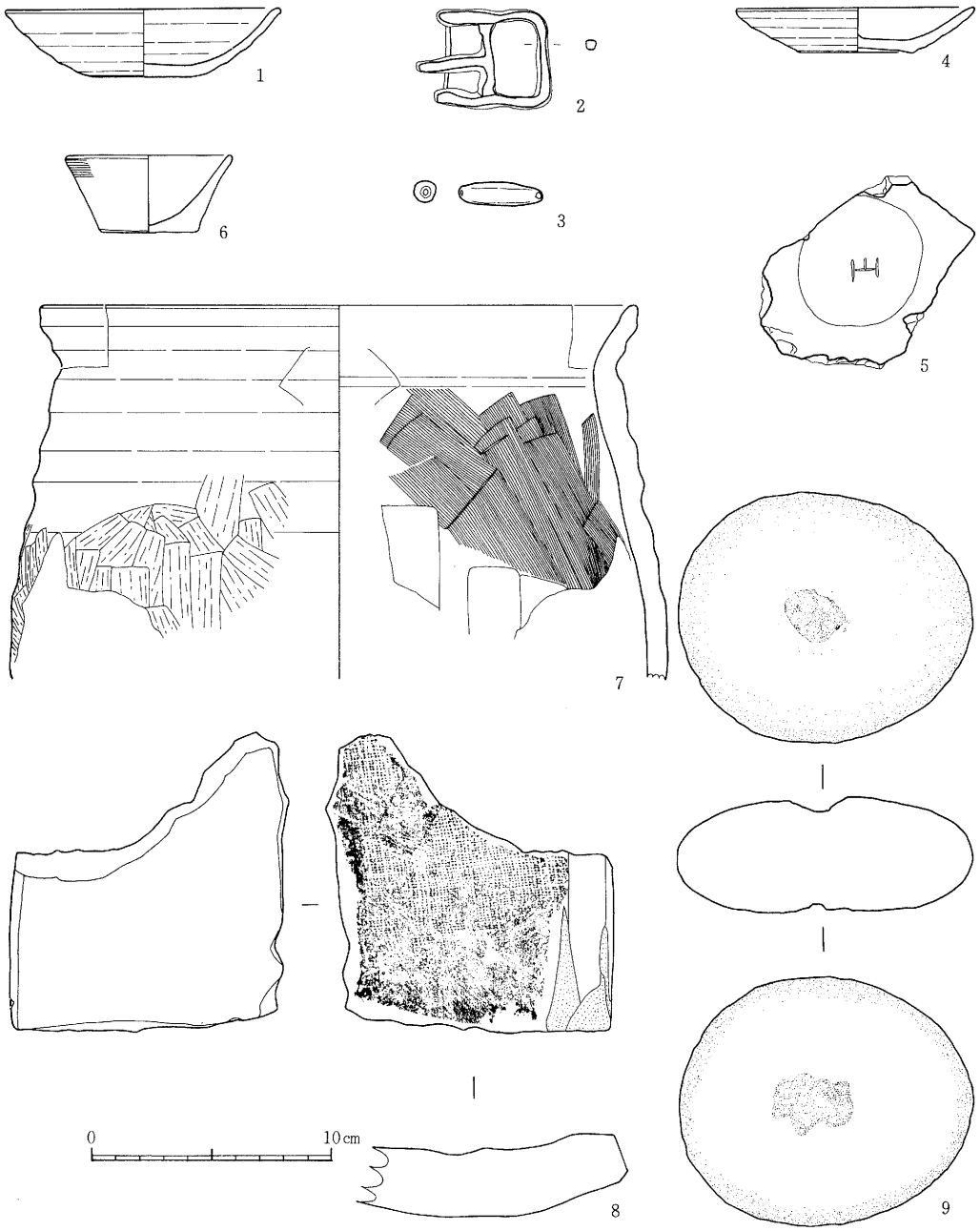


図 32　溝跡・河川跡断面図



図・番	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	分類	備
33－1	赤焼土器	皿	Pit. 105	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	116	44	28	3	ピット 105
－2	鉄製品	敍具	埋土	横 4.9 cm　縦 4.2 cm、枠中央に T 字形の刺金、鍛造品？						SD6 溝跡
－3	土製品	土錘	埋土	長さ 35 mm、幅 10 mm　断面はほぼ四角形						SD6 溝跡
－4	赤焼土器	皿	埋土	ロクロ調整 底部－回転糸切り痕	ロクロ調整	100	47	19	4	河川跡
－5	土師器	坏	埋土	底部－ヘラケズリ、底部中央、山の刻線 ロクロ不使用	ヘラミガキ 黒色処理	－	－	－	B	河川跡
－6	土師器	坏	耕作土	摩滅　ロクロ不使用 口縁部付近にヨコナデ	摩滅	70	41	32	A6	
－7	土師器	甕	耕作土	ロクロ調整 体部－縦位のヘラケズリ	体部－ヘラナデ・ナデ	249	－	－	B1	
－8	瓦	平瓦	耕作土	凸面－縄叩き後、ヘラケズリ・ナデ凹面－横骨痕、布目（1 cm 7×10 本）端部縦位のヘラケズリ 色調－灰色硬質　最大厚 2.9 cm						
－9	石製品	凹石	耕作土	中央部両面に凹面　長径 12.3 cm　短径 10.4 cm						

（単位：mm）

図 33　その他の遺構・遺構外出土遺物

Ⅳ．出土遺物について

Ⅰ．出土遺物の種類と分類

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・赤焼土器・須恵器・陶器・磁器・瓦・土製品・石製品・金属製品・礫などがある。全体として土師器・赤焼土器・須恵器の三種の出土量がもっとも多く、遺構間での強い共伴関係をもつものもみられる。

以下、図示可能な資料を中心に種類毎に分類も含めて記述していく。

Ⅰ） 土師器

器種には坏・高坏・高台付坏・甕・鉢がある。成形段階でロクロを使用するものと不使用のものがあり、比率的には前者が多い。図示総数は76点である。

坏：図示資料は43点である。住居跡や土坑から他の土器類とともにまとまりをもって出土しており、墨書や刻線をもつものもある。製作技法の違い、ロクロ使用と不使用の点、から大きく2類に分けられる。さらに器形・調整の違いから細分が可能である。

坏A類：製作に際しロクロを使用していない。大きくみて相似形を呈するが法量等の違いから大別して6類に分けられる。図示資料は11点である。

A1類：底部は丸底で、口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。底部と口縁部の境に屈曲がつく。全体に小振りである。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、底部がヘラケズリで、内面は全面にヘラミガキが施され、黒色処理されている。口縁径は9〜11 cm、器高は3 cm程である。

A2類：口縁部の破片資料である。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。体部との境に浅い沈線が巡る。

A3類：底部中心の破片資料である。底部は偏平な丸底を呈するもので口縁部との境にかるい段をもつ。器面調整は外面がヘラミガキ及びヘラケズリで、内面はヘラミガキが施され黒色処理されている。

A4類：底部は丸底風の平底で、体部から内弯気味に立ち上がり口縁部が外傾しおさまるもの(a)、外反するもの(b)が認められる。器面調整は両者とも外面で口縁部がヘラミガキ、底部がヘラケズリで、内面はヘラミガキが施され黒色処理されている。口縁径は15〜16 cm、器高は(a)で3.5 cm、(b)で4 cm程である。

A5類：底部は平底で、体部は外傾気味に立ち上がり口縁部で直立気味となる。摩滅のため器面調整は不明であるが黒色処理が認められる。口縁径11 cm、底径6 cm、器高3 cm程である。

A6類：底部は平底で、口縁部にかけて直線的に外傾する。摩滅のため器面調整が不明である

が口縁部外面にヨコナデのみ観察される。口縁径 7 cm、器高 3 cm 程と小形品である。

坏 B 類：製作に際しロクロを使用している。坏内面にはすべてヘラミガキ・黒色処理が施されている。切り離し技法が確認されるものはすべて回転糸切りである。再調整のため底部が丸底を呈するものもある。法量値を中心に器形を観察すると大きく 4 類に分けられる。図示資料は 32 点である。

B1 類：口径に対し底径の比率が大きいため、やや偏平で四角形を呈する器形をもつ。底部端から口縁部にかけて急角度に外傾気味に立ち上がる。体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ(c)の再調整が施される。切り離し技法は不明である。口縁径は 13 cm、底径は 7 cm、器高は 4 cm 程である。口径に対する底径の割合が 56 %、器高の割合が 31 %、底径に対する器高の割合が 55 %の数値を示す。

B2 類：口径に対し底径の比率が B1 類に比べてやや小さい。底部端から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。体部下端から底部に手持ちヘラケズリ(b)・回転ヘラケズリ(c)の再調整が施されるもの、無調整のもの(a)がある。口縁径は 14～15 cm、底径は 6～7 cm、器高は 4～5 cm 程である。口径に対する底径の割合が 46～51 %、器高の割合が 29～33 %、底径に対する器高の割合が 60～69 %の数値を示す。

B3 類：底部端から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口唇部が外反するものもある。体部下端から底部に手持ちヘラケズリ(b)・回転ヘラケズリ(c)の再調整が施されるもの、無調整のもの(a)がある。B1・2 類に較べて器形は全体に丸みをもつ。口縁径は 13～15 cm、底径は 5～7 cm、器高は 4～5 cm 程である。口径に対する底径の割合が 42～45 %、器高の割合が 29～35 %、底径に対する器高の割合が 69～78 %の数値を示す。

B4 類：底部端から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる。口唇部が外反するものもある。体部下端から底部に手持ちヘラケズリ(b)・回転ヘラケズリ(c)の再調整が施されるもの、無調整のもの(a)がある。器形は B3 類に類似し全体に丸みをもつ。口縁径は 13～17 cm、底径は 5～6 cm、器高は 4～6 cm 程である。口径に対する底径の割合が 36～42 %、器高の割合が 30～36 %、底径に対する器高の割合が 78～94 %の数値を示す。

高坏：坏上部が欠損しており脚部のみの資料である。坏部底面にはヘラミガキ及び黒色処理が施されている。脚部は中空で、ハの字状に外方へ開き、裾部がくの字状におれている。脚中央部に方形の透かしがあり四面透かしとなっている。器面調整は外面がヘラケズリ・ナデ・裾部はヨコナデで、内面はヘラケズリ・ヨコナデである。裾部径は 14.4 cm を計る。図示資料は 1 点である。

高台付坏：器形は坏B4類に高台が付く形のもので、高台部上端から口縁部にかけてやや内弯しながら外傾気味に立ち上がり口唇部でかるく外反するものである。高台は短く、ハの字状に開く。付高台である。坏部との接合部には、かるいナデ調整がみられるが切り離しの判明するものはすべて回転糸切りである。外面はロクロ調整のみで、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。口縁径は16 cm内外、高台径は8〜10 cm、器高は10 cm内外である。図示資料は3点である。

甕：図示資料は24点である。製作に際しロクロ使用と不使用の二種がある。

甕A類：製作に際しロクロを使用していない。欠損資料で全容は不明である。法量から2類に分けられる。図示資料は8点である。

A1類：大形のもので、口縁径は16〜21 cm程である。口縁部は頸部からゆるやかに外反するものと、くの字状にきつく外反するものがある。両者とも口唇部は丸くおさまる。最大径は口縁部に位置する。残存部から推察して長胴形を呈すると考えられる。器面調整は外面が口縁部でヨコナデ、体部でヘラケズリ・ナデ、内面は口縁部でヨコナデ、体部でヘラナデ・ナデが施される。

A2類：中形のもので、口縁径は14 cm程である。口縁部は頸部からややきつく外反し口唇部で丸くおさまる。最大径は口縁部に位置する。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部内面がヘラナデである。底部に木葉痕をもつものがある。

甕B類：製作に際しロクロを使用している。形態に大きな違いはないが、法量から大きく2類に分けられる。図示資料は16点である。

B1類：大形のものである。口縁部は頸部からくの字状に外反し、口唇部は厚さに違いはあるが直立気味に立ち上がり断面が三角形を呈する。体部は丸みを帯び、最大径は体部中央に位置する。長胴を呈すると考えられる。器面調整はロクロ調整が主であるが、外面の体部中央部から下部にかけてヘラケズリがみられ、内面にヘラミガキ・黒色処理、ヘラナデ・ヘラケズリが施されるものもある。口縁径は16〜26 cm程を計り、底径・器高の知られるものは7・29 cm程である。

B2類：小形のものである。口縁部はB1類同様に頸部からくの字状に外反し口唇部は直立気味に立ち上がり断面は三角形を呈する。体部は丸みをもつものと円筒状のものがある。器面調整は内外面ともロクロ調整のみである。口縁径は13〜16 cm程で器高は20 cm弱程と考えられる。

鉢：図示資料は4点である。製作に際しロクロ使用と不使用の二種がある。

鉢A類：製作に際しロクロを使用していない。法量及び形態から3類に分けられる。

A1類：体部がやや内弯気味に立ち上がり、口縁部が頸部でくの字に外傾し短くおさまる。器面調整は外面で口縁部から頸部付近がヨコナデ、体部はヘラケズリで、内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。口縁径が22 cm程を計り、A2・3類に較べ法量が大きい。

A2類：底部から内弯気味にきつく立ち上がり、口縁部がやや内傾し口唇部が直立するものである。最大径は頸部に位置する。器面調整は外面で口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデ、体部にヘラナデがみられる。口縁径は12 cm、底径は7 cm、器高は10 cm程である。

A3類：底部から内弯気味に立ち上がり口縁部にいたる坏型の器形をもつものである。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、外面体部にはハケメ、底部付近はヘラケズリである。口縁径は18 cm、底径・器高とも8 cm程である。

鉢B類：製作に際しロクロを使用しているもので、1点のみの出土である。外傾気味に立ち上がり、端部が三角形状につまみ出され口縁部となっている。甑とも考え得る器形であるが底部周辺が欠損しており鉢とした。口縁径は25 cm程を計る。

2） 赤焼土器

製作に際しロクロを使用し、酸化炎焼成でヘラミガキ・黒色処理が施されない土器に限定しており、坏・高台付坏・皿の三種類となる。切り離し技法はすべて回転糸切りで、無調整である。図示総数は14点である。

坏：器形の違いから2類に分けられる。図示資料は10点である。

1類：土師器坏B2・3類に類似する器形をもつもので、底部端から口縁部にかけてややゆるく外傾気味に立ち上がる。口唇部が外反するものもある。口縁径は12～14 cm、底径は5～7 cm、器高は3～5 cm程である。口径に対する底径の割合が44～51％、器高の割合が29～35％、底径に対する器高の割合が61～75％の数値を示す。

2類：底部端から口縁部にかけて外傾及び内弯気味に立ち上がる。口径・器高に比し底径が小さい。口縁径は14～15 cm、底径は5 cm、器高は4～5 cm程である。口径に対する底径の割合が36％、器高の割合が29～32％、底径に対する器高の割合が81～88％の数値を示す。

高台付坏：坏部は高台部上端から口縁部にかけてゆるく内弯気味に立ち上がり口唇部でかるく外反する。高台は短く、ハの字状に開く。付高台である。器形的には土師器高台付坏に類するが器厚がうすく、高台がさらに短く、張りがよわい。口縁径は18 cm、高台径は8 cm、器高

は7 cm程である。図示資料は1点である。

皿：全体に偏平な器形で、器高が低い。容積率も少なく坏と区別した。器形の違いから2類に分けた。図示資料は3点である。

1類：口径・底径に比し器高が低く、偏平な器形をもつ。底部端から口縁部にかけてやや内弯気味に立ち上がり、口唇部が外反するものもある。口縁径は12～13 cm、底径は4～5 cm、器高は3 cm程である。口径に対する底径の割合が37～38 %、器高の割合が23～24 %、底径に対する器高の割合が61～64 %の数値を示す。

2類：口径・底径に比し器高が低く、1類同様偏平な器形をもつ。底部端から口縁部にかけて外傾気味に大きく開き立ち上がる。口縁径は10 cm、底径は5 cm、器高は2 cm程である。口径に対する底径の割合が47 %、器高の割合が19 %、底径に対する器高の割合が40 %の数値を示す。

3） 須恵器

器種には坏・高台付坏・壺がある。図示総数は10点である。

坏：図示資料は5点である。器形及び法量値から大きく3類に分けられる。切り離し技法は静止糸切り・回転ヘラ切り・回転糸切りの3種類が認められる。

1類：器高が低く、口径に対する底径の比率が大きいため偏平な器形をもつ。底部端から口縁部にかけて外傾し立ち上がる。体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリが施される。切り離し技法は静止糸切りである。他の類に較べて器厚がある。口縁径は14 cm、底径は9 cm、器高は4 cm程である。口径に対する底径の割合が60 %、器高の割合が27 %、底径に対する器高の割合が44 %の数値を示す。

2類：底部端から口縁部にかけて外傾し立ち上がる。1類に較べて器高があり口径に対する底径の比率がやや小さい器形をもつ。切り離し技法は回転ヘラ切りと回転糸切りの二種があり無調整である。口縁径は13 cm前後、底径は7 cm前後、器高は4 cm程である。口径に対する底径の割合が49 %、器高の割合が30～33 %、底径に対する器高の割合が61～68 %の数値を示す。

3類：底部端から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がり、口唇部でゆるく外反する。2・3類に較べ器高があり丸みをもつ器形である。切り離し技法は回転糸切りで無調整である。口縁径は13 cm前後、底径は6 cm前後、器高は5 cm程である。口径に対する底径の割合が43～48 %、器高の割合が34～35 %、底径に対する器高の割合が73～78 %の数値を示す。

高台付坏：図示資料は1点である。坏部は高台部上端から口縁部にかけてきつく外傾気味に立ち上がり、高台部は短く、ハの字状に開き断面三角形を呈する。付高台である。接合部にはかるいナデはみられるが無調整である。切り離し技法は回転ヘラ切りである。口縁径は11 cm、高台径は7 cm、器高は5 cm程である。

壺：図示資料は4点である。欠損資料で全容を知るものはない。大形と小形の2種がある。

1類：大形のものである。頸部から上部が欠損しているが、長頸の壺と考えられる。短くハの字状で断面三角形を呈する高台が付く。付高台である。体部は丸みをもちながら立ち上がっている。器面調整は外面で体部下部のみに回転ヘラケズリが施されるものと手持ちヘラケズリの後回転ヘラケズリのものがある。内面は体部下部にナデ調整がみられるがロクロ調整のみが主である。高台径は11 cm、高台高は1 cm程である。

2類：小形のものである。口縁部から頸部付近のものと体部下部から底部の破片資料である。両者とも丸みをもつ器形で、前者は頸部からくの字状に口縁部が立ち上がり口唇部は丸くおさまる。口縁径は6 cm程である。後者は底部端から内弯気味に立ち上がるもので、底部に回転糸切りの切り離し痕跡が認められる。器面調整は両者ともロクロ調整のみである。

4） 陶器

緑釉陶器：底部から高台部の破片資料である。器種は皿と考えられる。高台はハの字状に開き端部は丸くおさまっている。高さは8 mm程で径は約8 cmを計る。付高台と考えられる。胎土は緻密でやや軟質である。色調は暗い黄褐色である。内外面すべてにうす緑色の釉がみられる。

中世陶器：6溝で1点出土している。体部の小破片資料である。内外面ともナデ調整がみられる。外面の色調は暗赤褐色を呈し、内面には自然釉がみられる。

5） 瓦

平瓦：破片資料である。粘土板巻き作りである。凸面には縄叩きがみられ、ナデ調整により多くは擦り消されている。側端部に面取りがみられる。凹面には目の細かい布目痕がみられ、模骨痕と考えられる縦位方向の凹凸が認められる。側端部には浅い面取りがみられる。断面には粘土板の合わせ目がみられる。瓦質は緻密で硬く厚さは最大2.9 cm程である。

6） 土製品

板状土製品：厚さ5 mm程の粘土板を丸め重ね合わせて板状のものにしている。両端が欠損

しており形状は不明であるが、長さ 11 cm 以上・幅 9 cm・厚さ 3 cm 程あり、直方体を呈していたと考えられる。ナデ及び指のオサエで成形されている。

土錘：長さ 3.5 cm・径 1 cm 程で 2 mm 程の孔が貫通している。成形は指のオサエで断面がややつぶれた四角形を呈している。土師質である。

7） 石製品

砥石：短冊型と分銅型の二種がある。両者とも上部が欠損しているが、短冊型は 5 cm 角程で分銅型は最大 6×10 cm 程の面をもつ。残存面すべてが砥面となり擦痕および細かい溝がみとめられる。材質は凝灰岩である。

凹石：長軸 12.3 cm・短軸 10.4 cm・最大厚 4.8 cm 程で倒卵形を呈する。両面中央部に 2×2 cm 程の不整形な凹面が穿たれている。磨面などは認められない。材質は安山岩である。

8） 金属製品

鉸具：鉄製のもので縦 4.2 cm・横 4.9 cm のやや横長の長方形を呈する。枠中央部に横に T 字形の刺金が収まる。銹化のため左側が面となっているが本来は中抜きとなっていたと考えられる。断面は径 4 mm 程の正方形を呈する。鍛造品と考えられる。

鉄斧：現存長 8.8 cm・幅 3.2 cm を計る。刃先から柄の差し込み部へむかい厚さを増し、長軸の断面は逆三角形を呈する。刃部付近は偏平な板状となっているが、差し込み部付近は厚さ 2 mm 程の鉄板を四角形に折り曲げ袋状としている。鍛造品である。

釘：銹化が著しいが、端部が折り曲げられ断面が四角形を呈しており、釘と考えた。先端部が欠損するが残存長は 11.8 cm を計る。断面径は 4〜6 mm である。鍛造品である。

2．出土遺物の組み合わせと年代について

上記において出土遺物の特徴を述べ分類まで行ったが、多くのものは住居跡及び土坑出土の遺物群で、出土状況から強い同時性を考え得るものも数多く含まれている。ここでは当該遺構の土器類に着目し、組み合わせ及び年代についてみてみたい。遺構出土の土器類には土師器・赤焼土器・須恵器の三種類があるが、土師器の製作にロクロ不使用と使用の二者があり、土師器を主体としてみると大きく二群に分けられる。ここでは便宜的に前者を A 群土器、後者を B 群土器とする。

A 群土器は 1 住居・18 住居・20 住居出土の土器群で構成される。器種には土師器坏・高坏・甕・鉢、須恵器坏・高台付坏・壺がある。主体となる土師器は器形的特徴から東北地方における土師器編年の「国分寺下層式」に位置づけられ、当群は国分寺下層式期の範疇に属すると考えられる。当該期の各遺構の土器構成は下記の通りである。資料はカマド・周溝を主とする。

1住居：土師器（坏A4b類－1点・A2類－1点、甕A1類－1点、鉢A2類－1点）
土師器（坏A4a類－2点・坏A4b類－1点、甕A1類－1点・A2類－2点）〈堆積土〉
須恵器（坏1類－1点、高台付坏－1点、壺2類－1点）〈堆積土〉
18住居：土師器（坏A1類－1点、甕A1類－2点、鉢A3類－1点）
20住居：土師器（坏A1類－2点・A3類－1点、甕A1類－2点）

以上が3軒の住居跡の土器類構成であるが、1住居の出土遺物はA群・B群土器が混在しているが、周溝・カマド・ピットから出土する土器類（A群土器）と明らかに相違がみられる土器群（B群土器）を堆積土の遺物群として区別している。また、20住居は18住居と重複関係にあり20住居が時間的に後のものであることが確認されている。

A群土器の坏類に着目し各住居をみると、1住居と18・20住居の二つのグループに分けることが可能である。

1住居：坏A4類・坏A2類で構成される。甕A1・A2類、鉢A2類、須恵器坏1類、高台付坏、壺2類が伴う。
〈坏A4類は口径が15～16cmの中形品、底部は丸底風の平底で内弯気味に立ち上がる(a)、口唇部が外反(b)するものがあり、調整は外面がヘラミガキ・ヘラケズリで内面はヘラミガキ・黒色処理を施す。坏A2類は口縁部破片資料、内弯気味に立ち上がる、調整は外面がヘラミガキ？、内面はヘラミガキ・黒色処理を施す〉

18住居
20住居：坏A1類・A3類で構成される。高坏、甕A1類、鉢A3類が伴う。
〈坏A1類は口径が9～12cmの小形品、底部は丸底で外傾気味に立ち上がる、口縁部と体部の境が屈曲、調整は外面がヨコナデ・ヘラケズリ・ナデで内面はヘラミガキ・黒色処理を施す。坏A3類は底部が偏平な丸底、境にかるい段、調整は外面がヘラミガキ・ヘラケズリで内面はヘラミガキ・黒色処理を施す〉

1住居では周溝を埋め戻し、西側への住居拡張が認められ、二時期（a・b）の生活面が確認されている。周溝・北側カマド（煙道）・ピットから出土した土器類が(b)期に属し、堆積土中のA群土器が(a)期に属するものと判断した。坏A2類が(b)期に含まれるが、坏4b類が両期にみられ、改築の点も考慮に入れると、a・b期には大きな時間的差は存在しないものと考えられた。

当住居出土土器の特徴（坏A4類を主体とする）をもつ類似資料として、名取市清水遺跡第Ⅶ群土器（第58号住居跡出土土器）がある。土師器（坏9点・甕2点）、須恵器（坏2点）が出土資料として掲載されている。坏類は二類に分けられ、さらに大きさで細分されている。坏第1類としたものは当遺跡分類での坏A4a類に類似し、特に坏第1類のbはほぼ特徴を同じくしている。坏第2類は口縁部の調整にヨコナデとヘラミガキの違いはあるが、口縁部が外反する点など坏A4b類の特徴をもつ。甕は当1住居の資料が破片資料で全容が不明であるが、口縁部

と体部の境に段・稜など顕著なものもみられず、体部はナデ・ケズリで成形され、ほぼ同形のものと考えられる。尚、当住居では須恵器の高台付坏と坏が出土しているが、高台付坏は切り離しが回転ヘラ切りのもので、坏は静止糸切りで手持ちヘラケズリが周縁に施される。坏は器形・技法面からみて色麻町日の出山窯跡出土坏に類似している。

清水遺跡の報文では他の国分寺下層式の土器群との比較から、段・沈線をもたない平底の坏で構成される第Ⅶ群土器を当式の中でも後出のものとし、終末の段階に位置するものとしている。当1住居出土土器は上述の様に清水遺跡第Ⅶ群土器とほぼ同様な土器群構成をもつが、破片資料ではあるが沈線をもつ坏が1点含まれており、やや前出するものと考えられる。時期は須恵器坏の問題は残るが、大きく8世紀後半頃としておきたい。

18・20住居では出土遺物自体の数が少なく比較検討に難があるが坏A1類を主体とし類似資料をみると、仙台市郡山遺跡第43次調査SD35溝跡出土土器が上げられる。土師器(坏21点・椀2点・高坏1点・甕3点)、須恵器（坏2点・甕1点）が資料として掲載されている。坏類は口縁部と体部の境に段を有する中形のものが大半を占め、坏A1類に類似するものは1点である。坏A3類は底部破片資料で比較が難しいが、底部偏平の坏が5点程みられる。高坏は坏部欠損品であるが、脚部に長方形の透かしをもち、脚裾端部がやや上方におれまくる特徴をもち、ほぼ同形のものである。甕類は体部が球形で頚部に弱い段をもち甕A1類とは特徴を異にしている。甕A1類は最大値が口縁部にありゆるく外反し、段などもみられず、砲弾形を呈する。器形的には後出的要素をもつものと判断される。報文では土師器坏・須恵器坏の検討から国分寺下層式の中でも初期段階のものとしている。これらから判断して当住居出土土器は8世紀前半頃の年代を想定することが可能かと考えられる。

B群土器は2住居・19住居・21住居・22竪穴・4土坑・5土坑出土の土器群で構成される。器種には土師器坏・高台付坏・甕・鉢・赤焼土器坏・高台付坏・須恵器坏・高台付坏・壺がある。製作に際しロクロ技法を使用する土師器は東北地方における土師器編年の「表杉ノ入式」に位置づけられ、当群は表杉ノ入式期の範疇に属すると考えられる。A群土器と同様に位置づけを考えてみたい。資料は床面・カマド・ピット（貯蔵穴状ピット）・一括品を主とする。

2住居：土 師 器（坏B2a類－1点・B3a類－2点、高台付坏－1点、甕B1類－1点）
　　赤焼土器（坏1類－3点）
　　須 恵 器（坏3類－1点、壺1類－2点）

19住居：土 師 器（甕B1類－1点、赤焼土器坏1類－1点）
　　土 師 器（坏B3a類－2点・B3b類－1点・B4a類－2点・B4b類－2点、
　　甕B1類－1点・B2類－3点）〈堆積土・一括〉
　　赤焼土器（坏1類－2点・2類－3点、高台付坏－1点）〈堆積土・一括〉

21住居：土 師 器（坏 B3a 類－１点）

４土坑：土 師 器（坏 B2b 類－１点・B3b 類－１点・B4b 類－３点・B4c 類－４点、
高台付坏－２点、甕 B1 類－１点・B2 類－３点）〈一括〉

須 恵 器（坏２類－１点）

５土坑：土 師 器（坏 B2a 類－１点・B2c 類－１点・B3c 類－１点、甕 B1 類－１点）〈一括〉

22竪穴：土 師 器（坏 B1 類－１点・B3b 類－１点）〈堆積土〉

須 恵 器（坏２類－１点）〈堆積土〉

以上が各遺構出土の土器類構成であるが、19 住居では床面・貯蔵穴状ピット資料の他に灰白色火山灰に覆われた埋土資料を住居廃絶後の一括としている。また、22 竪穴ではすべてが埋土出土であるが土師器坏 B 類に他と相違がみられ、堆積土資料として掲載した。

土器類は上記の様に多種にわたるものが出土しているが、ここでは最も出土量の多い土師器坏を中心にして考えてみたい。坏類は器形・法量値から１～４類まで分け、調整の有無等から a～c に細分している。１～４類、特に２～４類の坏はほぼ同形とみることも可能であるが、細かくみると底径が１類から４類にかけて小さくなる傾向が看取される。更に各類は各遺構毎におおまかなまとまりがみられ、このことは小幅ではあるが各類が時間的推移の中で判断されるものと考えられる。

	土師器													赤焼土器					須恵器				
	坏										高台付坏	甕		坏		皿		高台付坏	坏			壺	
	B1	B2a	B2b	B2c	B3a	B3b	B3c	B4a	B4b	B4c		B1	B2	1	2	1	2		1	2	3	1	2
ＳＩ２		1			2						1	1		3							1	2	
ＳＩ19					1			2	2			2	3	3	3			1					
ＳＩ21					1																		
ＳＫ４			1			1			3	4	2	1	3							1			
ＳＫ５		1		1			1					1											
ＳＩ22	1					1														1			

表１　遺構出土土器分類

土師器坏類に着目し、各遺構の土器類をみると、下記のグループに分けることが可能である。

１グループ：坏 B2 類・B3 類で構成され、赤焼土器坏が伴うもの(A)、伴わないもの(B)
（２住居・５土坑）

２グループ：坏 B4 類が主体となり、赤焼土器坏が伴うもの(A)、伴わないもの(B)
（19 住居・４土坑）

３グループ：その他の遺構で、出土量が少なく、比較検討の不可能なもの
（21 住居・22 竪穴）

ここでは２グループの出土遺物に着目し、他の遺構の遺物との比較を試みたい。２グループ

とした19住居・4土坑は共に土器類等の廃棄場としての性格をもつもので、生活什器としての土器組成としては偏りが否めないが、強い共伴関係をもつものである。

2グループの土器群と類似するものとして、仙台市中田畑中遺跡・同市安久東遺跡出土の遺物群がある。

中田畑中遺跡では2軒（1号・2号）の住居跡が調査されている。遺物として土師器（坏32点・甕19点・鉢1点）、赤焼土器（坏5点）、須恵器（坏2点・甕2点・壺1点）が出土資料として掲載されている。土師器坏は大型で椀と呼称しえるものも含まれるが、元袋Ⅲ遺跡での坏BⅢ類に相当するもので、切り離し技法は確認されるものすべて回転糸切りで、無調整のものが主体を占める。赤焼土器坏が両住居跡で共伴し、1・2類に相当する。2号住居跡ではロクロ不使用の甕が共伴関係にあるが、地域的な面からの把握が必要かと考えられるが、当式期の中ではよくみられる事象である。報文では、詳細は省略するが、他の遺跡との比較検討から2号住居跡出土土器の年代を9世紀中葉以降から10世紀前半以前の年代を与えている。

安久東遺跡では3軒（1～3号）の住居跡が調査され、出土遺物として土師器（坏35点・甕11点）、赤焼土器（坏27点・高台付坏2点）、須恵器（坏5点）、灰釉陶器（坏1点・瓶1点）が資料として掲載されている。土師器坏は口径の法量値が中田畑中・元袋Ⅲ遺跡のものに比べ若干小さい。口径に対する底径の比率も小さい傾向がみられ、坏BⅢ類の範囲に大きく含まれるものと判断されるが、別類を想定しうる、口径値に対しさらに底径値が小さくなる、法量比率をもつ。切り離し技法はすべて回転糸切りで、無調整である。赤焼土器がすべての住居跡で共伴し、坏は1・2類及び皿の1類に相当するものと考えられる。年代は2号住居跡から出土している灰釉陶器の年代から想定し、さらに検討の結果、10世紀後半頃に比定されている。他の住居跡も同様な年代が与えられている。

以上の結果から2グループの年代を想定してみると、ほぼ中田畑中遺跡の住居跡出土土器群と同時期頃で、安久東遺跡住居跡出土土器群よりは前出する年代が考えられる。尚、19住居出土遺物群は10世紀前半以前の降下年代が考えられている灰白色火山灰に覆われており、これらのことを加味すると、おおまかに10世紀前後の年代が想定される。他のグループもおおきくこの時期頃と考えられるが、器形等からみてやや前出するものかと考えられる。尚、土師器坏の底部及び周辺の再調整の有無は、有→無への時間的推移は傾向としては理解されるが、すべてを対象とはしえないが、前後関係を示し得るものではなくフォームとしての技術的問題等の中で理解すべきものと考えられる。

Ⅴ．発見遺構について

1．住居跡について

6軒確認している。すべて竪穴式住居跡である。出土遺物の特徴から二時期に分けられ、A群土器グループの1・18・20住居の3軒が国分寺下層式期に属し、1住居が8世紀後半頃に、18・20住居が8世期前半頃の年代が想定された。B群土器グループになる2・19・21住居の3軒が表杉ノ入式期に属し大きく10世紀前後頃の年代が考えられた。尚、住居跡から除外した22竪穴遺構は表杉ノ入式期のものと考えられた。住居間の変遷は（20住）→（18住）→（1住）→（2住→21住→19住）の順が推定される。

	平面形	規　模	面積	カマド	柱穴	方　向	備　考
SI1	隅丸方形 隅丸方形	a）6.8×6.4 b）6.4×6.4	35.3 32.5	東壁中央 北壁中央	5本 4本？	N－3°－E	部分的改築 壁柱穴
SI18	隅丸方形	4.8×4.6	21.6	北壁中央	4本	N－16°－E	カマド造り替え
SI20	隅丸方形	3.0×－	－	東壁中央	未確認	N－15°－E	SI18を切る
SI2	隅丸方形	4.5×4.0	16.3	東壁中央	未確認	N－9°－W	
SI19	隅丸方形	4.7×4.6	20.7	東壁中央	未確認	N－9°－E	灰白色火山灰
SI21	隅丸方形	3.1×3.2	9.0	東壁中央	未確認	N－4°－E	

（単位：m・m²）

表2　住居跡観察表

住居跡の構造・規模等は上表に記したが、すべて隅丸方形の形態をもち、1住居のみが一辺6mを超える大形のもので、一辺約5m弱の規模をもつ18住居とともに柱穴が確認されている。1a住居では5基の柱穴が検出されたが、1b住居でも同様となるかは判断し得なかったが確認数は少ないが壁柱穴が巡っている。住居跡の軸方向は様々ではあるが、各二時期の中ではまとまりが認められそうである。カマドはすべての住居に付設され、東壁及び北壁の中央に位置し、作り替えもみられる。平安期に属する2・19・21住居はすべて東壁にカマドを有しており、構築の差異か削平か判断が出来なかったが煙道部が確認されなかった。尚、これらのカマドの南脇には貯蔵穴状のピットがすべてにみられる。

2．掘立柱建物跡について

柱穴は数多く検出しているが建物跡と認定したものは3棟（10・23・24建物）のみにとどまる。調査区西側部に住居跡とともに集中して位置するが、重複関係や方向性もなく新旧等の関連については明らかでない。柱穴内よりロクロ使用の土師器片が出土しており、B群土器グループの遺構（2・19・21住居）と伴うものかとは考えられるが、位置関係等からみて組み合うものの推定は難しい。柱穴は円形を呈するものが主体を占め方形のものは数少ない。大きさは径40～60cm程であるが80cmを超えるものもある。柱痕跡はほぼ円形で10～20cmを計り、

柱筋もほぼ直線に通る。24建物は唯一総柱となるもので、他の建物に較べて全体的に柱穴掘り方・柱痕跡が大きい。倉庫等の性格をもつものと考えられる。位置的に2・21住居との組み合わせは考えられない。10建物は1×2間と他の建物に較べて規模の小さいものである。柱穴埋土よりロクロ使用の土師器が出土はしているが、古代に属するものか規模の面等からみて類例もなく断定ができない。

	地区	桁行×梁行	棟方向	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	面積
SB10	F－4	1×2間 南北棟	N－28°－E	東列　1.28＋1.20 西列　1.29＋1.06	北妻　2.37 南妻　2.10	5.4
SB23	F－7	2×3間？ 南北棟	N－28°－E	東列　4.17＋1.75 (二間分)	南妻　2.25＋	－
SB24	D－11	2×3間 南北棟	N－16°－E	東列　1.26＋1.48＋1.73 中列　1.55＋0.96＋1.91 西列　1.43＋1.13＋1.79	北妻　1.74＋1.90 南妻　1.76＋1.98	16.3

(単位：m・m²)

表3　建物跡観察表

3．土坑について

15基確認している。平面の形態から円形と方形の2種に分類が可能で、更に細かく分けられる。全体として出土遺物も少なく、時期及び性格を特定できるものは少ない。これら土坑のなかでも検出及び遺物出土の状況において特徴をもつものもある。4土坑及び5土坑では埋土中位の層上面でロクロ使用の土師器を主とする一括遺物が検出されている。検出状況から廃棄されたものと判断され、「ゴミ捨て場」としての使用が考えられた。尚、4土坑の底面は方形を呈すほぼ平坦面で単なるゴミ捨て穴とは考えにくく再利用が想定される。両土坑とも他の遺構と

	地区	平面形	規模	備考
SK4	H-6	円形（不整形）	190×150×40	一括土器・墨書土器「太」
SK5	H-6	円形（不整形）	100×90×25	一括土器
SK8	K-12	円形（不整形）	210×140×70	
SK9	M-12	円形（長円形）	220×120×30	
SK12	I-13	円形（不整形）	150×(90)×55	土師器片
SK13	F-15	円形（長円形）	110×65×16	炭化物・焼土・土師器片
SK14	E-12	円形（円　形）	70以上×12	
SK15	E-12	円形（円形？）	60以上×12	
SK16	D-8	方形（方　形）	150×145×5	
SK17	F-7	円形（長円形）	120×75×15	炭化物・焼土・土師器片
SK28	F-12	方形（方　形）	190×(95)×7	炭化物・焼土
SK29	E-11	方形（長方形）	100×55×10	炭化物・焼土・土師器片
SK31	E-7	円形（円　形）	68×40	
SK32	E-7	円形（長円形）	88×36×28	
SK36	F-9	円形（不整形）	82×72×20	炭化物・焼土・土師器片

(単位：cm)

表4　土坑観察表

の関連はみいだせなかったが、出土遺物の検討から時期としては住居跡群と同じ10世紀前後頃の年代が考えられる。13・17・28・29・36土坑の埋土より焼土及び炭化物が検出されている。なかでも29土坑は底面に炭化物が面的に広がる状況が確認され、36土坑では多量の炭化物・焼土がみられた。壁面が焼けている状況もなく、性格は不明である。28土坑を除く土坑からはロクロ使用の土師器が出土しており、時期は大きく平安時代と考えておきたい。

4．溝跡について

計8条検出している。調査区内を縦走し外側へ延びるものがほとんどで全体を把握できるものはない。溝方向は11溝を除きほぼ同方向と平行関係がみられるが、これは地形的制約からくるものかと考えられる。6溝は南辺と東辺が確認され、E-7区で北側に強く屈曲し東辺がゆるく弧を描きながら北側へ延びている。形状から区画としての性格をもつものと考えられた。G-12区付近で北と南の溝幅に違いがみられるが断面観察から部分的拡張と判断された。埋土から多くの土師器片や鉸具が出土しているが中世陶器が1点含まれており時期は中世頃と考えられる。11溝は1住の南西側に位置する二股となる溝である。東側の溝は柱穴に切られるが方向的に1住の南東隅に延び、底面が南側に傾斜していることもあり、断定は出来ないが1住に伴う施設とも考えられる。25・26・27溝は互いに近接し方向的にもほぼ同一であり、一つのグループとしてとらえた。溝の真心間は北側で25・26溝が96 cm、26・27溝が135 cmを計る。検出本数が3本と少なく全容を把握できないが、畑跡と考えられている「溝状遺構」に属するものではと考えられる。埋土から土師器の小破片が出土しており、時期は積極的な確証はないが平安期頃と判断したい。34溝は南側が削平され形状も不安定な溝である。方向は他の溝とほぼ同じであるが、性格・時期は不明である。35溝は19住を切るかたちとなっているが、接点部の形状に不明な点がのこっている。埋土から土師器片は出土しているが、34溝同様に性格・時期は不明である。

	断面形	上端幅	深さ	確認長	備　　考
SD6	逆台形	90～270	30～55	55.0(m)	E-7区で屈曲・北側部幅広
SD7	皿形	30～40	6～12	44.0	G－12区で二股
SD11	皿形	26・14～16	5～9	2.2	南側で二股・SI1と関連？
SD25	コの字形	40	11～16	4.4	
SD26	皿形	24～32	2～4	2.9	
SD27	皿形	26～36	2～3	5.6	
SD34	コの字形	60～90	10～18	3.6	
SD35	コの字形	36～54	4～15	8.8	

(単位：cm)

表5　溝跡観察表

5．その他

他の遺構としては、33河川跡と柱穴群がある。

河川跡は対岸が確認されず幅30 m以上となる規模の大きいものである。確認面において8・9・12土坑、7溝、ピットが検出されている。すべて掘り上げておらず、埋土上部より土師器や須恵器等が出土しており時期は古代以前にとどまる。尚、住居跡等の遺構群が河川跡より西側に集中しているが、これは河川の存在からくる制約が起因と考えられる。当河川跡は古い時期の笊川と考えられる。

柱穴群は調査区西側中央部を中心として数多く確認されている。掘立柱建物跡は二辺の柱列が確認されたものに限定したため柱列にとどまる柱穴群が多い。その中で1住西辺部を切る二基の柱穴は西側が調査区外となるが規模等から建物跡とも考え得るものである。柱穴掘り方は一辺80 cm程の方形を呈し、柱痕跡は径20 cm程である。柱列の方向は真北ラインに対し東へ約12度偏している。その他の柱穴群は積極的な確証（建物跡及び塀）をもち得ず不定となっている。

Ⅵ．墨書土器と文字について

今回の調査で墨書をもつ土器を計6点確認している。すべてロクロ使用の土師器の坏で、体部外面に正位体で「太」と書かれている。出土遺構は4土坑で他の土器類と共に一括の状態で検出されている。出土状況から判断して廃棄物と考えられ、4土坑は「ゴミ捨て場」の性格をもつ。土器の所属時期は10世紀前後頃である。

墨書文字が同一筆跡であるかは検証し得なかったが、筆の入り方や文字の大きさには違いが認められる。欠損部や摩滅があるが全体としては流麗な筆のはこびである。

近年来、各遺跡で土器類に墨書された資料（文字類）の増加がみられるが、今回の資料の様に一文字で表されているものは現時点において意味付（地名・人名）等不明と言わざるおえない状況である。尚、「太」と墨書された資料として仙台市南小泉遺跡第3次調査第28号土壙出土土師器坏（ロクロ使用）に「仲・寿？」と判読されるものと伴に5点出土している。

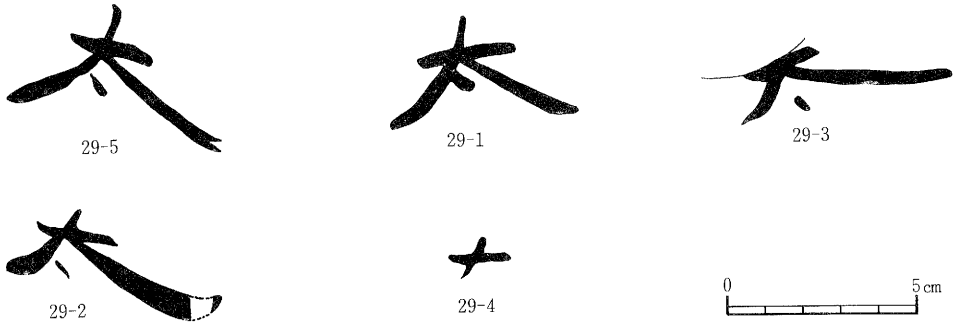


図34　墨書文字

Ⅶ. まとめ

今回の発掘調査地点は名取川の支流となる笊川が形成した東西に馬背状に延びる標高10 m前後の自然堤防上に位置する。

検出遺構として住居跡6軒、竪穴遺構1基、掘立柱建物跡3棟、土坑15基、溝跡8条、河川跡1条、柱穴及びピット多数があり、遺物として縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦、石製品、金属製品が出土している。

検出された各遺構は河川跡の西側に集中している。これは河川跡の制約からくるものと判断され、元袋Ⅲ遺跡の東端部に位置するものと考えられた。西側一帯に各時期の集落が展開されているものと推定される。

検出遺構・出土遺物からみて大きく下記の三時期に分けることが可能である。

1期：(国分寺下層式期)住居跡のみの確認で他の遺構との関連は不明である。出土遺物からさらに2期（8世紀前半頃と8世紀後半頃）に細分される。鈹具や平瓦が出土し、当地点付近で古瓦が採集された報告もあり、土器類の特徴など当遺跡東方1 kmに位置する郡山遺跡との関係が窺われる。

2期：(表杉ノ入式期）住居跡・土坑・掘立柱建物跡等、多くの遺構がこの時期に含まれる。部分的な確認ではあるが畑跡と考えられる溝跡群などもみられ、有機的な遺構の組み合わせが想定されたが、土坑などを含め関係は不定である。各遺構間には若干の時期差が認められるが、大きく10世紀前後頃のものと考えられた。

3期：(中世）溝跡のみの確認である。調査区西側へ展開する溝跡（堀跡）である。平面形態は方形を基調とするものと判断されるが、やや不整形である。北側部が幅広となるが作り替えも認められず、北側に位置する河川跡との関係が考えられた。

参考文献

仙台市教育委員会（1983．３）：『仙台市文化財分布地図』

氏家和典（1957．３）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典（1967．９）：「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

阿部義平（1968．10）：「東国の土師器と須恵器」『帝塚山考古』NO.1

桑原滋郎（1969．12）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯　東北史学会

丹羽・小野寺・阿部（1981．３）「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第77集

岡田・工藤・桑原他（1970．３）：「日の出山窯跡群」『宮城県文化財調査報告書』第22集

木村・金森他（1985．３）：「郡山遺跡Ⅴ」『仙台市文化財調査報告書』第74集

佐藤甲二（1985．３）：「中田畑中遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第78集

土岐山武（1980．９）：「安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集

佐々木和博（1984．３）：「鹿島遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第101集

白鳥良一（1980．３）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』多賀城跡調査研究所

結城・佐藤（1984．３）：「南小泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第68集

加藤・伊藤（1955．３）：「宮城県登米郡新田村字対馬竪穴住居址群」『登米郡新田村史』

小井川・高橋（1977．12）：「宮城県対馬遺跡出土の遺跡」『宮城史学』第5号

小井川・手塚（1978．３）：「糠塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第53集

加藤・阿部（1980．９）：「観音沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集

小井川・小川（1982．３）：「御駒堂遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第83集

森貢喜(1983．３)：「佐内屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第93集

原田良雄編（1974．２）：『東北古瓦図録』雄山閣

写　真　図　版

写真１　遺跡航空写真（昭和36年）

写真２
調査前状況
（北側から）

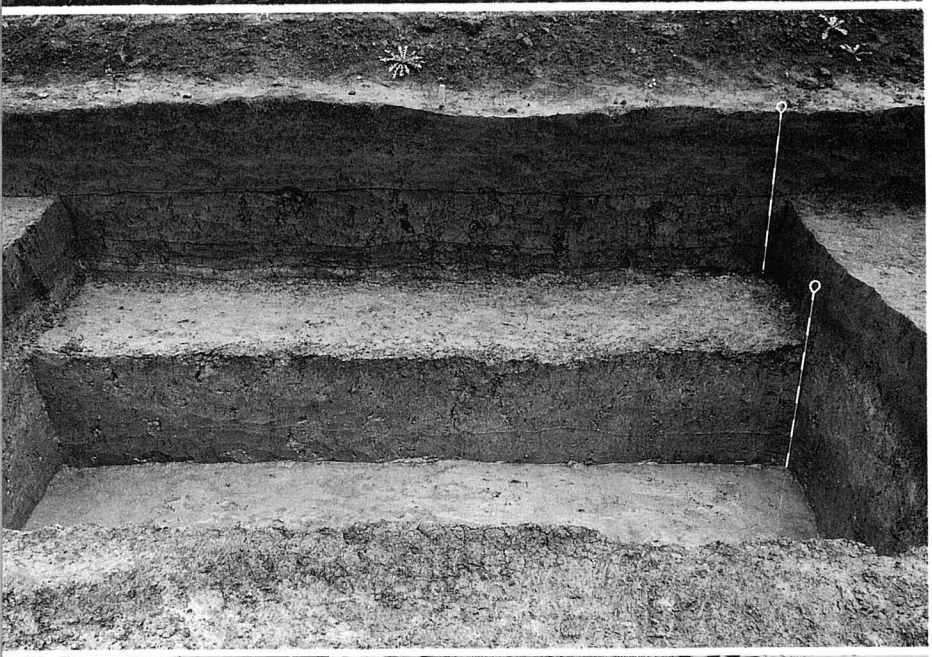


写真３
深掘り断面
（Ｆ―13・14区）

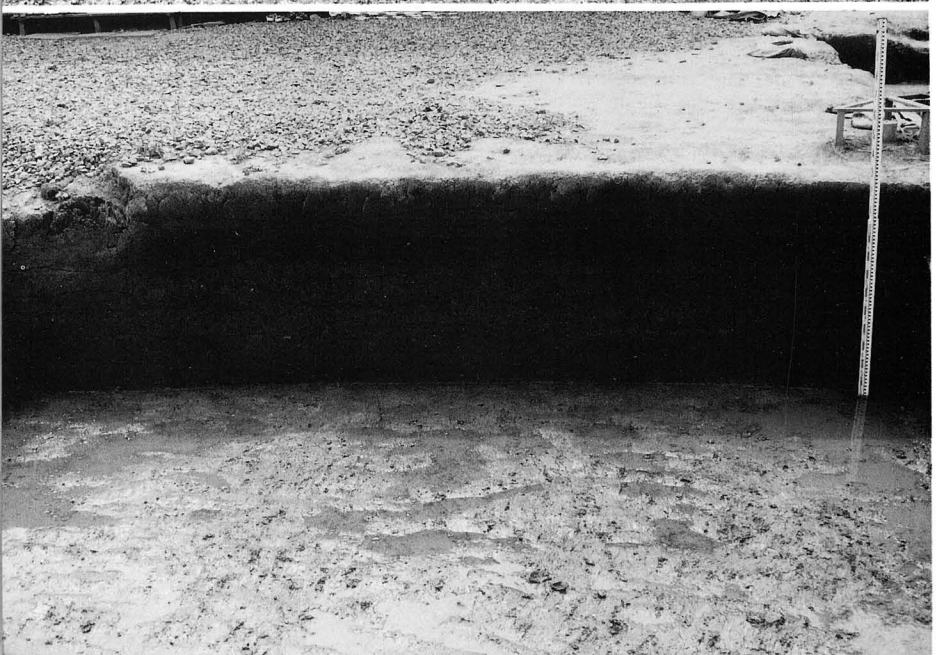


写真４
深掘り断面
（Ｆ―５・６区）

写真５
住居跡群全景

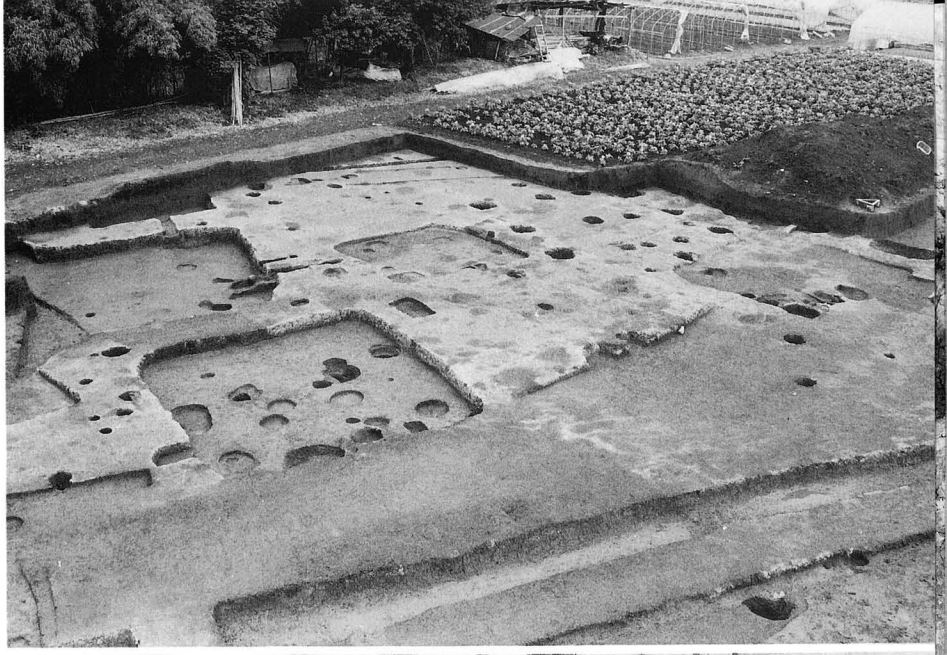


写真６
ＳＩ１住居跡全景

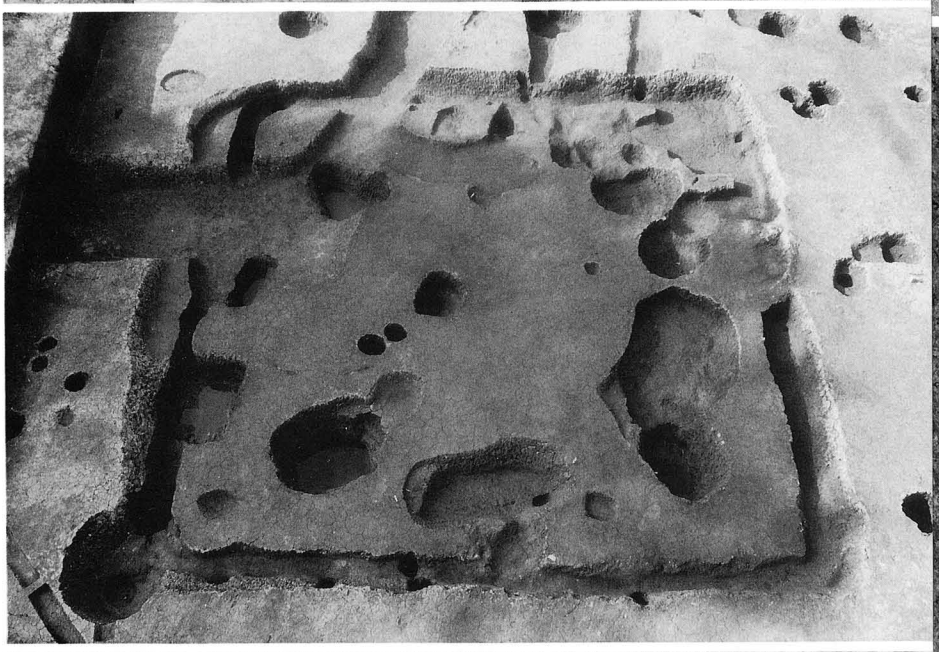


写真７
ＳＩ１住居跡
ピット７断面

写真８
ＳＩ１住居跡ピット15
土器出土状況

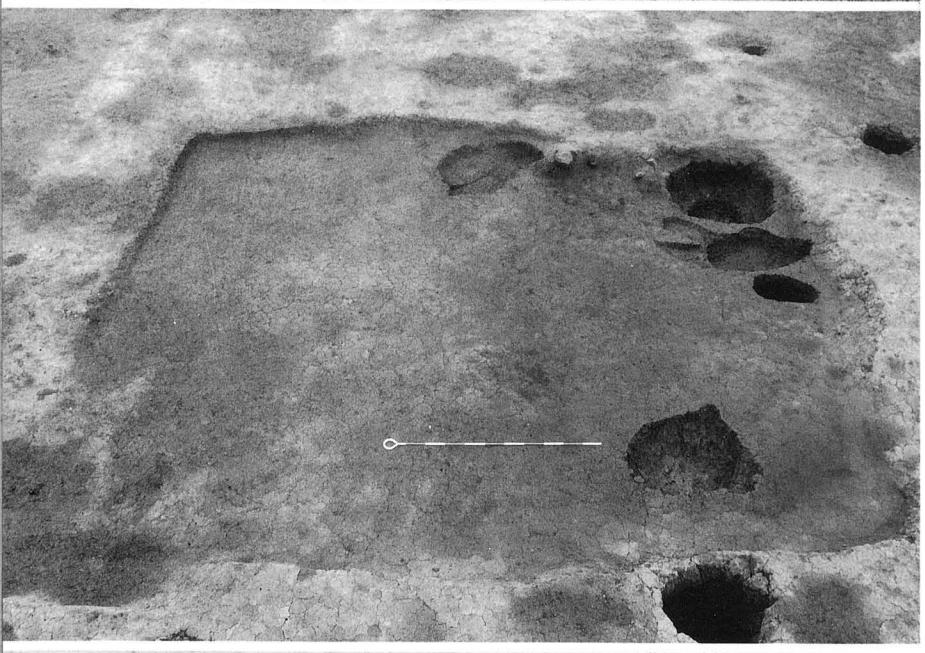


写真９
ＳＩ２住居跡全景

写真10
ＳＩ２住居跡カマド
周辺土器出土状況

写真11
ＳＩ２住居跡
ピット２断面

写真12
ＳＩ２住居跡
ピット２
土器出土状況

写真13
ＳＩ18住居跡全景

写真14
ＳＩ18住居跡
カマド状況

写真15
ＳＩ18住居跡カマド
周辺土器出土状況

写真16
ＳＩ18住居跡ピット５
土器出土状況

写真17
ＳＩ19住居跡
全景

写真18
ＳＩ19住居跡
カマド全景

写真19
ＳＩ19住居跡
ピット１断面

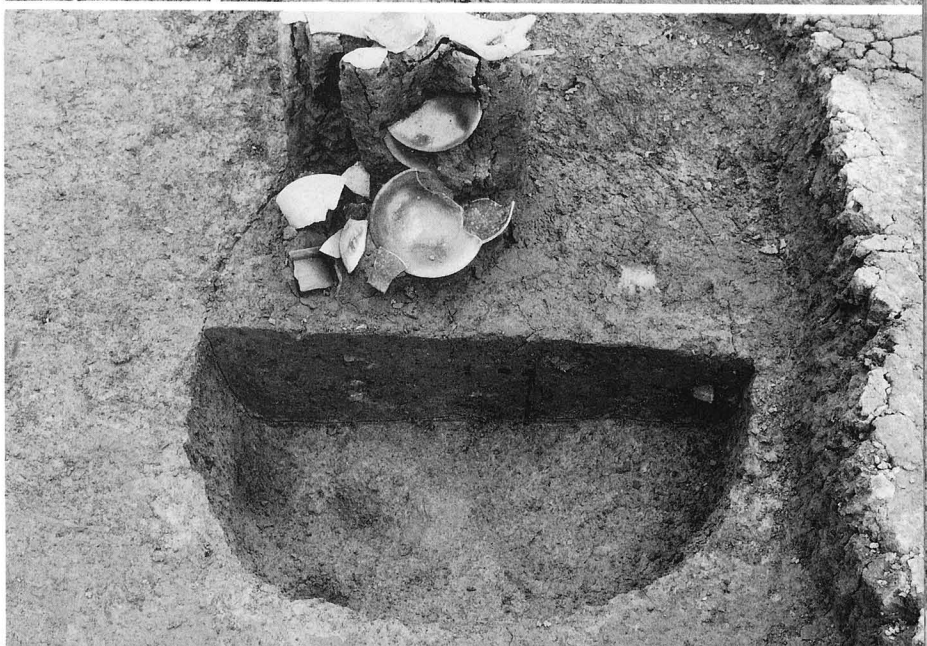


写真20
ＳＩ20住居跡
全景

写真21
ＳＩ20住居跡
カマド全景

写真22
ＳＩ21住居跡
全景

写真23
ＳＢ10建物跡
全景

写真24
ＳＢ24建物跡
全景

写真25
ＳＫ４土坑
全景

写真26
ＳＫ４土坑
遺物出土状況

写真27
ＳＫ５土坑全景

写真28
ＳＫ５土坑
遺物出土状況

写真29
ＳＤ６溝跡断面
（Ｅ－７区）

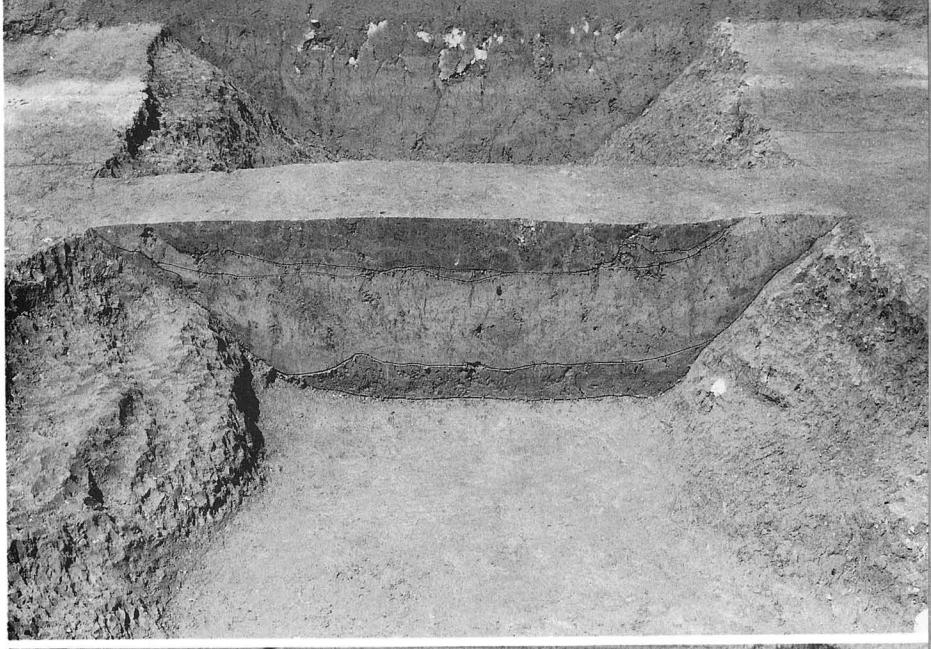
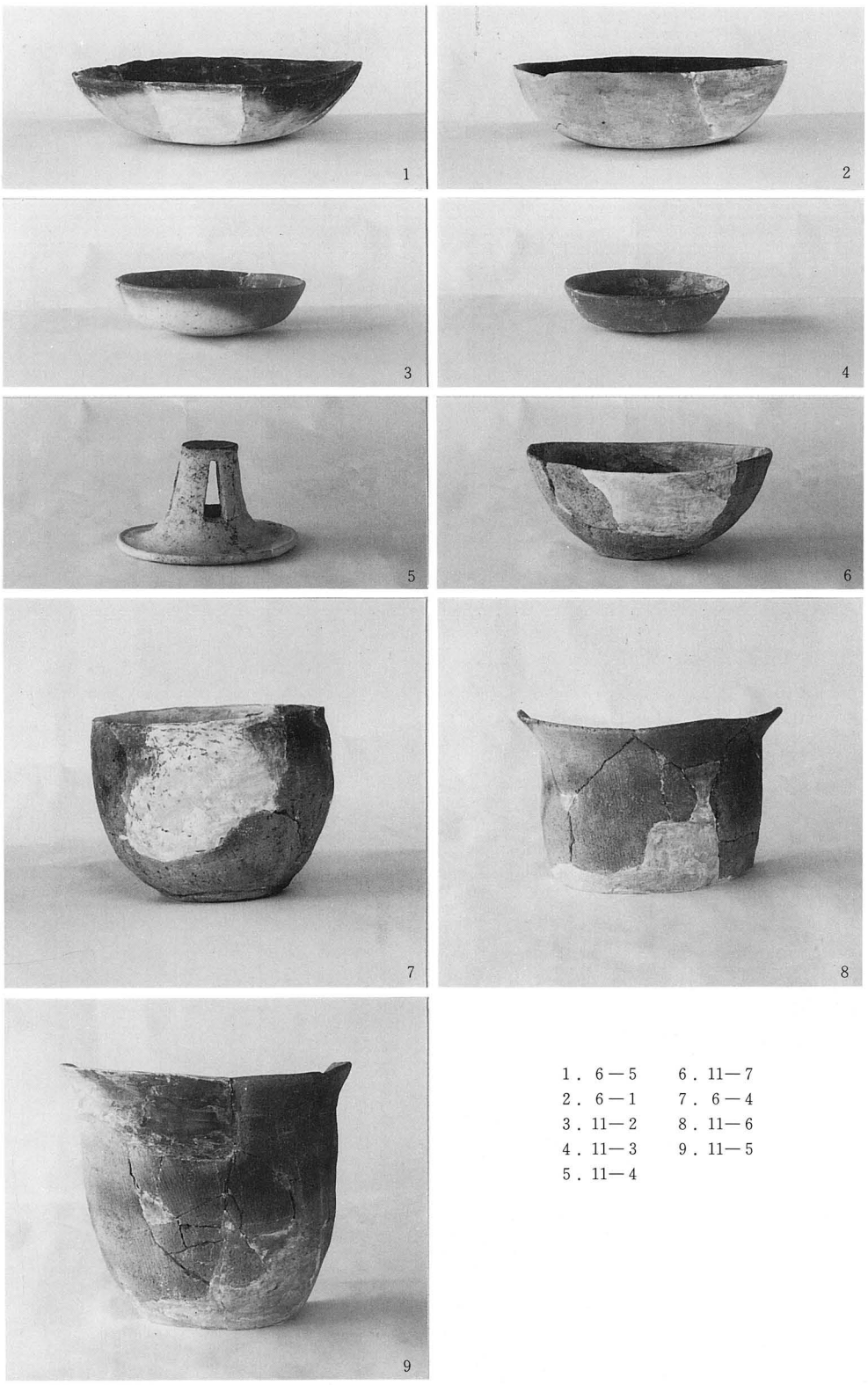


写真30
ＳＤ６溝跡
北側部全景

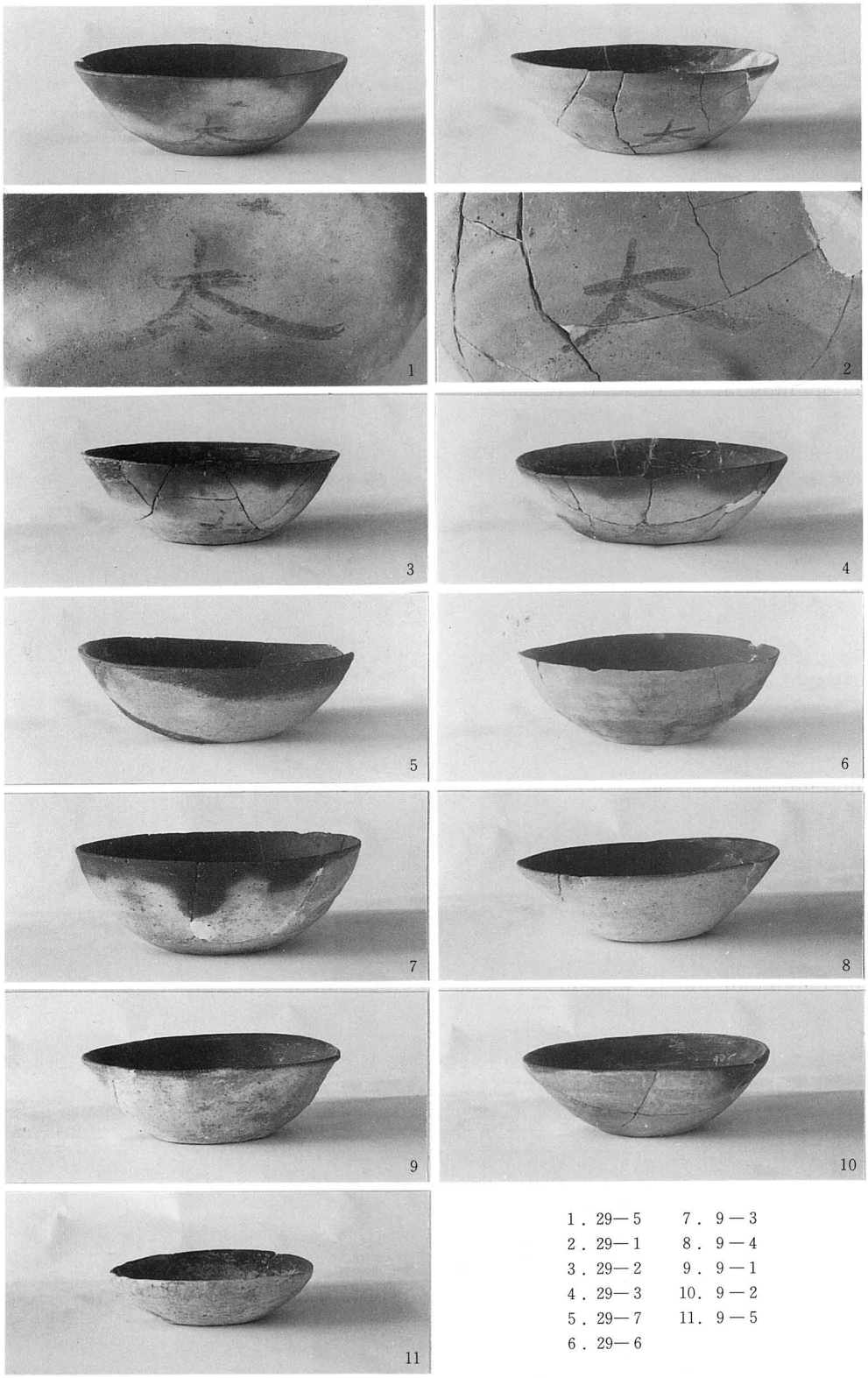
写真31
ＳＲ33河川跡断面

写真32
ＳＲ33河川跡状況



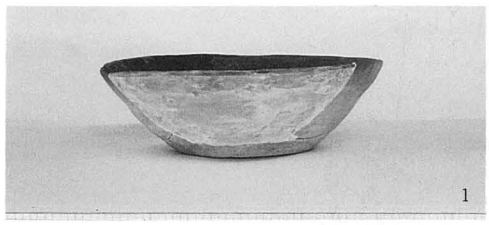
1．6－5　　6．11－7
2．6－1　　7．6－4
3．11－2　　8．11－6
4．11－3　　9．11－5
5．11－4

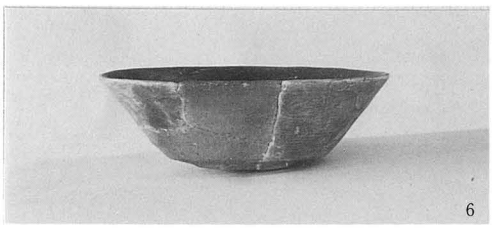
写真33　出土遺物１（土師器）

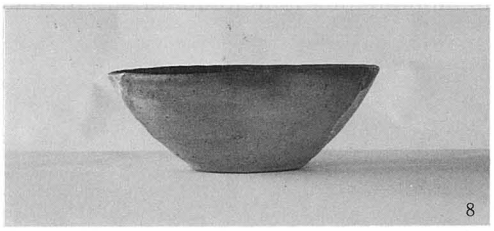


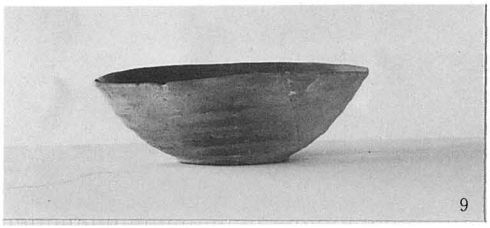
1．29—5　　7．9—3
2．29—1　　8．9—4
3．29—2　　9．9—1
4．29—3　　10．9—2
5．29—7　　11．9—5
6．29—6

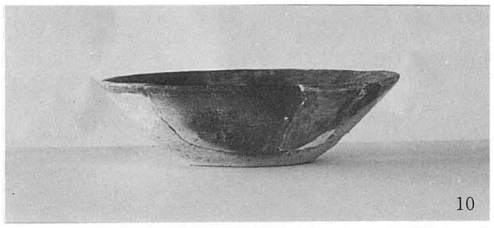
写真34　出土遺物２（土師器）

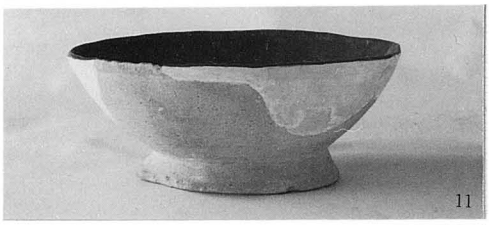






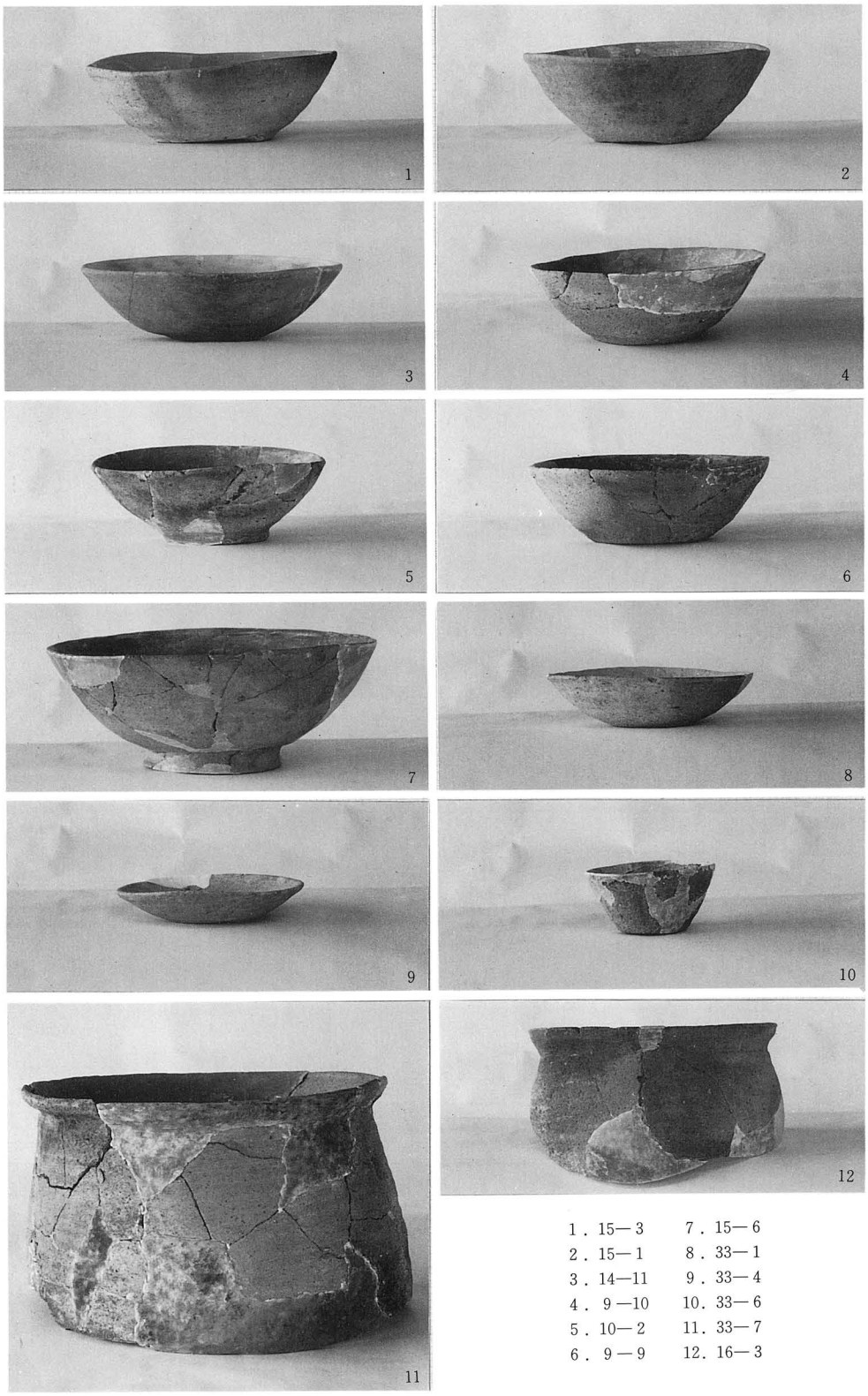






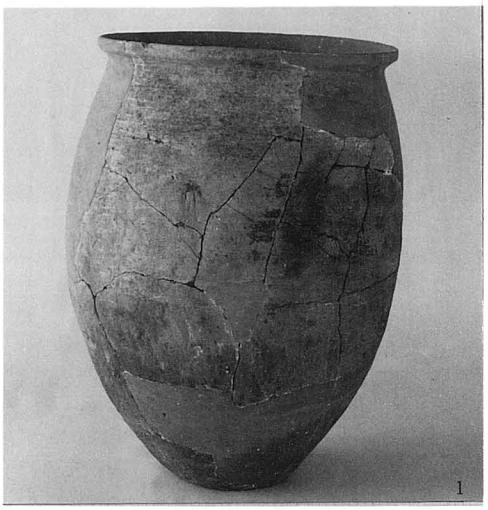
1．14—3　　8．14—6
2．31—1　　9．14—10
3．23—2　　10．14—5
4．14—2　　11．30—1
5．14—4　　12．14—9
6．14—7　　13．15—4
7．14—1

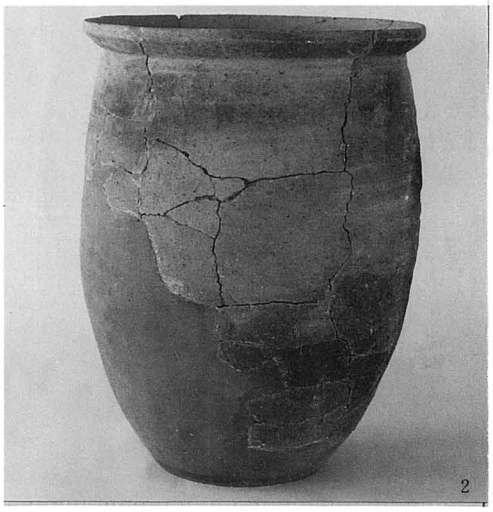
写真35　出土遺物３（土師器）

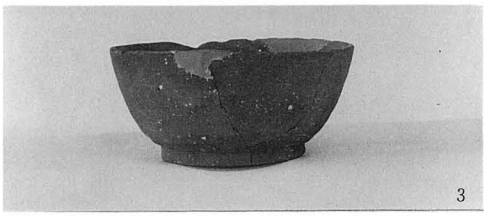


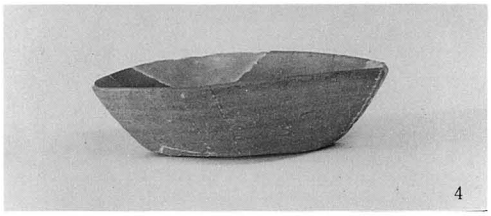
1．15—3　　7．15—6
2．15—1　　8．33—1
3．14—11　　9．33—4
4．9—10　　10．33—6
5．10—2　　11．33—7
6．9—9　　12．16—3

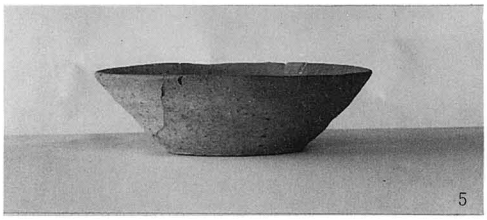
写真36　出土遺物４（赤焼土器・土師器）

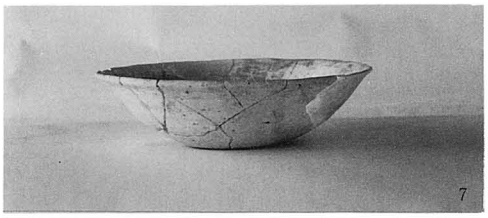


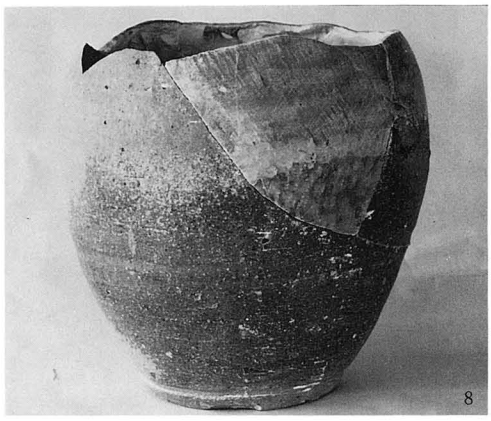


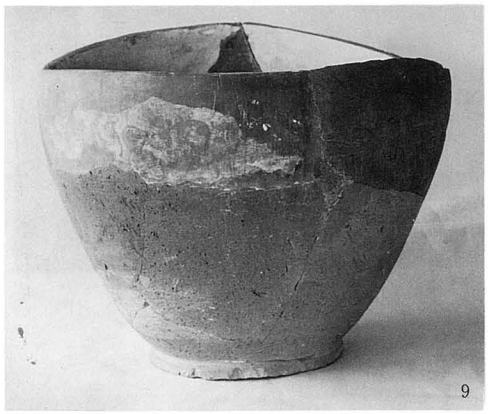






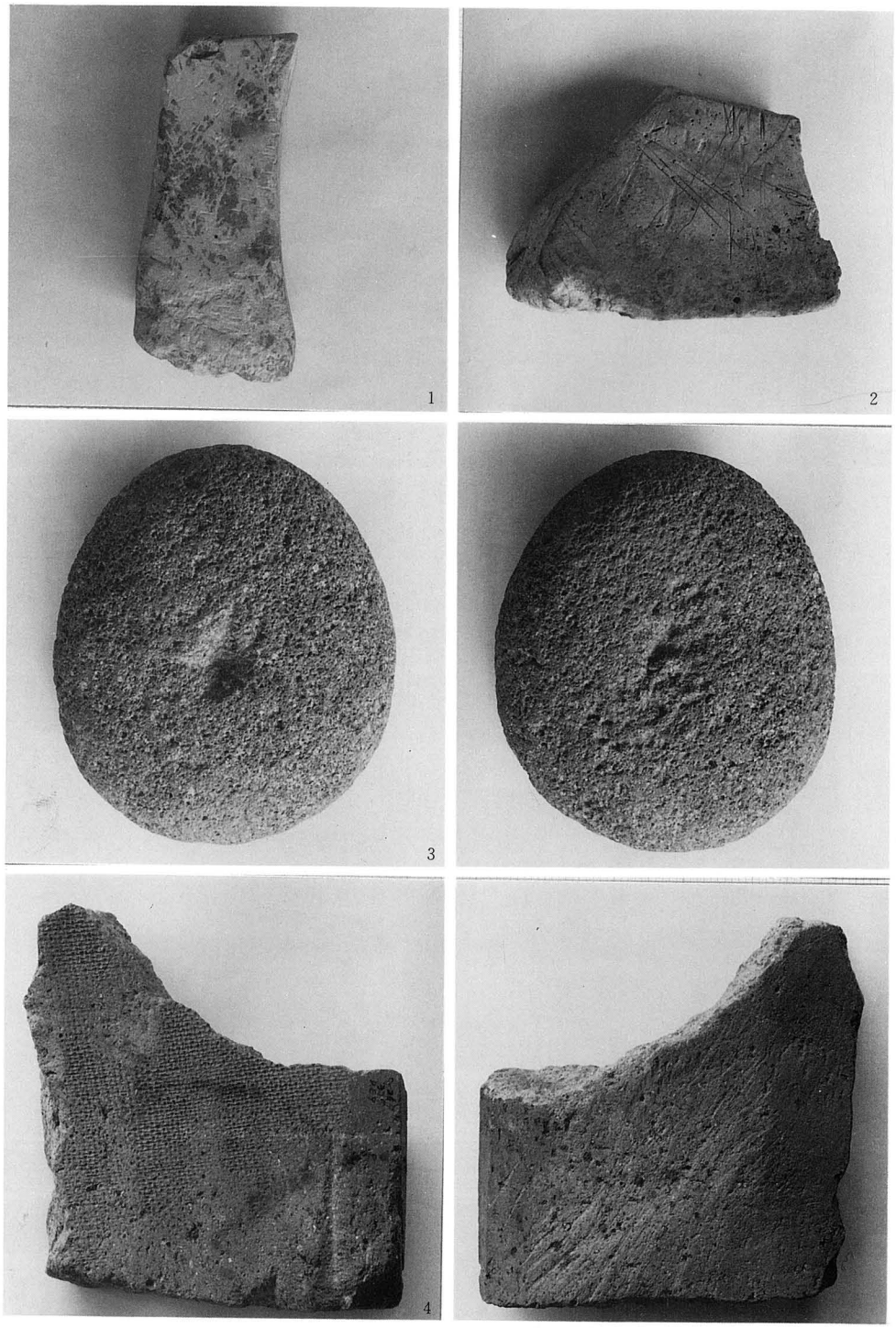






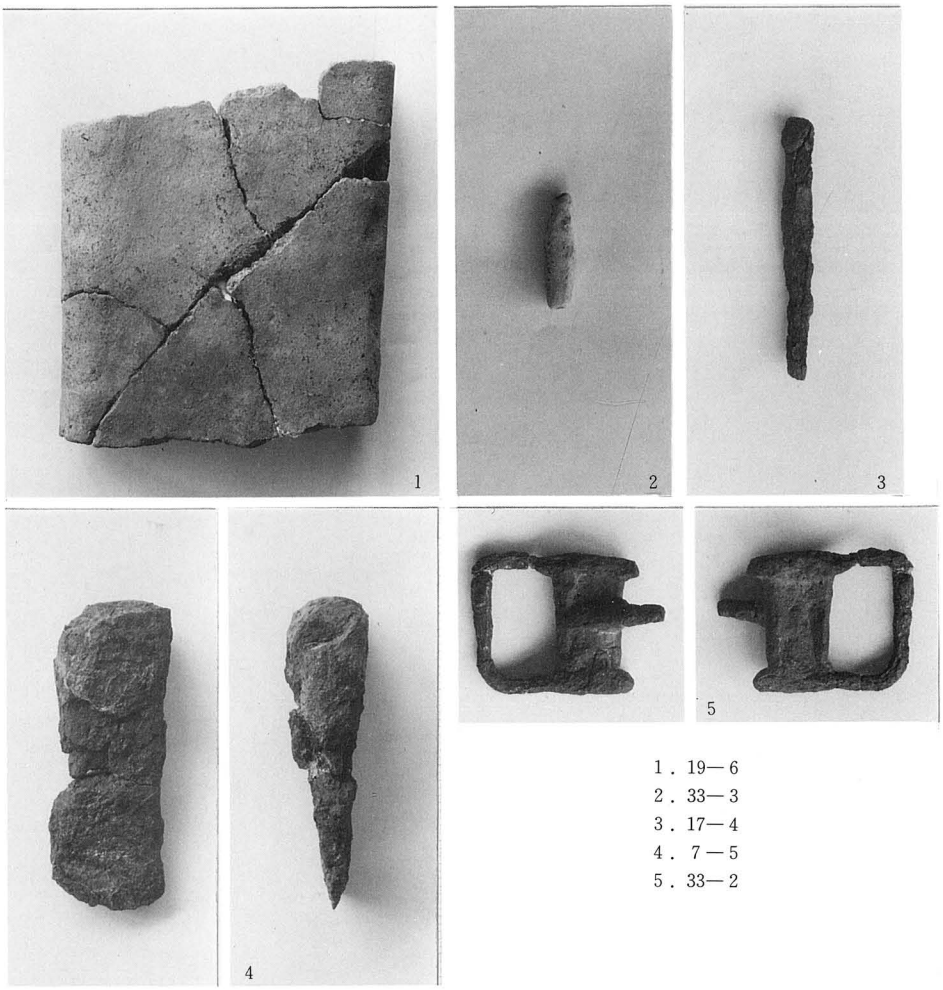
1．16—1　　6．29—10
2．17—1　　7．10—4
3．7—2　　8．10—7
4．7—1　　9．10—6
5．23—3

写真37　出土遺物５（土師器・須恵器）



1．30—7　　3．33—9
2．17—5　　4．33—8

写真38　出土遺物６（石製品・瓦）



1．19—6
2．33—3
3．17—4
4．7—5
5．33—2

写真39　出土遺物７（土製品・金属製品）

仙台市文化財調査報告書第103集

元　袋　Ⅲ　遺　跡

昭和 62 年 3 月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町 3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市立町24-24　TEL 263-1166